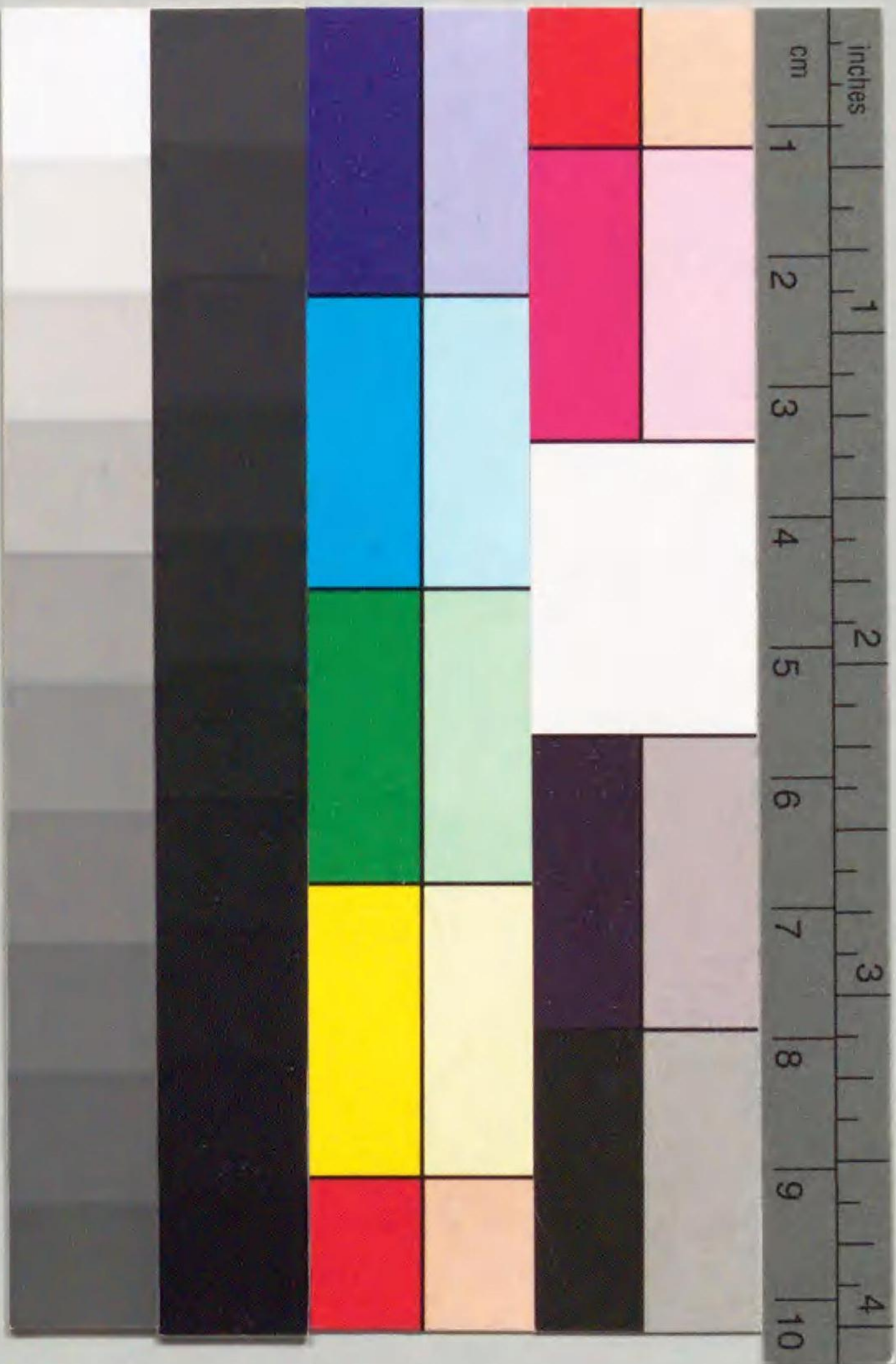


188.8  
Ko548  
K



00289598

口  
複  
写









國譯禪學大成

第九卷





289598

國譯禪學大成第九卷凡例

- 一、本大成第九卷に收載する所の書は、百丈山大智禪師語錄一卷、同じく廣錄一卷、枯崖漫錄三卷及び兀庵和尚語錄一卷の四部六卷なり。
- 一、以上の書中、百丈山大智禪師語錄及び同じく廣錄は、支那唐代の名僧洪州百丈山の  
大智禪師懷海和尚の著にして、其の一代の示衆と行事とは悉く收録せらる。本書は初  
め明の萬曆年間に刊行せし「古尊宿語錄」中に收載せられ、我が國に於ては徳川時代  
に至り、肥前長崎の僧隱峯和尚が此の明本より拔萃して刊行せし「四家語錄」中に收  
めらる。今次の國譯本は即ち此の隱峯の刊本に據れり。
- 一、枯崖漫錄は支那宋代の僧枯崖圓悟禪師の著述にして、古來、禪門七部書の一に加へら  
れ、參禪者が日常熟讀して修養の資糧に供したるものなり。而して本書は支那に於  
ては宋の咸淳八年（西紀一二七二）に開版せられ、我が國にては南北朝より足利の初  
期に於て夙に印行せられ、所謂五山版と稱して弘く世に流傳せり。今次、國譯するに  
際しては、徳川時代に印行せられし刊本に基づき、卷末の原漢文も亦之に従ふ。
- 一、兀庵和尚語錄は、鎌倉時代に來朝して足利氏の尊信を得、鎌倉建長寺第二世となりし



宋僧兀庵普寧禪師一代の語録にして、師が在宋當時の語要及び來朝後の語録・法語并に歸宋後の法語等を集めたるものなり。而して本書は室町時代に於て夙に印行せられ、所謂五山版として珍重せらる。徳川期に至りては、寶永元年に刊行せし無點本が弘く流布するも、間々寫本として傳ふ。今次、國譯するに際しては、寶永の刊本を底本となし、之に鎌倉建長寺所藏の寫本を以て校合し、一々其の異同を訂せり。脚注に「一本」とあるは即ち此の建長寺本のことなり。

一、以上三部の書は、何れも支那古尊宿の遺書にして、就中、百丈錄は其の所説深淵にして微妙、而も禪門中興の祖たる一大宗匠の示衆語の粹ともいふべく、枯崖漫錄は、また支那古尊宿の格言・妙行・入道修禪の機縁等を網羅して學者の指針に供し、いはゆる五燈の後に更に一燈を加へたるもの、兀庵錄に至りては彼の一代の硬骨老漢たる兀庵の眞面目を遺憾なく發揮すると共に、又我が禪宗二十四派の一たる兀庵派の禪風を窺ふには唯一の書たり。

昭和四年九月

編者 黃楊道人識す

### 國譯禪學大成 第九卷

#### 目次

國譯百丈山大智禪師語錄并に同廣錄解題	一一二
國譯百丈山大智禪師語錄	一一九
百丈山大智禪師語錄原文	一一五
國譯百丈廣錄	一一四
百丈廣錄原文	一一二
國譯枯崖漫錄解題	一一二



國譯枯崖漫錄序 ..... 一一四

國譯枯崖漫錄 ..... 一一〇七

枯崖漫錄原文 ..... 一一五七

國譯兀庵和尚語錄解題 ..... 一一二

國譯兀庵和尚語錄卷首 ..... 一一二

國譯兀庵和尚語錄 ..... 一一〇〇

兀庵和尚語錄原文 ..... 一一六四

國譯百丈山大智禪師語錄

國譯百丈山大智禪師廣錄

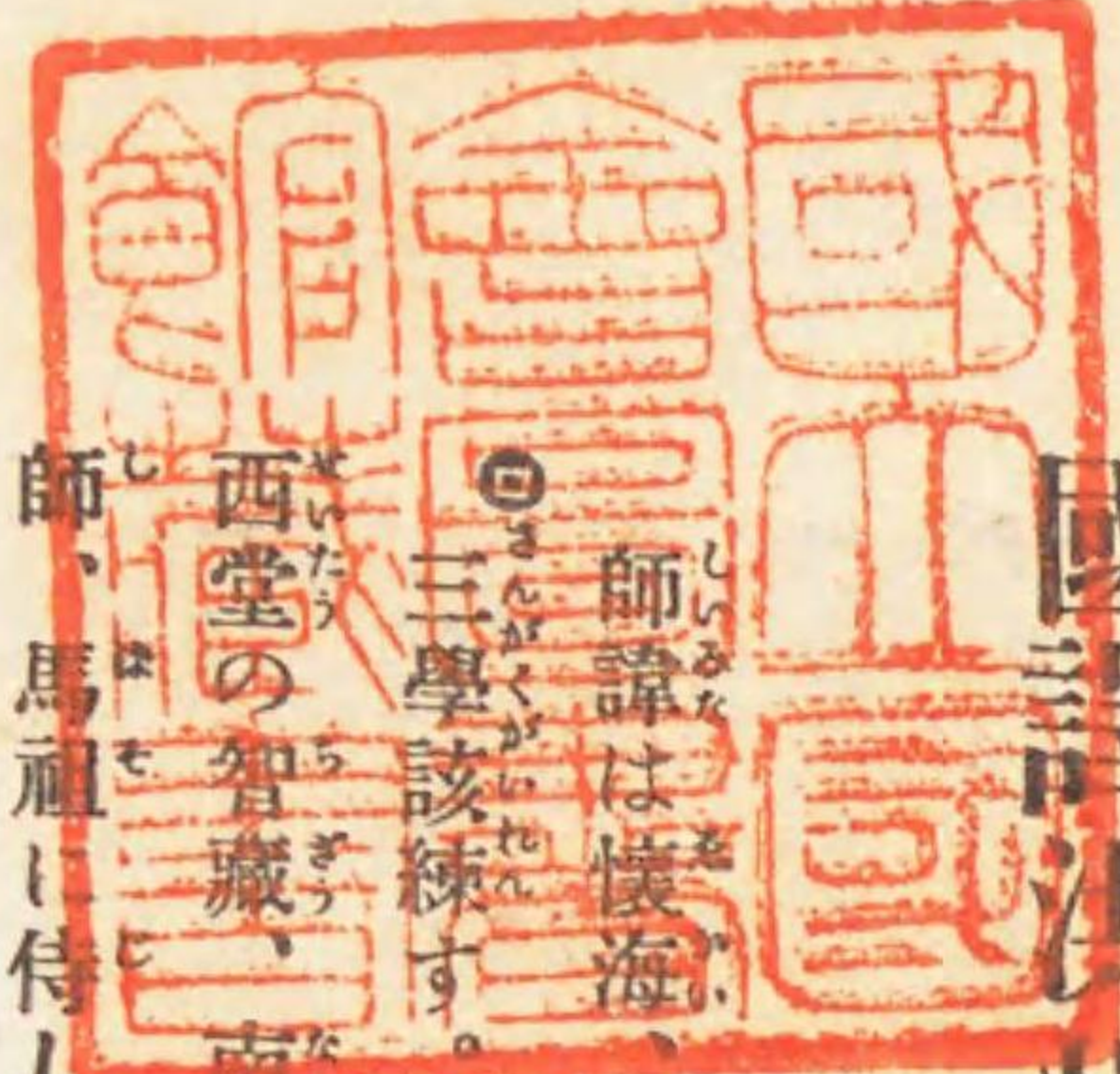
解題

百丈山大智禪師語錄及び同じく廣錄に收録せらるる語は、もと傳燈錄や五燈會元等に載する所の語なり。之が明代に至りて萬曆四十五年（我が元和三年）刊行の『古尊宿語錄』（四十八卷）中に收載せられて世に行はれしが、我が國に於ては長崎の僧隱峯が、此の明本中より馬祖・百丈・黃檗・臨濟の四家の語錄を抜いて『四家語錄』と稱して開板せり。爾來、四家語錄は禪錄中の白眉として叢林の間に珍重せらるゝ所なり。乃ち本書（百丈語錄と廣錄）は禪師一代九十五年間に於ける應機接物、其の懇篤なる示衆の語要と非凡なる行事とを網羅して遺す所なく、錄中の言々句々、總て是れ學者を啓發して修禪の規範たらしむると共に、學道の資糧として千古に崇ぶべきものなり。而して本書は語錄と廣錄との二部に分け居れども、其の内容より觀察する時は、前者は比較的、行事が多く、後者は示衆の語多し。俱に禪師の遺録にして上下の差別あるべからず、唯だ其の編者及び輯録の年代を異にするものならんも、今其の詳かならざるを遺憾となす。



傳を案するに、禪師、諱は懷海、俗姓は王氏、福州長樂（今の福建省閩海道長樂縣の地）の人なり。唐の玄宗皇帝の開元十二年（西紀七二四）を以て生る。幼にして朽宅を離れ、長じて頓門に遊ぶ。時に馬祖道一禪師、化を南康（江西省の馬祖山）に開くと聞かや、師は乃ち心を傾けて之に依附す。既にして馬祖の法を嗣ぎ、檀信の請に應じて洪州大雄山（今の江西省潯陽道奉新縣にあり）の大智禪聖禪寺に住す。山極めて高峻、吳源の水、倒出飛下すること千尺、故に百丈と名づく。師こゝに住して未だ暮月ならざるに、參玄の徒四方より輻輳して席、常に千衆に滿つ。就中、瀉山・黃檗の徒は其の衆に首たり。斯くして法門日々に盛んに、宗風大いに揚る。是に於て師は意を決して別に禪居を創建し、從來、律寺の中でありし禪宗寺院をして茲に初めて獨立せしめ、而して其の諸制度・規範を創し、宗是を一定して之を百丈清規と號す。是れ實に師は支那に於ける禪門獨立の創制者たると共に其の中興の祖と仰がるゝ所以なり。師は又作務の勞を執る毎に必ず衆に先だつ。主者密かに其の作具を收めて息はんことを請ふ。師曰く、「吾れ徳なくして争か人を勞すべき」と。已にして作具を求めて獲ざれば亦食はず。故に「一日作さざれば一日食はず」の語あり。以て師の家風の如何に眞摯にして模範的なりしかを知るに足るべし。斯くて師は唐の元和九年（西紀八一四）我が嵯峨帝の弘仁五年）正月十七日遂に寂す。壽九十有五。付法の弟子、瀉山の靈祐、黃檗の希運等二十八人、何れも膝下の神足にして法中の麟鳳たり。著はす所、本書の外に『百丈清規』二卷あり。唐の穆宗の長慶元年勅して大智禪師と謚し、塔を大寶勝輪といふ。

### 國譯洪州百丈山大智禪師語錄



師諱は懷海、福州長樂の人なり。俗姓は王氏、<sup>①</sup>卅歳にして塵を離れて三學該練す。大寂の化を江西に闡くに屬して、乃ち心を傾けて依附す。西堂の智藏、南泉の普願と同じく入室と號す。時に三大士、角立を爲す。師、馬祖に侍して行く次で、一羣の野鴨の飛び過ぐるを見て、祖曰く、「是れ甚麼ぞ。」師曰く、「野鴨子。」祖曰く、「甚れの處にか去る。」師曰く、「飛び過ぎ去る。」祖遂に頭を回して、師の鼻を將つて、一搨すれば、負痛失聲す。祖曰く、「又飛び過ぎ去ると道ふや。」師言下に於て省有り。卻つて侍者寮に歸して、哀哀として大いに哭す。同事問うて曰く、「汝父母を憶ふや。」師曰く、「無し。」曰く、「人に罵らるるや。」師曰く、「無し。」曰く、「哭して甚麼かせん。」師曰く、「我れ鼻孔を大師に搨得せられて痛み徹せず。」同事曰く、「甚の因縁有つてか契はざる。」師曰く、「汝和尚に問取し去れ。」同事、大師に問うて曰く、「海侍者、何の因縁の契はざる有つてか、寮中に在つて哭す。和尚に告ぐ、某甲が爲に説きたまへ。」大師曰く、「是れ

①卅歳。幼年に同じ。  
 ②三學。戒、定、慧なり。  
 ③入室。師の室に入りて弟子の禮をさることを云ふ、大法相傳の稱さす。これ師の居間は他人の入るべからざるころなるを以て、ここに入れりとは、内契の奥蘊を開示して、秘せざるを喻示したるもの。論語に「已に堂に入りて未だ室に入らず」の語あり、意義稍相同じ。  
 ④一搨。搨む、握るに同じ。  
 ⑤海侍者。百丈禪師なり。



伊れ會せり、汝自ら他に問取せよ。」同事、寮に歸つて曰く、「和尚道く、汝會せりと。我れをして自ら汝に問はしむ。」師乃ち呵呵大笑す。同事曰く、「適來は哭し、如今は何としてか卻つて笑ふ。」師曰く、「適來は哭し、如今は笑ふ。」同事、罔然たり。次の日、馬祖、陞堂す、衆纒に集る、師出でて席を卷せざるに、汝甚としてか便ち庶を卷卻す。師曰く、「昨夜和尚に鼻頭を拗得せられて痛みき。」祖曰く、「汝、昨日甚れの處に向つてか心を留めし。」師曰く、「鼻頭今日又痛まず。」祖曰く、「汝深く昨日の事を明む。」師禮を作して退く。「一本、馬祖云く、「爾什麼の處にか去來する」と。「昨日偶出入ありて、參隨するに及ばず」と。馬祖喝一喝す、師便ち出で去る」に作る。」

師再參して侍立する次で、祖繩牀角の拂子を目視す。師曰く、「此の用に即するか、此の用を離するか。」祖曰く、「汝、向後兩片皮を開いて何を將つてか人の爲にせん。」師拂子を取つて堅起す。祖曰く、「此の用に即するか、此の用を離するか。」師拂子を舊處に挂く。祖、威を振つて一喝す。師直に得たり三日耳聾することを。此れ自ら雷音震ふを將つて、檀信、洪州の新吳界に請じて、大雄山に住しむ、居處の巖巒峻極なるを以ての故に、百丈と號す。既に之に處ること未だ、朞月ならざるに、參玄の賓、四方より驛り至る。滄山、黃檗其の首に當る。

- ① 適來。支那の俗語、先刻の意なり。
- ② 罔然。氣ぬけて、ぼんやりしたる貌。
- ③ 陞堂。爲人接化の爲に高座に陞ること。
- ④ 檀信。檀家に同じ、又檀那とも云ふ。梵語檀那鉢 (Dāna-pātra) 施主を譯す、元來僧とも稱すべきなれども、通常在俗の内に信心あり、外に財物ありて、僧に施す人を云ふ。
- ⑤ 朞月。一ヶ月と云ふが如し。

黃檗、師の處に到つて、一日辭して云く、「馬祖を禮拜し去らんと欲す。」師云く、「馬祖已に遷化せり。」檗云く、「未審し馬祖何の言句か有りし。」師遂に再參、馬祖拂を堅つる因縁を舉げて言く、「佛法は是れ小事にあらず、老僧當時、因に馬大師に一喝せられて、直に得たり三日耳聾することを。」檗、舉するを聞いて、覺えず舌を吐く。師云く、「子、已後、馬祖に承嗣し去ること莫しや。」檗云く「然らず、今日師の擧するに因つて、馬祖の大機の用を見ることが得たり。然も且つ馬祖を識らず、若し馬祖に嗣がば、已後我が兒孫を喪せん。」師曰く、「如是如是、見、師と齊しきときは師に半徳を減ず、見、師に過ぎて方に傳授するに堪へたり。子甚だ超師の見有り。」後、滄山、仰山に問ふ、「百丈再參、馬祖豎拂の因縁、此の二尊宿の意旨如何。」仰山云く、「此れは是れ大機の用を顯す。」滄山云く、「馬祖八十四人の善智識を出す、幾人か大機を得、幾人か大用を得たる。」仰山云く、「百丈は大機を得、黃檗は大用を得たり、餘は盡く是れ唱道の師なり。」滄山云く、「如是如是。」

- ① 喪。亡ふに同じ。
- ② 滄山、仰山。前輯に出づ。
- ③ 逢着。逢ふに同じ、着は助語也。

馬祖、一日師に問ふ、「甚麼の處よりか來る。」師云く、「山後より來る。」祖云く、「還つて一人に逢著すや。」師云く、「逢著せず。」祖云く、「甚麼としてか逢著せざる。」師云く、「若し逢著せば、即ち和尚に舉似せん。」祖曰く、「甚麼の處よりか這個の消息を得來る。」師云く、「某甲が罪過。」祖云く、「卻つて是れ



老僧が罪過。

⑦ 上堂云く、「靈光獨り輝いて、迥に根塵を脱す、體露眞常、文字に拘らず、心性染無うして、本自ら圓成す、但だ妄縁を離る、即ち如如佛なり。」

問ふ、「如何なるか是れ奇特の事。」師云く、「大雄山に獨坐す。僧禮拜す、師便ち打つ。西堂、師に問ふ、「爾向後、作麼生か人に開示せん。師、手を以て卷舒兩過す。堂云く、「更に作麼生。」師、手を以て頭を點すること三下す。

馬祖、人をして書并に醬三甕を持して師に與へしむ。師、法堂の前に排向せしめて、乃ち上堂す、衆纔に集る。師、拄杖を以て醬甕を指して云く、「道ひ得ば即ち打破せじ、道ひ得ずんば即ち打破せん。」衆、語なし、師便ち打破して方丈に歸る。

⑧ 上堂。一、粥飯の時、僧堂に上るを云ふ。二、法堂に上りて演法するを云ふ。三、出世の儀式の稱。四、僧堂の上間のこと。茲は第二の場合なること勿論なり。

一僧あり、哭して法堂に入る。師云く、「何をか作す。」僧云く、「父母俱に喪す、請ふ師、日を採べ、師云く、「明日一時に埋却せよ。」

問ふ、「經に依つて義を解す、三世佛の冤、經の一字を離る、魔説に如同す、時如何。」師云く、「固く動靜を守る、三世佛の冤、此の外別に求むれば魔説に如同す。」

師、有時、説法竟りぬ、大衆堂を下る、乃ち之を召す。大衆首を回す、師云く、「是れ甚麼ぞ。」

師因に普請して田を開く、回つて運閤梨に問ふ、「田を開く易からず。槩云く、「衆僧作務す。」師云く、「道用を煩すること有り。槩云く、「爭か敢て勞を辭せん。」師云く、「多少の田をか開き得たる。」槩、田を鋤く勢を爲す、師便ち喝す、槩、耳を掩ふて出づ。

師、黃檗に問ふ、「甚れの處よりか來る。槩云く、「山下に菌子を採り來る。」師云く、「山下に一虎子有り、汝還つて見るや。」槩便ち虎聲を作す。師腰下に斧を取つて、斫る勢を作す、槩、約住して便ち掌す。師晚に至つて上堂云く、「大衆、山下に一虎子有り、汝等諸人出入に好く看よ、老僧今朝親しく一口に遭ふ。」後に瀉山、仰山に問ふ、「黃檗虎の話作麼生。仰山云く、「和尚如何。」

⑨ 運閤梨。黃檗禪師、希運は名なり、故に運閤梨といふ。

瀉山云く、「百丈に當時便ち合に一斧に斫殺せらるべし、什麼に因つてか此の如くなるに到る。」仰山云く、「然らず。」瀉山云く、「子又作麼生。」仰山云く、「唯だ虎頭に騎るのみにあらず、亦虎尾を把ることを解す。」瀉山云く、「寂子、甚だ險崖の句有り。」

師毎日上堂、常に一老人有つて法を聽く、衆に隨つて散じ去る。一日去らず、師乃ち問ふ、「立つ者は何人ぞ。」老人云く、「某甲、過去迦葉佛の時に於て、曾て此の山に住す、學人有り、問ふ、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。」對へて云く、「不落因果。」野狐身に墮在す。今請ふ、和尚一轉語を代りたまへ。」師云く、「汝但だ問へ。」老人便ち問ふ、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。」師云く、「不昧因果。」老人言下に於て大悟し、辭を師に告げて云く、「某甲已に野狐身を免れ、山後に住



在せん、乞ふ亡僧の焼送せうそうに依らんことを。師し維那ゐなをして、白槌びやくちして衆しゆに告げしむ、「齋後さいごに普請ふしんして亡僧ぼうそうを送らん」と。大衆だいしゆ詳しやうかにすると能はず、師し衆しゆを領りやうじて山後さんごの巖下がんかに至いたつて、杖つゑを以もつて一の死し狐こを挑かげ出して、乃すなはち法ほふに依よつて火葬くわさうす。晚參ばんさんに至いたつて、師し前ぜんの因縁いんねんを舉こする次ついでで、黄檗わうはく便べんち問もんふ、「古人こじん錯あやつて一轉語いつてんごを對たいへて、野狐やこ身に落らく在ざいす、今日こんにち轉轉てんてん錯あやらず、是れ如何いかん。」師し云いく、「近前來きんぜんらい、汝なんぢに向むかつて道いはん。」黄檗わうはく近きん前ぜんして師しを打うつこと一掌いつしやうす、師し、手てを拍うつて笑わらつて云いはく、「將まさに謂おもへり胡鬚こしゆ赤しやくと、更さらに赤鬚しやくしゆあることを。」時ときに瀉山しゃさん、會下ゑかに在あつて、典座てんざと作なる。司馬し馬頭陀ばだうた、野狐やこの話わを舉こして問もんふ、「典座てんざ作なる。」典座てんざ、手てを以もつて門扇もんせんを撼うごかすこと三下さんげ、司馬し馬頭陀ばだうた云いく、「太龜生たいきせい。」典座てんざ云いく、「佛法ぶつぽふは是れ這箇しやんごの道理だうりにあらず。」後のちに瀉山しゃさん、黄檗わうはく野狐やこの話わを問もんふを舉こして仰山きやうざんに問もんふ、仰山きやうざん云いく、「黄檗わうはく常つねに此この機きを用もちふ。瀉山しゃさん云いく、「汝道なんぢぢへ、天生てんせい得えるか、人ひとより得えるか。」仰山きやうざん云いく、「亦是またれ師承しじやうを稟受りんじゆし、亦是またれ自ら宗通しゆつうす。」瀉山しゃさん云いく、「如是に如是に。」黄檗わうはく問もんふ、「從上じゆうじやうの古人こじん、何なんの法ほふを以もつてか人ひとに施ほこす。」師し良久しりやうきうして未だ語らざるに、黄檗わうはく云いく、「後代ごだいの兒孫じそん、何なんを將まさつてか傳授でんじゆせん。」師し云いく、「將まさに謂おもへり、爾這なんぢこの漢かん、是れ箇ごの人ひとと。」便すなはち方丈はうじやうに歸かへる。

① 維那。役の名、六知事の一、第四位なり、僧堂の内外、衆僧の進退、其の一を統理監査して、一會無事、修行満足ならしむるを以て、維那の本分とするなり。  
② 白槌。白は事を告ぐる意、槌は撃つて響を爲す具、禪林凡そ事を報ずるには白槌の法による。  
③ 典座。六知事の一、衆僧の辨食を掌る役。  
④ 太龜生。太は甚だ、龜は熟せざること、生は助字なり。太龜生は參學未熟にして、行爲の慎重を缺く者を罵る語。

師し、瀉山しゃさんと作務さむする次ついでで、師し問もんふ、「火ひありや也な無なや。」瀉山しゃさん云いく、「有あり。」師し云いく、「什麼しつじやの處ところにか在ある。」瀉山しゃさん一莖いつきやうの柴しばを把さつて、吹ふいて師しに過與くわいよす。師し、接過せつくわして云いはく、「蟲むしの木きを蝕くむが如ごとし。」因ちなみに普請ふしんして地ちを鋤すく次ついでで、僧そうあり、鼓聲こせいを聞きいて鋤頭じよざうを舉こ起きして、大笑たいしやうして歸かへり去さる。師し云いく、「俊しゆんなるかな、此これは是れ觀音くわんおん入理にふりの門もんなり。」後のちに其そのの僧そうを喚よんで問もんふ、「爾なんぢ、今日こんにち何なんの道理だうりをか見みる。」云いはく、「某甲そがし早晨さうじん、未だ粥しゆくを喫きせず、鼓聲こせいを聞きいて歸かへつて飯はんを喫きす。」師し乃すなはち呵か呵か大笑たいしやうす。問もんふ、「如何いかなるか是れ佛ほとけ。」師し云いく、「汝なんぢは是れ阿誰たぞ。」云いはく、「某甲そがし。」師し云いはく、「汝なんぢ、某甲そがしを識しるや否いなや。」云いはく、「分明ぶんめい箇ご。」師し、拂子ほつすを豎起しやくきして問もんふ、「汝なんぢ拂子ほつすを見るや否いなや。」否いなく、「見る。」師し乃すなはち語かたらず。師し、僧そうをして、章敬しやうけいの處ところに去さらしめて、「伊いが上堂じやうだう說法せつぽふせんを見て、爾なんぢ便べんち坐具ざきを展開てんかいして禮拜らいはいして、起たつて一雙いつしやうの鞋あひを將もちひて、袖そでを以もつて上塵じやうぜんを拂ふ御ごして、倒たふれに頭かぶに覆おほふて下くだれ」といふ。其そのの僧そう、章敬しやうけいに到いたつて、一ひとへに師しの旨ねんに依よる、章敬しやうけい云いく、「老僧らうそうが罪過ざいご。」

① 瀉山。五峰、雲巖、侍立する次で、師問ふ、「瀉山咽喉唇吻を併却して、速に道みちひ將まさち來きたれ。」瀉山云く、「某甲道ふこと得ず、請ふ和尚道へ。」師曰く、「汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後、我が兒孫を喪せんことを。」又五峯に問ふ、峯云く、「和尚亦須らく併却すべし。」師云く、「人なき處に

① 章敬。馬祖に嗣ぐ、泉州の人、唐の元和の初め、憲宗詔して上玄寺に居らしむ、元和十三年十二月二十二日寂す。  
② 伊。彼に同じ。  
③ 瀉山。靈祐、百丈に嗣ぐ。  
④ 五峯。常觀、百丈に嗣ぐ。  
⑤ 雲巖。曇晟、藥山に嗣ぐ。



④ 斫額して汝を望まん。又雲巖に問ふ、巖云く、「某甲、道ふ處あり、請ふ和尚舉せ。師云く、「咽喉唇物を併却して、速に道ひ將ち來れ。巖云く、「師今有りや也た未だしや。師云く、「兒孫を喪す。」上堂、衆に謂つて云く、「我れ一人を去らしめて、西堂和尚に傳語せんことを要す、阿誰か去り得ん。五峯云く、「某甲去り得ん。師云く、「汝作麼生か傳語せん。峰云く、「西堂に見えんを待つて即ち道はん。師云く、「見て後什麼とか道はん。峰云く、「卻り來つて和尚に舉似せん。」因に僧問ふ、「西堂問あり答あるは、即ち且く置く、無問無答の時如何。」堂云く、「爛卻することを怖る那。師、擧するを聞いて乃ち曰く、「從來、這箇の老兄を疑ふ。」云く、「請ふ和尚道へ。師曰く、「一合相不可得。」

師、衆に謂つて曰く、「一人あり、長く飯を喫せざれども、饑うることを道はず、一人あり、終日飯を喫すれども、飽くことを道はず。衆對なし。」

雲師、和尚に問ふ、「毎日區區として阿誰が爲にかす。師曰く、「一人の要するあり。巖云く、「什麼に因つてか伊をして自ら作さしめざる。師曰く、「他、家活なし。」

師、童年の時、母に隨つて寺に入つて佛を拜す、尊像を指して母に問ふ、「此れは是れ何物ぞ。」母云く、「是れ佛なり。」童云く、「形容、人に似て、我

④ 斫額。額をうつこさなり。  
 ⑤ 西堂。智藏、馬祖の法嗣。  
 ⑥ 舉似。會元、傳燈、共に「説似」さなす。  
 ⑦ 寰宇。宇宙又は天下さ云ふが如し。

れに異なること無し、後亦當に作るべし焉。」

師、凡に作務して勞を執ること必ず衆に先つ、衆皆忍びず、蚤に作具を收めて息んぜんことを請ふ。師云く、「吾れ徳無うして争か人を勞すべき。師既に徧く作具を求むれども獲ずして、而も亦食を忘す。故に、「一日作さざれば一日食はず」との言有つて、寰宇に流播す矣。師唐の元和九年正月十七日に於て示寂す、春秋九十五、長慶元年勅して大智禪師と諡す。塔を大勝寶輪と曰ふ。

⑦ 元和九年。唐の憲宗の年號、日本の嵯峨天皇弘仁五年に當る、この年仰山寂は韶州に生る、この四年後章敬禪寂す。百丈は唐の玄宗開元八年閩州に生る、日本の元正天皇養老四年なり。

國譯洪州百丈山大智禪師語錄 終



## 洪州百丈山大智禪師語錄

師諱懷海，福州長樂人也。俗姓王氏，卅歲離塵，三學該練，屬大寂闡化江西，乃傾心依附，與西堂智藏、南泉普願同號入室。時三大士爲角立焉。師侍馬祖行次，見一羣野鴨飛過，祖曰：「甚麼？」師曰：「野鴨子。」祖曰：「甚處去也？」師曰：「飛過去也。」祖遂回頭，將師鼻一拗，負痛失聲。祖曰：「又道飛過去也。」師於言下有省，卻歸侍者寮，哀哀大哭。同事問曰：「汝憶父母邪？」師曰：「無。」曰：「被人罵，邪？」師曰：「無。」曰：「哭作甚麼？」師曰：「我鼻孔被大師拗得，痛不徹。」同事曰：「有甚因緣不契？」師曰：「汝問取和尚去。」同事問：「大師曰：海侍者，有何因緣不契？」在寮中哭，告和尚，爲某甲說。大師曰：「是伊會也。」汝自問取他。」同事歸寮曰：「和尚道：汝會也。」令我自問。汝師乃呵呵大笑。同事曰：「適來哭，如今爲甚？」卻笑。師曰：「適來哭，如今笑，同事罔然。」次日，馬祖陞堂，衆纔集，師出卷卻席。祖便下座，師隨至。方丈，祖曰：「我適來未曾說話，汝爲甚便卷卻席？」師曰：「昨日被和尚拗得鼻頭痛。」祖曰：「汝昨日向甚處留心？」師曰：「鼻頭今日又不痛也。」祖曰：「汝深明。」昨日事，師作禮而退。一本作：「馬祖云：爾什麼處去來？」昨日偶有出入，不及參隨，馬祖喝一喝，師便出去。」

師再參侍立次，祖目視繩牀角拂子，師曰：「卽此用。」離此用。祖曰：「汝向後開兩片皮，將何爲人？」師取拂子，豎起。祖曰：「卽此用。」離此用。師挂拂子於舊處。祖振威一喝，師直得三日耳聾。自此雷音將震，檀信請於洪州新吳界住。大雄山，以居處巖巒峻極，故號百丈。旣處之未朞月，參玄之賓



四方響至，滄山黃檗當其首。

黃檗到師處，一日辭云：欲禮拜馬祖去。師云：馬祖已遷化也。檗云：未審馬祖有何言句。師遂舉再參。馬祖豎拂因緣，言佛法不是小事。老僧當時因被馬大師一喝，直得三日耳聾。檗聞舉，不覺吐舌。師云：子已後莫承嗣馬祖去。檗云：不然。今日因師舉，得見馬祖大機之用。然且不識馬祖，若嗣馬祖，已後喪我兒孫。師曰：如是如是。見與師齊，減師半德。見過於師，方堪傳授。子甚有超師之見。後滄山問仰山：百丈再參馬祖豎拂因緣，此二尊宿意旨如何。仰山云：此是顯大機之用。滄山云：馬祖出八十四人善智識，幾人得大機。幾人得大用。仰山云：百丈得大機，黃檗得大用。餘者盡是唱道之師。滄山云：如是如是。

馬祖一日問師：甚麼處來。師云：山後來。祖云：還逢著一人麼。師云：不逢著。祖云：爲甚麼不逢著。師云：若逢著，卽舉似和尚。祖云：甚麼處得這個消息來。師云：某甲罪過。祖云：卻是老僧罪過。上堂云：靈光獨耀，迥脫根塵。體露真常，不拘文字。心性無染，本自圓成。但離妄緣，卽如如佛。問：如何是奇特事。師云：獨坐大雄山，僧禮拜。師便打。西堂問師：爾向後作麼生。開示於人。師以手卷舒兩過。堂云：更作麼生。師以手點頭三下。

馬祖令人持書并醬三甕與師。師令排向法堂前。乃上堂。衆纔集，師以拄杖指醬甕云：道得卽不打破，道不得卽打破。衆無語。師便打破歸方丈。

有一僧哭入法堂。師云：作什麼。僧云：父母俱喪，請師揀日。師云：明日一時埋却。

問：依經解義，三世佛冤。離經一字，如同魔說。時如何。師云：固守動靜，三世佛冤。此外別求，如同

魔說。

師有時說法竟，大衆下堂，乃召之。大衆回首，師云：是甚麼。

師因普請開田，回問運閘梨。開田不易。檗云：衆僧作務。師云：有煩道用。檗云：爭敢辭勞。師云：開得多少田。檗作鋤田勢。師便喝。檗掩耳而出。

師問黃檗：甚處來。檗云：山下採菌子來。師云：山下有一虎子，汝還見麼。檗便作虎聲。師於腰下取斧，作斫勢。檗約住便掌。師至晚上堂云：大衆，山下有一虎子，汝等諸人出入好看。老僧今朝親遭一口。後滄山問仰山：黃檗虎話作麼生。仰山云：和尚如何。滄山云：百丈當時便合一斧斫殺。因什麼到如此。仰山云：不然。滄山云：子又作麼生。仰山云：不唯騎虎頭，亦解把虎尾。滄山云：寂子甚有險崖之句。

師每日上堂，常有一老人聽法。隨衆散去，一日不去。師乃問立者何人。老人云：某甲於過去迦葉佛時，曾住此山，有學人問大修行底人，還落因果也無。對云：不落因果，墮在野狐身。今請和尚代一轉語。師云：汝但問老人便問。大修行底人，還落因果也無。師云：不昧因果。老人於言下大悟，告辭。師云：某甲已免野狐身。住在山後，乞依亡僧燒送。師令維那白槌告衆。齋後普請，送亡僧。大衆不能詳。師領衆至山後巖下，以杖挑出一死狐，乃依法火葬。至晚參，師舉前因緣次。黃檗便問：古人錯對一轉語，落在野狐身。今日轉轉不錯，是如何。師云：近前來。向汝道。黃檗近前打師一掌。師拍手笑云：將謂胡鬚赤，更有赤鬚胡。時滄山在會下，作典座。司馬頭陀舉野狐話問。典座作麼生。典座以手撼門扇三下。司馬云：太龜生。典座云：佛法不是這箇道理。後滄山



舉黃檗問野狐話問仰山仰山云黃檗常用此機滄山云汝道天生得從人得仰山云亦是稟受師承亦是自宗通滄山云如是如是

黃檗問從上古人以何法施人師良久未語黃檗云後代兒孫將何傳授師云將謂爾這漢是箇人便歸方丈

師與滄山作務次師問有火也無滄山云有師云在什麼處滄山把一莖柴吹過與師師接過云如蟲蝕木

因普請鋤地次有僧聞鼓聲舉起鋤頭大笑歸去師云俊哉此是觀音入理之門後喚其僧問爾今日見甚道理云某甲早晨未喫粥聞鼓聲歸喫飯師乃呵呵大笑

問如何是佛師云汝是阿誰云某甲師云汝識某甲否云分明箇師豎起拂子問汝見拂子否云見師乃不語

師令僧去章敬處見伊上堂說法爾便展開坐具禮拜起將一隻鞋以袖拂卻上塵倒頭覆下其僧到章敬一依師旨章敬云老僧罪過

滄山五峰雲巖侍立次師問滄山併卻咽喉唇吻速道將來滄山云某甲道不得請和尚道師曰不辭向汝道恐已後喪我兒孫又問五峰峯云和尚亦須併卻師云無人處斫額望汝又問雲巖巖云某甲有道處請和尚舉師云併卻咽喉唇吻速道將來巖云師今有也未師云喪兒孫

上堂謂衆云我要一人去傳語西堂和尚阿誰去得五峰云某甲去得師云汝作麼生傳語峯

云待見西堂即道師云見後道什麼峯云卻來舉似和尚

因僧問西堂有問有答即且置無問無答時如何堂云怕爛卻那師聞舉乃曰從來疑這箇老兄云請和尚道師曰一合相不可得

師謂衆曰有一人長不喫飯不道饑有一人終日喫飯不道飽衆無對

雲巖問和尚每日區區爲阿誰師曰有一人要巖云因什麼不教伊自作師曰他無家活

師童年之時隨母入寺拜佛指尊像問母此是何物母云是佛童云形容似人無異我後亦當作焉

師凡作務執勞必先於衆衆皆不忍蚤收作具而請息之師云吾無德爭合勞於人師既徧求作具不獲而亦忘食故有一日不作一日不食之言流播寰宇矣師於唐元和九年正月十七日示寂春秋九十五長慶元年勅諡大智禪師塔曰大勝寶輪

洪州百丈山大智禪師語錄 終



國譯百丈廣錄

「夫れ語は須らく、細素を辯ずべし。須らく總別の語を識るべし。須らく了義不了義教の語を識るべし。了義教は清を辯じ、不了義教は濁を辯ず。穢を説くも法邊の垢、凡を揀んで淨を説くも法邊の垢、聖を揀ふには九部の教に従つて説く。向前の衆生、眼無くんば、須らく人の雕琢を假るべし。若し聲俗の人の前に於て説かば、直に渠をして出家し、戒を持し禪を修し、慧を學ばしむべし。若し是れ過量の俗人ならば、亦他に向つて、與麼に説くことを得ず、維摩詰・傳大士等の類の如し。若し沙門の前に於て説かば、他の沙門は已に白四羯磨を受け訖つて、具足全し、是れ戒定慧の力なり。更に它に向つて與麼に説かば、非時語説と名けん。時に應ぜざるも亦綺語と名く。若し是れ沙門ならば、須らく淨法邊の垢を説くべし、有無等の法を離れ、一切修證を離れ、亦離を離るることを説くべし。若し沙門中に於て、習染を剝除せんに、沙門、貪嗔の病を除き去らずんば、亦聲俗と名く。亦須らく渠

國譯百丈廣錄

① 細素。猶ほ黑白の如し、又僧俗に比す。  
② 九部の教。十二分教の中、方廣、受記、無問自説を除きたる九部を云ふものにして、之れを小乘九部經と云ふ。  
③ 與麼。如是の意なり。  
④ 維摩詰・傳大士。維摩詰は、釋尊と時代を同じうして、菩薩の道を行ぜり。故に維摩居士と號す。彼の維摩の一默雷の如しとは是れなり。傳大士は梁の武帝の時の人なり、首楞嚴三昧を得て、松山の頂に寺を創めて之れに居る、世に雙林大士と云ふ。



をして、禪を修し慧を學ばしむべし。若し是れ二乗の僧ならば、他は貪嗔の病を歇得し去つて、盡く無貪に依住して、將つて是と爲す、是れ二無色界なり。是れ佛光明を障へ、是れ佛身血を出す、亦須らく渠をして禪を修し、慧を學ばしむべし。須らく清濁の語を辯ずべし。濁法といふは貪嗔愛取等の多名なり、清法といふは菩提涅槃解脫等の多名なり。只だ如今の鑑覺は、但だ清濁の兩流、凡聖等の法、色聲香味觸法、世間出世間の法に於て、都べて纖毫の愛取有ることを得ず。既に愛取せずして、不愛取に依住して將つて是となす。是れ初善なり、是れ調伏の心に住す。是れ聲聞の人、是れ後を戀ふて捨てざる人、是れ二乗道、是れ禪那の果なり。既に愛取せずして、亦不愛取にも依住せざる、是れ中善なり、是れ半字教、猶ほ是れ無色界なり。二乗道に墮することを免れ、魔民道に墮することを免るるも、猶ほ是れ禪那病、是れ菩薩縛なり。既に不愛取に依住せず、亦不依住の知解を作さざる、是れ後善なり。是れ滿字教、無色界に墮することを免れ、禪那病に墮することを免れ、菩薩乘に墮することを免れ、魔王位に墮することを免るるも、智障・地障・行障を爲すが故に、自己の佛性を見

●白羯磨。羯磨、業、所作、辨事等の譯あり、天台の禪門、翻して作法となす、一切の羯磨四法を具すべし。一には法、二には事、三には人、四には界なり、第一に法は羯磨に三種あり、一には心念の法なり、二には對首の法なり、三には衆法なり、四人已上にして羯磨を乘り、五羯磨を以て前の單白に通ず、故に白四と云ふ云云。(百論)  
綺語。猶ほ巧言の如く、佛教戒の一なり。  
●無色界。慾界、色界と共に三界の一なり。  
●貪嗔。佛法、根法煩惱にて、痴を加へて三毒と云ふ。愛及び取りは、三藏に明す所の十二因緣、又は十二緣起支の中の一なり。  
●三乘道。聲聞、圓覺の二道、即ち小乘教なり。

ると、夜色を見るが如し。佛地二愚を斷ずと云ふが妃きんば、一には微細所智愚、二には極微細所智愚なり。故に云ふ、大智の人有つて、塵を破つて經卷を出すと、若し三句を透得過して、三段の管を被らす、教家擧げて、喩へば鹿の三び跳つて網を出づるが如くならば、喚んで纏外佛と作さん。物として渠を拘繫し得るなし。是れを然燈後の佛に屬すれば、是れ最上乘、是れ上上智にして、是れ佛道上に立たり。此の人は是れ佛、佛性あり、是れ導師、是れ無所礙の風を使ひ得たり。是れ無礙の慧にして、後に於て能く因果の福智を使ひ得て自由なり、是れを車運載因果と作す。生に處しても生の所留を被らず、死を處しても死の所礙を被らず、五陰に處しても門の開くるが如くにして、五陰の礙を被らず、去住自由出入難なし。若し能く與麼ならば、階梯勝劣、乃至蟻子の身を論ぜず、但だ能く與麼ならば、盡く是れ淨妙國土にして、不可思議なり。此れ猶ほ是れ縛を解する語なり。彼れ自ら瘡なく傷なきなり。佛瘡菩薩等の瘡は、但だ有無等の法のみを説く、盡く是れ傷なり、有無は一切の法を管す。十地は是れ濁流河の衆、清流説を作して清相を堅て、濁の過患を説く。向前の十大弟子、含

●三句。人天眼目上に曰く、「師因に僧問ふ、如何か是れ眞佛、善法、眞道、乞ふ、開示を垂れよ。師曰く、(一)佛は心清淨是れなり、(二)法は心清淨は心光明是れなり、(三)道は云ふは、處々無礙淨光是れなり、三即一、皆空名にして實有なし。眞正の道人の如きんば、念々問斷せず。達磨大師の西來只だ是れ箇の人、或は受けざる底の人を覓む、後二祖に遇ふ。一言にして便ち了じて、始めて知る、從前虚しく工夫を用ひることを、山僧今日、見所佛祖と別たす、第一句の中に、薦得せば、佛祖の與めに師となるに堪へん、二句の中に、薦得せば、人天の師となるに堪へん、若し三句の中に、薦得せば、自救不了也。  
●五陰。五蘊に同じ。  
●四禪。四禪天のことなり。



利弗・富樓那、正信阿難、邪信善星等、箇箇勝樣あり、箇箇則候あり、一一導師の説破を被る。是れ 四禪 八定の阿羅漢等の定に住すること、八萬劫するにあらず、他は是れ所行に依執して、淨法の酒醉を被るが故に、聲聞の人は佛法を聞いても、無上の道心を發すること能はず、所以に斷善根の人佛性なし。教に云く、「喚んで解脫深坑畏る可きの處と作す、」一念心退けば地獄に墮する、猶ほ箭の射るが如し。亦一向に退と説くことを得ず、亦一向に不退と説くことを得ず。祇だ文殊・觀音・勢至等の如きんば、卻つて須陀洹地に來つて、類を同じうして誘引すれども、他は退と言ふことを得ず。與麼の時に當つて、祇だ喚んで須陀洹の人と作す、祇だ如今の鑑覺は但だ一切有無の諸法管を被らず、三句を透り、及び一切逆順透得過して、千百萬億の佛、世間に出でたまふと聞けども、聞かざるが如くに相似て、亦不聞に依住せず、亦不依住の知解を作さず。他這箇の人、退と説くことを得ず、量數も他を管すること著す、是れ佛常に世間に住して世法に染せざるなり。佛法輪を轉じて退くと説かば、亦れ佛法僧を謗す。佛法輪を轉せず退かずと説かば、亦是れ佛法僧を謗す。肇云く、「菩提の道は、圖度すべからず、高うして上無く、廣うして極む可からず、淵にして下無く、深うして測る可からず。」

- ① 八定。初禪近分定、二禪近分定、三禪近分定、四禪近分定、悲想非非想定、無所右所地近分定、識無邊所地近分定、空無邊處地近分定の八定、是れなり。
- ② 須陀洹。四向四果の略、預流、入流、逆流を譯す、三界の見惑を斷じ盡し、初めて聖者の流類に預り入りし位にして、見道十五心の後、第十六心、即ち脩道に入りたる位なり。
- ③ 法輪。說法化他の行なり。
- ④ 肇。法師は羅什の弟子、肇論等を著す。

語は也た梁生つて箭を招く。言ふは鑑覺は猶ほ是れ濁に從つて清を辯ず、如今の鑑覺は是れ鑑覺を除いて、外別に有りと説くことを許さず、盡く是れ魔説なればなり。若し如今の鑑覺を守住するも、亦魔説に同じ、亦自然の外道と名く。如今の鑑覺は、是れ自己佛と説かば、是れ尺寸の語、是れ圖度の語、野干鳴に似て、猶ほ粘膠門に屬す。本來自知自覺を認めざる、是れ自己佛なり、外に向つて馳求して佛を覓むれば、假に善智識、自知自覺を説き出して、藥と作して箇の外に向つて馳求する病を治す。既に外に向つて馳求せざれば病も瘥ゆ、須らく藥を除くべし。若し自知自覺を執住せば、是れ禪那病、是れ 徹底聲聞なり。水の氷と成るが如きんば、全く氷、是れ水なれども、渴を救ふに望み難し。亦云く、「必死の病、世醫手を拱す。始めより是れ佛にあらずといふことなし、佛の解を作すこと莫れ、佛は是れ衆生邊の藥、無病なれば喫することを要せず。藥病俱に消すれば、喩へば清水の如し、佛は甘草に似たり、水に和すれば亦密の如し、水に和すれば極めて是れ甘美なり。若し清水邊に同じうすること 數すれば則ち著す、是れ無きにあらず、是れ本有なり。」亦云く、「此の理は是れ諸人の本有なり、諸佛菩薩、喚んで珠を人に示すと作す。從來是れ箇の物にあらず、渠を知り渠を解することを用ひず、渠を是とし渠を非とすることを用ひず。但だ兩頭の句を割斷するのみ。有句不有句を割斷し、無句不無句を割斷すれば、兩頭の迹現せず、兩頭汝を提ぐることを著す。量數も汝を

- ① 野干。狐なり。
- ② 徹底。傳燈錄に、河を渡るに象は徹底して渡る云ふより出づ。



管すること得ず。是れ欠少するにあらず。是れ具足するにあらず、凡に非ず聖に非ず、明に非ず暗に非ず、是れ有知にあらず、是れ無知にあらず、是れ繫縛にあらず、是れ解脱にあらず、是れ一切の名目にあらず。何を以てか是れ實語にあらざるとならば、若しくは虚空を雕琢して、佛の相貌を作し得たりと爲し、若しくは虚空を道ふて、是れ青黃赤白と作し得たりと説くことを爲す。法は比あること無く、喩ふべき無きが故に、法身無爲、諸數に墮せずと云ふが如し。故に聖體名なし、説く可からず。實理は空門の湊し難きが如しと云ふ。喩へば太末蟲の處處に能く泊れども、唯だ火燄の上に泊ること能はざるが如し。衆生も亦爾り、處處に能く縁ずれども、唯だ般若の上に縁すること能はず。善智識に參じて、一知一解を求覓す、是れ善智識の魔なり。語見を生ずるが故に、若し四弘誓願を發して、願ふて一切衆生を度し盡して、然して後、我れ始めて成佛せんとならば、是れ菩薩法智の魔なり。誓願相捨てざるが故に、若し齋戒を持し禪を修し慧を學ばば、是れ有漏の善根なり。縦然ひ道場に坐して、成等正覺を示現して、恒沙數の人を度して、盡く辟支佛果を證せしむるも、是れ善根の魔

①法身。法身とは三身の一人なり。即ち法身、應身、報身と合せて三者をなす。有佛、無佛、性相常念なる盧遮那如來これなり。

②般若。智慧なり、實相眞相の照現なり、故に大千世の萬象、皆此の中に包含せらるるを以て、其の廣大無邊なるを知るべし。

③四弘誓願。修道者が佛道修業のために起す四の願望なり、衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成、是れなり。

④辟支佛。單に支佛とも云ふ、獨覺、又は緣覺と譯す、緣覺は佛在世に出づるもの、十二因縁を觀じて覺悟し、獨覺は無佛世界に出てて飛花落葉を觀じて無師、獨悟するの謂なり。

なり。貪著を起すが故に、若し諸法に於て、都へて貪染なく、神理獨り存して、甚深禪定に住して、更に昇進せずんば、是れ三昧の魔なり。久しく耽翫するが故に、上涅槃に至るまで、離かに寂靜ならんと欲せば、是れ魔業なり。若し智慧、若干の魔網を脱し去らざれば、縦ひ百本の韋陀經を解するも、盡く是れ地獄の滓なり。若し覺めて佛の如くに相是んとならば、是の處り有ること無し。如今聞説らく、一切善惡有無等の法に著せざれば、即ち空に墮つると爲す、知らず本を棄て末を逐ふは、卻つて是れ墮空なることを。佛を求め菩提及び一切有無等の法を求むるは、是れ本を棄て末を逐ふなり。祇だ如今糞食、命を助け破を補ひ寒を遮り、渴すれば則ち水を掬して喫す、餘外但だ是れ一切有無等の法、都べて纖毫の繫念無くんば、此の人漸く輕明の分有り。善智識は有を執らず無を執らず、十句の魔語を脱得して、語を出して人を繫縛せず、所有る言説は自ら師説と稱せず、

⑤離。明なり。  
⑥韋陀典。又は韋陀典、梵語 Yajna 智と譯す、印歐語系中最古の文獻にして、特に印度に於ける最古の聖地なり。少くとも四千年間、天啓文學として尊重せらるるものなり。アリヤ族が印度に入りし以來の人文的、殊に宗教的活動を悉くこれによりて知るべし。

谷の響くが如くにして、言天下に滿つれども口過なし、依止するに堪へたり。若し我れ能く説き能く解すと道ふて、我れは是れ和尚、汝は是れ弟子と説かば、這箇、魔説に同じ。端なく道を説いて、目撃して道ふ、是れ佛なることを存せよと。是れ佛、是れ菩提涅槃解脱等にあらず、端なく一知一解の見を説いて、一手を舉し一指を豎てて云く、是れ禪是れ道と。這箇の語、人を繫縛して未だ住する時



有らざるに、祇だ是れ重ねて 比丘の繩索を増す。縦然ひ説かざるも亦口過あり、寧ろ心に師と作ら  
 んや。心に師たるにあらず、不了義經には、人天の師有り、導師有り、了義教の中には、人天の師た  
 るにあらず、法に師たるにあらず、未だ玄鑑に依得すること能はず、且く了義教に依得して、猶ほ相  
 親しき分有り。若し是れ不了義教ならば、祇だ聲俗の人の前に説くべし。祇だ如今、但だ一切有無の  
 諸法に依住せず、亦無依住と作らず、亦不依住の知解を作さず、是れを大善智識と名く。亦云く、唯  
 だ佛一人のみ是れ大善智識なり、兩人なしと爲す、餘は盡く外道と名け、  
 亦魔説と名く。如今祇だ是れ兩頭の句を説破す、一切有無の境法、但だ貪  
 染すること莫れ、縛を解するの事に及んで別に語句なし。人をして若し別  
 に語句ありと道はしめ、人をして別に法有つて人に與へしめば、此れ外道  
 と名け、亦魔説と名く。須らく了義教不了義教の語を識るべし、須らく遮語不遮語を識るべし、須ら  
 く生死の語を識るべし。須らく藥病の語を識るべし、須らく逆順の喩語を識るべし、須らく總別の語  
 を識るべし。道は修行して得、佛は修有り證有り、是心是佛、即心即佛と説く。是れは佛の説きたま  
 ふ是れ不了義教の語なり、是れ不遮語、是れ 升合擔の語、是れ揀穢法邊の語、是れ順喩の語、是れ  
 死語、是れ凡夫前の語なり。修行して得るといふことを許さず。佛は修なく證なし。心に非ず佛に非  
 す、亦是れは佛の説きたまふ是れ了義教の語なり、是れ遮語、是れ別語、是れ百石擔の語、是れ三乘

①比丘。僧なり、尼僧を比丘尼  
 と云ふ。  
 ②升合擔の語。容易なる言をい  
 ふ、百石擔難解の語を云ふ。

教外の語、是れ逆喩の語、是れ揀淨法邊の語、是れ生語、是れ地位人前の語なり。須陀洹向上より直  
 に十地に至るまで、但だ語句のみあつて、盡く法塵垢に屬し。但だ語句のみ有つて盡く煩惱邊收に屬  
 し、但だ語句のみ有つて盡く不了義教に屬す。了義教は是れ持、不了義教は是れ犯、佛地には持犯な  
 し、了義不了義教盡く許さず、苗に従つて地を辯じ、濁に従つて清を辯ず。祇だ如今の鑑覺、若し清  
 邊に従つて數鑑覺せば、亦是れ清にあらず鑑覺にあらず、亦是れ清にあらず亦是れ不清にあらず、亦  
 是れ聖にあらず亦是れ不聖にあらず。亦是れ水濁を見て水濁の過患を説く、水若し清ならば、都へて  
 説くべきなし、説かば卻つて他の水を濁すといふにあらず。若し無問の問  
 有らば、亦無説の説有らん。佛は佛の爲に説法せず、平等真如の法界には、  
 佛衆生を度せずといふこと無けれども、佛、佛に住せず、眞の福田と名  
 く、須らく主客の語を辯ずべし。一切有無の境法に貪染して、一切有無の境に惑亂せらるれば、自心  
 是れ魔王、照用して魔民に屬す。祇だ如今の鑑覺は、但だ一切有無の諸法に依住せず、世間出世間の法  
 にも、亦不住の知解を作さず、亦無知解にも依住せざれば、自心是れ佛、照用して 菩薩に屬す、心  
 心是れ主宰、照用、客塵に屬す。波の如きは水萬象を照すと説けども、以て功なし。若し能く寂照な  
 らば、玄旨を自ひす、自然に古今を貫申せん。神に照光なしと云ふが如きんば、至功常に存して、能  
 く一切處に導師と爲る。衆生の性識、他は未だ曾て佛の階梯を踏まざるが爲に、是れ黏膠性なり。多

③菩薩。衆生を攝化する悲智二  
 大願を具する自行化他の修造  
 者を云ふなり。



時有無の諸法に黏著して、乍ち玄旨の蘊を喫すること得ず、乍ち格外の語を聞いては、它信じ及ぼさず、所以に菩提樹下に、四十九日默然として思惟したまふ。智慧冥朦にして説き難く、比喻すべきなし。衆生、佛性ありと説かば、亦佛法僧を誘る、衆生、佛性なしと説くも、亦佛法僧を誘る。若し佛性有りと言はば、執著謗と名く、若し佛性なしと言はば、虛妄謗と名く。云ふが如く佛性有りと説くときは、則ち増益謗、佛性なしと説くときは、則ち損減謗、佛性亦有亦無と説くときは、則ち相違謗、佛性非有非無と説くときは、則ち戲論謗。如し説かざらんことを欲せば、衆生、解脱の期なし。如し之を説かんと欲せば、衆生又語に隨つて解を生ず、少を益し多を損す。故に云く、我れ寧ろ法を説かじ、疾に涅槃に入らんと。向後過去の諸佛を返尋して、皆三乗の法を説く、向後假に偈説して、假に名字を立す。本是れ佛、渠に向つて是れ佛と説かず、本是れ菩提、渠に向つて是れ菩提涅槃解脱等と説かず、渠が百石を擔つて、擔ひ起さざらんことを知つて、且く渠に一升一合擔を興ふ。渠か了義教を信じ難からんことを知つて、且く渠が爲に不了義教を説いて、且く善法を得て流行して、亦惡法に勝たしむ。善果限滿すれば、惡果便ち到る、佛を得れば則ち衆生の到る有り、涅槃を得れば則ち生死の到る有り、明を得れば則ち暗の到る有り。但だ是れ有漏の因果翻覆して、相酌敵せざる者有ることなし。若し翻覆の事を見ることを免れんと欲せば、但だ兩

●黏著。ネバリ付く意にて、泥むことなり。  
●菩提樹下。即ち畢鉢羅樹なり。釋尊其の下に坐して、成道正覺し給ふ。  
●酌敵。むくゆることなり。

頭の句を割斷すれば、量數も管すること著す。佛にあらざ衆生にあらざ、親にあらざ疎にあらざ、高にあらざ下にあらざ、平にあらざ等にあらざ、去にあらざ來にあらざ。但だ文字も渠を隔つることを著す、兩頭も汝を捉ふること得ず、苦樂の相形を免れ、明暗相酌ゆるを免れ、實理は眞實にし、亦眞實にあらざ、虛妄も亦虛妄にあらざ、是れ量數の物にあらざ。喩へば虚空の修治すべからざるが如し。若し心に少し許りも、解を作すこと有らば、即ち量數に管著せられん。亦卦兆の金木水火土管を被るが如し、亦黏膠の五處、俱に黏魔王捉得して、自在にして家に還らんが如し。夫れ教語は皆三句相連る、初中後善なり、初めは直に須らく渠をして善心を發せしむべし、中には善心を破り、後に始めて好善の菩薩と名く。即ち菩薩に非ざる、是れを菩薩と名く。法法に非ず非法に非ず、總に與塵なるも、也た若し祇だ一句を説かば、衆生をして地獄に入らしめん。若し三句一時に説かんに、渠自ら地獄に入らば、教主の事に干るにあらざ。説いて如今の鑑覺、是れ自己佛といふに到つて、是れ初善なり。如今の鑑覺を守任せざる、是れ中善、亦不守住の知解を作さざる、是れ後善、前の然燈後の佛に屬するが如し。祇だ是れ凡にあらざ亦聖にあらざ、錯つて佛は凡に非ず聖に非ずと説くこと莫れ。此の土の初祖云く、『無能無聖を佛聖と爲す』と。若し佛聖は亦九品の精靈龍畜等の類には非ず、及び釋梵已來、皆能く通變すと云はば、上品の精靈も、亦今古百劫の時事を知る、豈に是れ佛な

●九品。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩の九品をいふ。  
●釋梵已來。釋尊以來なり。  
●阿修羅。印度鬼神の一なり、



ることを得んや。阿修羅王の如きんば、身極めて長大にして、敵すること須彌山に兩倍すれども、帝釋と戦ふ時、力の如かざることを知る、百萬の兵衆を領じて、藕絲孔裏に入つて藏る。通亦辯才、它を少しとせざるも、且く是れ佛にあらざる。教語節級、奢緩陸降、未悟未解の時に同じからずんば、貪嗔と名く。悟了を喚んで佛慧と作す、故に云く、舊時の人に異ならず、祇だ舊時行履の處を異にすと。」

問ふ。「草を斬り木を伐り、地を掘り土を糞く、罪報の相有りと爲んや不や。」師云く、「定して罪有りと云ふことを得ず、亦定して罪なしと云ふことを得ず。有罪無罪の事は當人にあり、若し一切有無等の法に貪染して、取捨の心有つて、三句を透り過ぎざるに在らば、此の人定して罪有りと云はん。若し三句の外に透つて、心中虚空のごとくにして、亦虚空の想を作すこと莫くんば、此の人定して罪無しと言はん。」又云く、「罪若し作し了つて、罪有ることを見ずと道はば、是の處り有ることなし。若し罪を作さずして、罪有りと道はば、亦是の處り有ること無し。律の中に本迷ふて人を、及び轉た相然すが如きすら尙ほ然罪を得ず。何ぞ況んや禪宗下、相承

又無端正と譯す、その形醜陋なるに依り。阿修羅王は諸修羅の王なり、生前に五常の道を修すも、我慢、勝他の心、猜忌の念盛なるもの、死して阿修羅となり、日日三時備饑、飢餓等、諸の苦を受くること百萬劫を經云へり。  
帝釋。釋迦提桓因陀羅といひ、能天帝と譯す。六欲天の第二天、即ち忉利天の主にして、須彌山の頂に居る。常に慈悲柔順の相を現す。  
藕絲。蓮の糸なり。

律。一には僧侶の行爲を規定するを云ひ、二には律は分なり、三には律は筆なり、律の字は事に従ふ、事は筆なり、又大小乘律あり。梵名毗奈耶、略して毘尼と云ふ、又調伏とも云ふ、道德的規律を云ふ、能く衆生の身、口、意の三業を調和し、諸の惡業を伏滅して、

の心、虚空の如くにして一物に停留せず、亦虚空の相無からんをや、罪を將つて何れの處にか安著せん。」亦云く、「禪道修を用ひず、但だ汚染すること莫れ」と。亦云く、「但だ表裏の心を融治し盡して即ち得ん」と。亦云く、「但だ照境に約して、祇だ如今一句有無等の法を照して、都べて貪取なく、亦取著すること莫れ」と。亦云く、「合に與塵に學せよ、學は垢衣を洗ふに似たり、衣は是れ本有、垢は是れ外來なり。聞説らく一切有無聲色、偈の如くにして、垢膩都べて心を將つて澆泊すること莫れ」と。菩提樹下。三十二相八十種好は色に屬す、十二分教は聲に屬す。祇だ如今一切有無聲色の流を截斷過して、心虚空の如くに相似て、合に與塵に學すること、頭然を救ふが如くならば、始めて臨命終の時、舊熟路に尋つて行くことを得ん。尙ほ徹せずして、與塵の時に到つて、新に調へ始めて學ばば、得る期有ること無し。臨終の時、盡く是れ勝境現前すれば、心の所愛に隨つて重き處先づ受く。祇だ如今惡事を作さざれば、此の時に當つても亦惡境なし、縦ひ惡境有るも、亦變じて好境と成る。若し臨終の時、惺狂として自由なることを得ざらんことを怖るれば、即ち須らく如今便ち自由にして始めて得べし。祇だ如今一一の境法に於て、都べて愛染なく、亦依住の知解莫くんば、便ち是れ自由の人なり。如今は是れ因、臨終は是れ果なり。果業已に現せば、如何が怖れて、是れ古今を怖るることを得ん。古に若し今有らば、今にも亦古有らん。古に若し佛有らば今にも亦佛

諸の善業を作さしむるが故に此の名あり。  
殺。殺に同じ。  
三十二相八十種好。提婆品註に一如來は應化の身なり、此の諸相を現じて以て法身の圓極を表す、衆德備れり。」



存らん。如今若し直に未來際に至ることを得て、祇だ如今の一念を得、一念、一切有無等の法管を被らずんば、自古自今、佛祇だ是れ人、人祇だ是れ佛、亦是れ三昧定、定を將つて定に入ることを用ひず。禪を將つて禪を想することを用ひず、佛を將つて佛を覓むることを用ひず、法、法を求めず、法、法を得ず、法、法を行ぜず、法、法を見ずと云ふが如きんば、自然に法を得て以て更得ることを得ず。所以に菩薩は、是の如くの正念に應じて、法に於て、<sup>①</sup> 罄然として獨り存すれども、亦獨り存することを知るの法なし。智性自ら如如にして、因の所置に非ず、亦體結と名け、亦體集と名く。是れ智の知るにあらず、是れ識の識るにあらず、絶思量の處、凝寂として體盡す。<sup>②</sup> 付度永く亡じて、海の大流盡きて、波浪復た生ぜざるが如し。亦云く、「大海の水の風無きに、匝匝の波あるが如し、忽ち知る、<sup>③</sup> 匝匝の波、此れは是れ細中の龜なることを。知を知に亡ずるは、還つて細中の細の如し、是れ佛境界なり。此れに従つて初めて三昧の頂と名け、亦三昧王と名け、亦爾焰智と名け、一切諸の三昧を出生して、一切の諸の法王子の頂に灌ぎ、一切色聲香味觸法の、刹土に於て、成等正覺し、内外通達して、悉く闍り有ること無きことを知る。一色一塵、一佛一色、一切佛一切色、一切塵一切佛、一切色聲香味觸法も、亦復た是の如し、一一の一切の刹土に徧滿す。此れは是れ細中の龜なり。是れ善境界、是れ一切上流、知覺聞見も、亦是れ一切上流、出生入死、一切有無等を度るも、是れ上

① 罄然。細細盡きんとして僅かに存する貌なり。  
 ② 付度。推量する事なり。  
 ③ 匝匝。波紋の重なる狀を云ふ。刹土。國土に同じ。

流、諸説も亦是れ上流、涅槃は是れ無上道、是れ無等等呪、是れ第一の説なり。諸説の中に於て、最も甚深と爲す、人の能く到る無し、諸佛を護念す、猶ほ清波の能く一切の水の清濁深流廣大の用を説くが如し。諸佛護念、行住坐臥、若し能く是の如くならば、我れ時に爲に清淨の光明身を現さん。」又云く、「如し汝自等語等ならば、我れも亦然るが如し。一佛刹聲、一佛刹香、一佛刹味、一佛刹觸、一佛刹事、悉く皆是の如し。此れ從り上、蓮華藏世界に至るまで、縱廣總に皆是の如し。若し初知を守つて解を爲さば、頂結と名け、亦墮頂結と名く。是れ一切塵勞の根本、自ら知見を生じて、無繩自縛す。所知の故に繫世す。二十五有つて、又一切諸の煩惱門に散じて、他に縛著せらる。此れ初知の二乗の見なり、之を名けて爾焰識と爲す、亦微細煩惱と名く。便即ち斷除して、既に除し已ることを得るを、名けて回神性空窟と爲す、亦三昧酒の所醉と名く、亦解脫の魔と名く。所縛の世界、成壞し、定力の持する所漏り、別國上都に向つて覺知せざるも、亦解脫の深坑畏る可きの處と名く、菩薩は悉く皆遠離す。夫れ讀經、看教、語言、皆須らく宛轉して、歸つて自己に就くべし。但だ是れ一切の言教は、祇だ如今の鑑覺の自性を明す。但だ一切有無の諸境に轉ぜられざる、是れ汝が導師なり。能く一切有無の諸境を照破す、是れ金剛慧、即ち自由獨立の分有り。若し與塵に會得すること能はずんば、縱然ひ十二章隨典を誦し得るも、

① 一趣刹事。一佛刹事の事は法の意なり。  
 ② 蓮華藏世界。毗盧舍那佛の淨土なり。  
 ③ 成壞。世界の始終を分ちて、成、住、壞、空さなすの説あり。



祇だ箇の増上慢と成つて、卻つて是れ佛を慢ず、是れ修行にあらず。但だ一切の聲色を離れて、亦離に住せず、亦知解に住せざる、是れ修行讀經看教なり。若し世間に準せば是れ好事、若し明理の人の邊數に向はば、此れは是れ人を壅塞す。十地の人、脱不去にして生死の河に流入す。但だ是れ三乗教は皆貪嗔等の病を治す、祇だ如今念念若し貪嗔等の病有らば、先づ須らく之を治すべし。義句知解を覚むることを用ひざれ、知解は貪に屬す、貪は卻つて變じて病と成る。祇だ如今但だ一切有無の諸法を離れて、亦離を離れ、三句の外に透過して、自然に佛と差ふこと無けん。既に自らは佛ならば、何ぞ佛の語を解せざるを慮らん。祇だ恐らくは是れ佛にあらずらんことを。有無の法縛を被つて自由なることを得ず、是を以て理未だ立たずして福智あるは、福智に載せられて、賤しきが貴きを使ふが如し。先づ理を立てて後に福智有るには如かず、若し福智を要すれば、時に臨んで金を撮つて土と成し、土を撮つて金と成し、海水を變じて酥酪と爲し、須彌を碎いて微塵と爲し、四大海の水を攝して一毛孔に入れ、一義に於て無量の義を爲し、無量義に於て、一義と作すことを作し得ん。亦云く、「失脚して、轉輪王と作つて、四天下の人をして、一日十善を行せしむるも、此の福智、猶ほ自己の鑑覺に等しきこと能はざるを、王縁と名け、有無の

- ① 十地。五十二位中、十地の菩薩を云ふ。
- ② 三乘。聲聞、緣覺、菩薩なり。
- ③ 如今。如は助字、今なり。
- ④ 須彌。須彌山なり。
- ⑤ 轉輪王。輪王、又は轉輪聖王と云ふ、人壽八萬歲以上の時出現する聖王なり、輪王は聖王の感得せる輪寶なり、王遊行する時、能く途上の障礙を除き、旋轉應導して一切を威伏するを以て、轉輪聖王と名く。

諸法に念著するを、轉輪王と名く。祇だ如今藏腑の中に於て、都べて一切有無等の法を納れず、四句の外に離るるを空と名く。空を不死の藥と名く、爲に前王を喚んで不死の藥と名く。不死の藥を王と共に服すと云ふと雖も、亦二物に非ず、亦一物に非ず。若し一二の解を作さば、亦轉輪王と名く。祇だ如今人有つて、福智にして四事を以て供養するに、四百萬億阿僧祇世界の六趣四生、其の所欲に隨つて、八十年を滿て已つて後、是の念を作さく。然も此の衆生、皆已に衰老せり、我れ當に佛法を以て之を訓導して、須陀洹果、乃至阿羅漢道を得せしむべしと。是の如くの施主、但だ衆生に一切の樂具を施す、功德すら尙ほ自ら無量なり、何に況んや須陀洹果、乃至阿羅漢道を得せしむる功德無量無邊なるをや。猶ほ第五十人の經を聞いて、隨喜する功德を如かず。報恩經に云く、『摩耶夫人、五百の太子を生じて、盡く辟支佛果を得て、皆滅度す、各各塔を起て、供養一一禮拜して嘆じて言く、一子を生じて無上菩提を得て、我が心力を省せんには如かずと。』祇だ如今、百千萬衆の中に於て、一人の得る者有らば、價三千大千世界に直らん。所以に常に衆人に、須らく玄に自理を解すべしと勸む。自理若し玄ならば、福智を使ひ得ること、貴きが賤しきを使ふが如く、亦無住の車の如くならん。若し此

- ① 阿僧祇。阿は無、僧祇は僧祇那の略にして、數なり、されば無數の意にして、人の數へ切れぬ程の大數を云ふなり。
- ② 六趣。六趣は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人。四生は胎生、卵生、溼生、化生。
- ③ 須陀洹果。佛教に四向四果と云ふ事あり、四果は一、預流果(須陀洹果に同じ)、二、一來果、三、不還果、四、阿羅漢果なり、阿羅漢道は阿羅漢果に同じ。
- ④ 摩耶夫人。釋尊の生母なり。



れを守つて解を作さば、譬中の珠と名け、亦有價寶珠と名け、亦運糞入と名けん。若し此れを守つて解を爲さずんば、王の譬中の明珠、之を與ふるが如し。亦無價大寶と名け、亦運糞出と名く。佛は直に是れ 纏外の人、卻つて纏内に來つて與麼に作佛す。直に是れ生死那邊の人、直に是れ玄絶那邊の人、卻つて來つて這岸に向つて與麼に作佛す。人及び 獼猴、俱に行ずる能はず、人を十地の菩薩に喩へ、獼猴を凡夫に喩ふ。讀經看教して、一切知解を求むること、是れ一向に許さざるにはあらず、三乘教を解得すれば、善く瓔珞莊嚴の具を得、三十二相の窟宅を得、佛を覓むるには即ち得ず、教に云く、「小乘に貪著する三藏の學者には、猶ほ親近することを許さず、何に況んや自ら是とする破戒の比丘名字羅漢をや。」涅槃經の中には、十六の惡律儀中に配入せらる、毘獵漁捕の利養の爲の故に、殺害するに同じし。大乘の 方等は猶ほ甘露の如く、亦毒藥の如し。消得し去れば甘露の如し、消し去らざれば毒藥の如し。讀經看教するとも、若し他の生死の語を解せず、決定它的義句を透過せずんば、最第一を讀むこと莫れ。亦云く、「須らく看教すべし、亦須らく善智識に參すべし。第一に自ら眼有らんことを須めて、須らく它的生死の語を辯じて始めて得べし。若し辯白し得ずんば、決定して透不過なり。祇だ是れ重ねて比丘繩索を増す。所以に教學の玄旨は、人の文字を讀むことを遣さず、體を説いて相を説かず、義を説いて文を説かずと云ふが如し。是の如く説く者を眞説と名く。若し文字

⑤ 纏外。纏は在纏出纏の纏と同じ、即ち煩惱の意なり。  
⑥ 獼猴。猿なり。  
⑦ 方等。五時教中の一なり。

を説かば、皆是れ誹謗なり、是れを邪説と名く。菩薩は若し説かば、當に如法に説くべし、亦眞説と名く。當に衆生をして、心を持して事を持せず、行を持して法を持せず、人を説いて字を説かず、義を説いて文を説かざらしむべし。説いて欲界に禪無しと道ふは、亦是れ一隻眼を帶ぶる人の語なり。既に欲界に禪なしと云ふは、何に憑つてか色界に至ることを得ん。先づ地に因つて上り、二種の定を習ふて、然して後 初禪・有想定・無想定に至ることを得。有想定は色界四禪等の天に生じ、無想定は無色界四空等の天に生ず。欲界灼然として禪なし、禪は是れ色界なり。」

問ふ、「如今此士に禪有りと説く、如何。」師云く、「不動不禪、是れ如來禪にして、禪想を生ずることを離る。」

問ふ、「如何なるか是れ有情に佛性なく、無情に佛情有る。」師云く、「人より佛に至るまで是れ 聖情執、人より地獄に至るまで是れ凡情執。祇だ如今但だ凡聖の二境に於て、有染愛心、是れを有情無佛性と名く。祇だ如今但だ凡聖の二境、及び一切有無の諸法に於て、都べて取捨の心なく、亦無取捨の知解なき、是れを無情有佛性と名く。祇だ是れ其の情繫無きが故に無情と名く。木石太虛、黃花翠竹の無情に同じからざるを將つて、佛性有りと爲す。若し有と言はば、何が故ぞ經中に受記して、成佛を得ることを見ざるとならば、祇だ如今の鑑覺は、但だ有情改變を被らず。喩へば翠竹の機に應ぜずといふこと無く、時を知らざるなし、喩へば黃花の如し。」又云く、「若し佛階梯を踏まば、無忙に佛性



有り、若し未だ佛階梯を踏まざるば、有情に佛性なし。」

問ふ、「大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道とは如何。」師云く、「劫といふは滯なり。」亦云く、「住なり、一善に住し十善に滯る、西國には佛と云ひ、此土には覺と云ふ。自己の鑑覺、善に滯著すれば、善根の人に佛性なし、故に佛法不現前、不得成佛道と云ふ。惡に觸れて惡に住するを衆生覺と名く、善に觸れて善に住するを聲聞覺と名く。善惡の二邊に住せず、不依住を將つて是とする者を、二乘覺と名け、亦辟支佛覺と名く。既に善惡の二邊に依住せず、亦不依住の知解を作さざるを菩薩覺と名く。既に依住せず、亦無依住の知解を作さざるを、始めて名けて佛覺と爲すことを得。佛、佛に住せざるを眞の 福田と名くと云ふが如し。若し千萬人の中に於て、忽ち一人の得る者有らば、無價寶と名く。能く一切處に於て導師となる。無佛の處に是れを佛と云ひ、無法の處に是れを法と云ひ、無僧の處に是れを僧と云ふて、大法輪を轉すと名く。」

問ふ、「從上の祖宗、皆密語有つて、遞に相傳授すと、如何。」師云く、「密語あること無し、如來に秘密藏あること無し。祇だ如今鑑覺すれば、語言分明なり、形相を覓むれば了に不可得、是れ密語なり。須

①大通智勝佛。法華經三にあり。  
②辟支佛覺。小乘の佛果なり、緣覺の證果なり。梵語の辟支佛陀 (pratyeka Buddha) の略にして、十二因緣の法を觀じて、我執を除き涅槃に悟入す。  
③福田。福田に三種あり、一、報恩田、二、功德田、三、貧窮田なり。  
④須陀洹向。佛教に四向、四果と云ふ事あり、四向とは一に預流向 (須陀洹向なり、須陀洹果に進むべき出發點なる故に向と云ふ)、二に一來向、三に不還向、四に阿羅漢向なり。

陀洹向上より、直に十地に至るまで、但だ語句のみ有らば、盡く法の塵垢に屬す、但だ語句のみ有らば、盡く煩惱邊收に屬す、但だ語句のみ有らば、盡く不了義教に屬す、但だ語句のみ有らば、盡く許さず。了義教俱に非なり、更に何の密語をか討ねん。」

問ふ、「空の大覺の中より生ずること、海に一漚の發するが如しと、如何。」師云く、「空を漚に喩へ、海を性に喩ふ。自己靈覺の性は、虚空に過ぎたり、故に空、大覺の中に生ずること、海に一漚の發するが如しと云ふ。」

①不了義教。了義教に對して不了義なるを云ふ。  
②漚。泡に同じ。

問ふ、「語や、梁生つて箭を招くと、言既に梁生る時は患なきことを得ず、患累既に同じ、縑素何が辯ぜん。」師云く、「但だ卻つて箭を發す、途中に相拄ふ、其の相差ふが如きんば、必ず傷る所あり、谷中に響を尋ぬ、累劫にも形無し。響は口邊に在り、得失は來問に在り、卻つて問の歸する所、還つて箭を被る。亦幻と知るが如きんば、是れ幻にあらず。三祖云く、「玄旨を識らずんば徒に念靜に勞す」と。亦云く、「物を認めて見と爲すは、瓦礫を持するが如し、用ひて將つて何かせん。若し不見と言はば、木石に何を殊ならん。是の故に見と不見と二つ俱に失あり。舉一例諸。」



問ふ、「本無煩惱、三十二相、如何。」師云、「是れ佛邊の事なり、本煩惱あり、今三十二相あり、祇だ如今の凡情是れなり。」

問ふ、「無邊身菩薩、如來の頂相を見ずと、如何。」師云、「有邊の見、無邊の見を作が爲に、所以に如來の頂相を見ず。祇だ如今都べて一切有無等の見なく、亦無見なくんば、是れを以相現と名く。」問ふ、「如今の沙門盡く言ふ、我れ佛教に依つて、一經一論、一禪一律、一知一解を學ぶ、檀越四事の供養を受くべしと、消し得ると爲んや否や。」師云、「但だ如今の照用に約して、一聲一色、一香一味、一切有無の諸法、一一の境上に於て、都べて纖塵の取染無く、亦無取染に依住せず、亦不依住の知解無くんば、這箇の人のみ日に萬兩の黄金を食するとも、亦能く消得せん。祇だ如今、一切有無等の法を照して、六根門頭に於て、併當を刮削するとも、貪愛、纖毫も治し去らざる有らば、乃至、施主の一粒の米、一縷の線を乞ふとも、箇箇披毛戴角して、犁を牽き重を負ふて、一一須らく它に償ふて、始めて不依佛と爲すことを得べし。佛は是れ無著の人、無求の人、無依の人なり。如今波波として、佛を貪覓せば、盡く皆背けり。故に云く、久しく佛に親近して、佛性を識らずと。唯だ救世のみを觀せば、六趣の中に輪回すること久し。乃し佛を見んと

① 輪回。流轉、轉生と共に廣く用ひらる、此の思想は印度哲學、宗教の根本義にして、均しく輪廻より離脱するを其の終極の目的とせり。人は善業に依りて未來に善所に生じ、惡業に依りて惡所に生るは即ち輪廻なり。  
② 七佛。毘婆尸佛、尸棄佛、毘舍浮佛、拘留孫佛、俱那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦牟尼佛の七佛を云ふ。

ならば、説いて佛には値ひ難しと爲す。文殊は是れ七佛の祖師。」亦云く、「是れ娑婆世界第一の主首の菩薩なれども、端なく見佛の想、聞法の想を作して、佛の威神力を被つて、故に二鐵圍山に左降す。是れ特に諸の學人の與に、標則と作ることを解せざるにはあらず、諸の後學の人をして、與應の見聞を作すこと莫からしむ。但だ一切有無等の法、有無等の見なし、一箇箇三句の外に透過する、是れを如意寶と名く、是れを寶華承足と名く。若し佛見法見を作さば、但だ是れ一切有無等の見なり。眼翳見と名く、所見の故に亦見纏と名け、亦見蓋と名け、亦見孽と名く。祇だ如今念念及び一切の見聞、覺知、及び一切の塵垢、祛得盡すれば、但だ是れ一塵一色、摠に是れ一佛なり。但だ一念を起せば、摠に是れ一佛三世の五陰なり、念念誰か其の數を知らん、是れを佛闍塞と名く、虚空是れを分身と名く、佛是れを寶塔現と名く。是を以て常に歎じて言く、嗟今日所依の命を見るに、一顆の米、一莖の菜の餉に依る、時に食を得ざれば飢死す、水を得ざれば渴死す、火を得ざれば寒死す、欠ぐこと一日すれば生ぜず、欠ぐこと一日すれば死せず、四大に把定せらる。先達の者、火に入つても焼けず、水に入つても溺れず、倘し燒かんと要すれば便ち燒け、溺れんと要すれば便ち溺れ、生ぜんと要すれば即ち生じ、死せんと要すれば即ち死して、去住自由なるには如かずと。這箇の人は自由の分あり、心若し亂れずんば、佛を求め菩提涅

③ 娑婆。梵語なり、譯して忍辱土と云ふ。  
④ 見孽。「ケンゲツ」、孽は「わざはひ」なり。  
⑤ 闍。「えらぶ」、又は「みちびく」なさいふ訓あり、天上の門をもいふ。  
⑥ 四大。地、水、火、風なり。



繫を求むることを用ひず。若し佛に著いて求めば食に屬す、食は變じて病と成る。故に云く、佛病最も治し難しと。佛を謗し法を毀つて、乃ち食を取る可し。食といふは是れ自己の靈覺の性、無漏の飯、解脱の食なり。此の語、十地の菩薩の病を治す、是れ初めより十地、是れ聲聞に至つて、祇だ如今但だ一切の求心有らば、盡く破戒の比丘、名字の羅漢と名け、盡く野干と名く。灼然として他の供養を鎖すること得ず。祇だ如今聲を聞くこと響の如く、等の香を嗅ぐこと風の如く、等の一切有無等の法を離れ、亦離に住せず、亦不住の知解無くんば、此の人一切罪垢、相累すること能はず。無上菩提涅槃を求むるが爲の故に、出家と名くるも猶ほ是れ邪願、沉んや世間諍論して勝負を覓め、我能我解を説いて、一門徒を貪り、一弟子を愛し、一住處を戀ひ、一檀越に結ばんをや。一衣一食、一名一利、又我れ一切闕無きことを得たりと言ふ。祇だ是れ自ら誑す、祇だ如今能く自己の五陰に於て其の主と爲らず、人に割截せられて節節支解するとも、卻つて怨吝の心なく、亦煩惱せず。乃至自己の弟子、人に鞭打せらるること、頭より足に至るも、如上の一一等の事、都べて一念の彼我の心を生ずること無く、猶ほ無一念に依住して、將つて是と爲さば、此れを法塵垢と名く。十地の人も脱し去ら

② 無漏。有漏に對する言葉にして、漏と無漏との別は、煩惱の隨不に依りて區別す、漏は漏泄、留位の義にして、煩惱の異名なり、煩惱は能く吾人の六根より出でて迷苦の三界に留住せしむ、今眞智を以て煩惱の感根をぬく、之を稱して無漏と云ふ。

③ 檀越。檀徒、檀那に等し、檀那はも僧俗に通ずる語なる。今は俗に多く用ふ。

④ 闕。「さはり」なり、礙に同じ。

⑤ 支解。分段に解了するを云ふ。

されば、生死の河に流入す。所以に常に衆人に勸む 須らく法塵煩惱を懼るること、三塗を懼るるが如くして、乃し獨立の分あるべしと。假使ひ一法の涅槃に過ぐる者あるも、亦少し許りも珍重の想を生ずること無し。此の人、歩歩是れ佛、腳蓮花を踏むことを假らず、分身百億す。祇だ如今、一切有無等の法に於て、纖毫も愛染の心あらば、縱然ひ腳蓮華を踏むも、亦魔作に同じ、若し本清淨・本解脱、自らは佛、自らは禪道なりと執して、解する者は、即ち自然の外道に屬す。若し因縁を執して、修して成し、證して得る者は、即ち因縁外道に屬す。有を執すれば即ち常見外道に屬す、無を執すれば即ち斷見外道に屬す、亦有亦無と執せば、即ち邊見外道に屬す、非有非無と執せば、即ち空見外道に屬す。亦云く「愚癡外道と、祇だ如今但だ佛見涅槃等の見を作すこと莫く、都べて一切有無等の見なく、亦無見もなきを正見と名く。一切の聞なく亦無聞もなきを正聞と名く、是れを外道を摧伏すと名く。凡夫の魔來ること無きは、是れ大神呪、二乗の魔來ること無きは是れ大明呪、菩薩の魔來ること無きは、是れ無上呪、乃至亦佛魔の來ること無きは、是れ無等等呪、一變衆生・詔曲修羅、二變二乘詔曲修羅、三變菩薩詔曲修羅、是れ三變淨土なり。但だ是だ一切有無凡聖等の法は、喩へば金鑛の如し、自己は理の如し、喩へば金の如きは、金と鑛と各相去離すれば、眞金靈現す。忽ち人有つて、金

③ 三塗。三塗の如し、地獄、餓鬼、畜生の三なり。

④ 詔曲修羅。二十隨煩惱の中、第六詔の心所なり、此の心所は他意をさり、他の氣色に隨つて自らの木義を現せず、橋めて他の異議に隨ひ、詔曲の心を以て性となす。

⑤ 眞金靈現。實相顯現するを云ふ。



を覓め寶を覓めば、金を變じて錢と爲して他に與ふ、亦麪の如きは、體眞正に諸なし。沙鹵人有つて鮓を乞へば、麪を變じて鮓と爲して他に與ふ。亦智臣の善く王の意を解するが如く、王若し行かんとする時、先施を索むれば、即便ち馬を奉る、食する時、先施を索むれば、即便ち鹽を奉る。此れ等を玄旨を學ぶ人の善能く通達して、機に應じて、せざるに喩ふ。亦六絶の獅子と云ふ。誌公云く、「人に隨つて造作百變、十地菩薩は飢えず飽かず、水に入つても溺れず、火に入つても焼かず。倘し焼かんと要するとも且つ焼くことを得べからず、他の量數に管定せらる。佛は則ち不與塵、火に入つても焼かず、倘し焼かんと要すれば便ち焼く、溺れんと要すれば便ち溺る、他は四大風水を使ひ得て自由なり。」一切色は是れ佛色、一切聲は是れ佛聲、自己の滓穢、諛曲の心盡きて、三句の外に透過して、此の語を説くことを得ん。菩薩清淨の弟子明白して、所有る言説、無有を執せず、一切の照用清濁に拘はらず、病有つて藥を喫せざるは是れ愚人、病無うして藥を喫するは是れ聲聞の人、一法に定執するを、定性聲聞と名く。一向に多聞なるを、増上慢聲聞と名く。他を知るを有學聲聞と

- ①沙鹵。鹽氣ある沙地、乃ち鹽濱なり。
- ②鮓。蒸したる餅なり、一名四實を義さす、四實とは一に水、二に鹽、三に器、四に馬なり。又仙陀婆を譯して伶俐の人なりと、涅槃の第九に委しく出づ。
- ③諛曲の心。へつらびよこしまなる心。
- ④貪嗔癡。煩惱中の根本、強烈なるものにして、三毒と云ふものは是れなり。
- ⑤十二分教。釋尊説法の様式にして、十二種あると雖も、實は結集せられたる經卷の説相區別に過ぎず、此の十二を大乘の十二分經と云ふ。
- ⑥刹利大姓。印度に於ける四姓中第二位、即ち婆羅門に次げる種姓にして、正しくは「クシャトリア」云ふ、略して

名く。沈空滯寂にして、及び自知するを無學聲聞と名く。貪嗔癡等は是れ毒なり、十二分教は是れ藥なり、毒未だ鎖せずんば、藥除くことを得ざれ、病無くして藥を喫すれば、藥變じて病と成る、病去つて藥消せざれば、不生不滅是れ無常の義なり。涅槃經に云く、「三の惡欲あり、一には四衆の圍遶を得んことを欲し、二には一切の人を得て、我が門徒と爲さんことを欲し、三には一切の人を得て、非れは是れ聖人及び阿羅漢なりと知られんことを欲す。」迦葉經に云く、「一には求めて未來佛を見んことを欲し、二には轉輪王を求めんことを欲し、三には刹利大姓を求めんことを欲し、四には婆羅門大姓を得んことを欲し、乃至生死を厭ひ涅槃を求む。」是の如くの惡欲、先づ須らく之を斷つべし、祇だ如今但だ取染動念有らば、盡く惡欲と名く。盡く六天に屬して、總に波旬の管を被る。」

問ふ、「二十年中、常に糞を除せしむとは如何。」師云く、「但だ一切有無の知見を息め、但だ一切の貪求を息めて、箇箇三句の外に透過する、是れを除糞と名く。祇だ如今佛を求め菩提を求め、一切有無等の法を求むるは、是れを運糞入と名けて、運糞出と名けず。祇だ如今佛見を作し、佛解を作

- 刹利と云ふ、武力に依りて所在に土田、庶民を領し、政事を行ふを分せり。
- ⑦婆羅門大姓。印度四姓中の最上位の族稱にして、僧侶、學者の階級なり、其の全生涯には嚴重なる教規ありて、壯年に至る迄、四吠陀、十八大經等の經論を學び、家庭を作りたる後、一定の義務を經れば、出家して山林に入り、梵行を修するを常とす。
- ⑧六天。欲界(Kamadhatu)の六天を云ふ、一に四王天、二に帝釋天、三に忉利天、四に夜摩天、五に他化自在天、六に樂非樂天、是れなり。
- ⑨波旬。梵語、譯して惡、惡愛、障礙善と云ふ、魔王の名、欲界天の頂に住し、大象に乗り、百臂を有し、種種奇異の相を生じ、常に其の子女を人界に下して、惡人を煽動し、聖者



して、但だ所見所求所著のみ有るは、盡く戲論の糞と名け、亦塵言と名け、亦死語と名く。大海に死屍を宿めずと云ふが如きんば、等閑の說話、戲論と名けず、説者の清濁を辯ずるを戲論と名く。教文に都總て二十一般の空有り、衆生の塵累を淘り擇ぶ。沙門の持齋・持戒・忍辱・柔和・慈悲・喜捨は、尋常是れ僧家の法則なり、曾て與歴に會せば、宛然として佛敎に依らん。祇だ是れ貪著依執することを許さず、若し希望して佛を得、菩提等の法を得ると者つば、手を火に觸るるに似たり。文殊云く、「若し佛見法見を起さば、應に己を害すべし」所以に 文殊、劍を 瞿曇に執り、 耆掘、刀を釋氏に持す。菩薩、五無間を行じて、 無間地獄に入らずといふが如きんば、他は是れ玄通の無間なり、衆生五逆の無間に同じからず。波旬より直に佛に至るまで、盡く是れ垢膩、都べて纖毫の依執なし。是れ如くなるも、二乗道と名く、況んや諍論して、勝負を覓めて我能我解を説かんをや。祇だ諍論僧と名けて、無爲僧と名けず。祇だ如今但だ一切有無の諸法に貪染せざれ、是れを無生と名け、是れを正信と名く。一切の法を信著するを、信不具と名け、亦信不圓と名け、亦偏信と名く。不具の故に一 闍提と名

な憍亂す、釋尊は菩提樹下に於て障礙を加へたるも是れなり。波旬の管を被るこは其の障礙を受くることなり。  
①文殊。梵語なり、妙吉祥、又は妙徳と譯す。諸佛發心の師、般若智慧の母とす。智慧第一にして、三聖の一なり、三人よれば文殊の智慧は是れより來る、常に獅子に乗り劍を執る。  
②瞿曇。釋迦種の別姓なり、人類中最勝如來世尊の宗祖なり。因果經には「瞿曇は俗姓」さあり、オルデンベルヒ氏は其の著佛陀に、「瞿曇は釋迦種が印度に定住して後に、印度の古記事より撰び出せし稱號なり」と云へり、然るに通常釋尊の異名に用ひらるる事多し。  
③耆掘。波斯匿王補相の家に生れ、容貌端正千人力ありと、

く。如今、驀直に悟解せんことを得んと欲せば、但だ人法俱に泯じ、人法俱に絶し、人法俱に空じて、三句の外に透るを、是れを諸數に墮ちざる人と名く。這は是れ信法、這は是れ戒施、聞慧等しき菩薩は、忍不成佛、忍不作衆生、忍不持戒、忍不破戒なり、故に不持不犯と云ふ。智濁り照清み、慧清み識濁る。佛に在つては照慧と名け、菩薩に在つては智と名け、二乗及び衆生邊に在つては識と名け、亦煩惱と名く。佛に在つては果中説因と名け、衆生に在つては因中説果と名く。佛に在つては轉法輪と名け、衆生に在つては法輪轉と名け、菩薩に在つては瓔珞莊嚴具と名け、衆生に在つては五陰叢林と名け、佛に在つては本地無明と名く。是れ無明、明なるが故に、無明を道體と爲すと云ふ。衆生暗蔽の無明に同じからず、彼は是れ所、此れは是れ能、彼は是れ所聞、此れは是れ能聞、一ならず異ならず、斷ならず常ならず、來らず去らず、是れ生語句、是れ 出轍の語句なり。明ならず暗ならず、佛ならず衆生ならず、總に與歴なるも也た來去斷常なり。佛と衆生とは是れ死語、徧不徧、同異斷常等は、是れ外道の義、般若波羅密は是れ自己佛性。」亦云く、「摩訶衍、摩訶は是れ大の義、衍は是れ

婆羅門の教を受けて邪道に墮し、名を指首と云ひ、無腦と號す、釋尊に依りて出家證果すと云ふ。  
④無間地獄。八大地獄中の一にして、最重苦處なり、墮獄の罪人病苦を受け、休息の間斷なき故に此の名あり。  
⑤闍提。闍提成佛は「觀音玄義」に委し。  
⑥出轍。語句は古人の蹤跡によらず、其の精粕を嘗むるのみならずの語句なり。  
⑦般若波羅密。般若は智慧と譯す、煩惱の雲霧れて、實相眞如の現れたる境涯を云ふので、單に普通の智慧とは一寸趣が違ふ、これに摩訶(大、尊、勝の意を含む)の冠詞、即ち廣大の働きある事を示して居る、波羅密多は到彼岸と譯す、煩惱生死の境を脱して、正覺涅槃の彼岸に到るを云



乗の義、若し自己の知覺を守住せば、又自然外道と成る。如今の鑑覺を守  
ることを用ひず、別に佛を求むることを用ひず、若し更に別に求めば、又  
因縁外道に屬す。此土の初祖云く、「心には是とする所あらば、必ず非とする  
所あらん。」若し一物を貴ばば、則ち一物に惑せられん、若し一物を重んぜ  
ば、則ち一物に惑せられん。信ずれば信惑を被り、信ぜざれば又謗を成す。  
貴ふこと莫れ、貴ばざることを莫れ、信ずること莫れ、信ぜざることを莫れ。  
佛も亦是れ無爲にあらず、是れ無爲にあらずと雖も、又是れ冥冥ならざる  
こと、猶ほ虚空の如し。佛は是れ大身衆生にして鑑覺多し、鑑覺多しと雖  
も、它的鑑覺は清淨なり。貪瞋の鬼も他を捉ふること著す。佛は是れ纏外  
の人、纖毫の愛取無く、亦無愛取の知解なし、是れを具足。六度萬行と名  
く。若し莊嚴の具を要せば、種種皆有り、如し他を要せず用ひずんば、亦  
他を失せず。因果の福智を以て得て自由なる、是れ修行なり。是れ勞を執  
り重きを負ふに非ず、喚んで修行と作さば、卻つて不與麼、三身一體、  
一體三身。一といつば法身實相佛なり、法身佛は不明不暗なり、明闇は幻  
化に屬す、實相とは虚に對するに由つて名を得たり、本一切の名目なし。

ふ、即ち摩訶般若の船に乗じ  
涅槃の岸に到るを云ふなり。  
⑥六度。布施、持戒、忍辱、精  
進、禪定、智慧の六を云ふ。  
⑦三身。法、報、應の三身なり、  
或は法、報、應とも云ふ。  
⑧第八識。阿頼耶識なり、藏又  
は無没と譯す、藏識と名くる  
は三義あり、一に義藏とは、  
此の心識の中に萬有の種子を  
包藏するを云ふ、二に所藏と  
は、前七識（眼、耳、鼻、身、  
意、末那）の爲に、萬有の種子  
を熏ざりけるるを云ふ、三  
には執藏とは、第八識は無始  
以來常恒に相續し、常一の相  
あるに依り、第七識の爲に、  
これ我なりと執せらるるに依  
る。要するに此の識は一切萬  
有の種子を含有する吾人心識  
の根本なりと云ふ法相宗の解  
なり。

⑨報身佛。三身中の一にして、

佛身は無爲にして諸數に墮せずと云ふが如し、成佛獻蓋等は、是れ升合擔  
の語なり、濁に從つて清を辯せんことを要して名を得たり、亦虚空法身佛  
と名け、亦大圓鏡智と名け、亦第八識と名け、亦性宗と名け、亦空宗と  
名け、亦佛居不淨不穢土と名け、亦在窟の獅子と名け、亦金剛後得智と名  
け、亦無垢檀と名け、亦第一義空と名け、亦玄旨と名く。三祖云く、玄旨  
を識らざれば徒に念靜に勞す」と。二は 報身佛、菩提樹下佛、亦幻化佛  
と名け、亦相好佛と名け、亦 應身佛と名け、是れを圓滿報身盧舍那佛と  
名け、亦平等性智と名け、亦第七識と名け、亦酢因答果佛と名けて、五十  
二禪那數に同じく、阿羅漢辟支佛に同じく、一切菩薩等に同じく、受生滅  
等の苦に同じうして、衆生の繫業等の苦に同じからず。三には化身佛、祇だ如今、一切有無の諸法に  
於て、都べて貪染なく、亦無染無うして四句の外、所有る言說辯才を離れて、化身佛と名く。是れを  
千百億化身釋迦牟尼佛と名け、亦大神變と名け、亦遊戲神通と名け、亦妙觀察智と名け、亦第六識と  
名く。供養といつば、三業を淨むるなり。前際煩惱の斷すべきなく、中際自性の守るべきなく、後際  
佛の成す可きなし。是れ三際斷、是れ 三業清淨、是れ三輪空、是れ三檀空なり。云何が比丘、佛  
に給侍せん。所謂六根を漏らざるを、亦莊嚴と名く。空に諸漏なきは、林樹莊嚴なり、空に諸染なき

無色無形の法身の妙智より現  
れたる佛體なり、蓋し是れ多  
劫修業の因縁に酬報せる佛身  
なるが故に、此の名あり、阿  
彌陀佛、藥師佛等は是れなり。  
⑩應身佛。三身の一にして應化  
身、或は單に化身とも云ふ、  
諸佛は其の妙用を現じて諸種  
の機類に應じ時、處處に隨  
ひて無量の色色を現す、種種  
の法を説き、諸の生類を濟度  
す、此の佛を應身佛と云ふ。  
⑪三業。身、口、意の三なり。



きは、花果莊嚴なり。空に佛眼の修行の人の法眼に約して、清濁を辯ずる無し。亦清濁を辯ずる知解を作さず、是れを乃至無眼と名く。寶積經に云く、「法身は見聞覺知を以て求むべからず、肉眼の所見に非ず、無色を以ての故に、天眼の所見に非ず、無妄を以ての故に、慧眼の所見に非ず、離相を以ての故に、法眼の所見に非ず、諸行を離れたるを以ての故に、佛眼の所見に非ず、諸識を離れたるを以ての故に。」若し是の如くの見を作さざる、是れを佛見と名く。色に同じうして形色に非ざるを眞色と名け、空に同じうして太虚に非ざるを眞空と名く。色空は亦是れ藥病相治の語なり。法界觀に云く、「色に即して色に即せずと言ふべからず、空に即して空に即せずと言ふべからず。眼耳鼻舌身意、一切有無の諸法を納れざるを、轉じて 第七地に入ると名く。七地の菩薩、七地を退かず、向上三地の菩薩、心地明白にして染し易し。火を説けば即ち焼く、色界より向上は、布施是れ病、慳貪是れ藥、色界より向下は、慳貪是れ病、布施是れ藥、有作の戒は、世間の法を割斷して、但だ身手に作さざれば過無し。無作の戒と名け、亦無表戒と云ひ、亦無漏戒と云ふは、但だ舉心動念あるも、盡く破戒と名く。祇だ如今但だ一切有無の諸境に惑亂せられず、亦不惑亂に依住せず、亦不依住の知解なき、是れを偏學と名け、是れを勤讚念と名け、是れを廣流布と名く。未悟未解の時を母と名け、悟了を子と名け、亦無悟解の知解無き、之を母子俱喪と名く。無善纏、無惡纏、無佛纏、無衆生纏の量數も亦然り、乃至都べて一切の量數纏もなし。故に云ふ、佛

●第七地。五十二地位中の十地位の第七位を云ふ。

は是れ出纏過量の人と、貪愛知解義句は、母の子を愛して、唯だ多く見に酥を與へて喫せしめて、消と不消と都總て知らざるが如し。此の語は、十地は人天尊貴の煩惱を受け、色界無色界の禪定は、福樂の煩惱を生ず、自在神通、飛騰隱顯にして、徧く十方の諸佛の淨土に至ることを得ざるは、聽法の煩惱なり、慈悲喜捨を學ぶは、因縁の煩惱なり、空平等を學ぶは、中道の煩惱なり、三明 六通を學ぶは、四無閼煩惱なり、大乘心を學ぶは、四弘誓願の煩惱を發す、初地二地三地四地は、明解の煩惱なり、五地六地七地は、諸知見の煩惱なり、八地九地十地の菩薩は雙照二諦の煩惱なり、乃至佛果を學ぶは、百萬阿僧祇諸行の煩惱なり、唯だ義句知解のみを貪るは、卻つて是れ繫縛の煩惱なることを知らざるに喩ふ。故に云く、河を見て能く漂ふは 香象なりと。」

- ①六通。六神通なり。
- ②四弘誓願。一に衆生無邊誓願度、二に煩惱無盡誓願斷、三に法門無量誓願學、四に佛道無上誓願成の四なり。
- ③香象。印度に住む象の一種にして、此の象の牙は、雷の時には美はしき花を生ずるさいふ、又千佛の中の第七十二佛を香象といふ。

問ふ、「見るや否や。」答へて曰く、「見る。」又問ふ、「見て後如何。」答へて曰く、「見に二なし。」既に見に二なしと云ふ、見を以て見を得ず、若し見更に見ならば、前見是とせんか、後見是とせんか。見見の時、見見見に非ず、見猶ほ見を離る、見も及ぶこと能はずと云ふが如し。所以に見法を行ぜず、聞法を行ぜず、覺法を行ぜざれども、諸佛疾に受記を與ふ。難じて曰く、「見は既に是れ授記にあらず、之れ復た何を用つてか記と言ふ。」師云く、「先づ宗を悟る人は、一切有無の



諸法に相拘られざることを、垢衣<sup>⑤</sup>を洗ふが如し、故に相を離るを佛と名くと云ふ。虚實盡く存せず。中旨獨り玄なり、玄の一路に達すれば、同道にして後進ともに其の階に契ふ、故に授記と云ふ耳。無明を父となし、貪愛を母と爲す、自己是れ病、還つて自己是れ藥、自己是れ刀、還つて自己無明貪愛の父母を殺す、故に殺父害母と云ふ。一語類しく一切の法を破る、非時食を喫する者も、亦復た是の如し。祇だ如今但だ是れ一切有無等の法、盡く是れ非食を喫するなり、亦惡食と名く。是れ穢食を寶器に置く、是れ破戒、是れ器を汚す、是れ雜食なり。佛は是れ無求の人、如今一切有無の諸法を貪求せば、但だ是れ所有る所有皆背くなり。卻つて是れ佛を誘す、但だ貪染あらば、盡く授手と名く。祇だ如今但だ貪染せず、亦不貪染に依住せず、亦不依住の知解なき、是れを般若と名く。火は是れ手指を燒く、是れ軀命を惜まず、是れ節節支解、是れ出世間、是れ世界を它方に掌にす。祇だ如今若し十二分教、及び一切有無の諸法に於て、藏腑の中に於て、纖毫の停留有らば、是れ網を出でず、但だ所求所得あり、但だ生心動念あり、盡く野干と名く。祇だ如今藏腑の中に於て、都べて所求なく、都べて所得なくんば、此の人是れ大施主、是れ獅子吼なり、亦無所得に依住せず、亦不依住の知解なき、是れを六絶の獅子と名く。人我生ぜず、諸惡起らざる、是れ須彌を芥子の中に納るるなり。一切貪嗔八風等を起さざる、是れ悉く能く四大海水を吸ふて口の中に入るるなり。一切虚妄の語言を

- ⑤ 洗ふの意なり。
- ⑥ 授記。肥前を授くる事にして、印可、證明の意なり。
- ⑦ 軀命。身命に同じ。
- ⑧ 野干。野狐なり。

受けざる、是れ耳の中に入れざるなり。身をして一切の惡を人に起さしめざる、是れ一切の火を腹中に納むるなり。祇だ如今一一の境に於て、不惑不亂、不嗔不喜ならば、自己の六根門頭に於て、併當を刮削して淨潔を得ん。是れ無事の人なり、一切一解の頭陀精進に勝れり、是れを天眼と名け、亦了照爲眼と名く。是れを法界の性と名け、是れを車載因果と作す。佛、出世して衆生を度すれば、則ち前念生ぜず、後年續ぐこと莫し、前念の業謝するを、度衆生と名く。前念若し嗔れば、即ち喜樂を將つて之を治するを、即ち名けて佛有つて衆生を度すると爲す。但だ是れ一切の言教は、祇だ是れ病を治す、病同じからざるが爲に、藥も亦同じからず。所以に有時は佛有りと説き、或時は佛無しと説く。實語は病を治し、病若し癒ゆることを得れば、箇箇是れ實語なり、病を治するに若し瘥えずんば、箇箇是れ虚妄の語なり。實語は是れ虚妄語見を生ずるが故に、虚妄は是れ實語、衆生の顛倒を斷つが故に、病是れ虚妄なるが爲に、祇だ虚妄の藥有つて相治す。佛、出世して衆生を度するは、是れ九部の教語、是れ不了義教の語なり。瞋及び喜、病及び藥、總に是れ自己、更に兩人なし。何れの處にか佛の出世あり、何れの處にか衆生の度すべき有らん。經に云ふが如きんば、實に衆生の滅度を得る者なし。亦云く「佛菩提を愛せず、有無の諸法に貪染せざるを名けて度它と爲し、亦自己に守住せざるを名けて自度と爲す。病同じからざる

- ① 頭陀。煩惱の塵垢を抖擻するの謂なり、これを頭陀の修行と云ふ、頭陀に十二種あり。
- ② 九部の教。大乘十二部教より方廣、受記、無間自説の三教を除く九部を云ふ、小乘九部と云ふ。



が爲に、薬も亦同じからず、處方同じからず、一向に固執して、佛に依り菩提等の法に依ることを得ずんば、盡く是れ依方なり。故に云く、至於智者不得一向と。教中の所辯は、**黄葉に喩ふ、亦空拳の小兒を誑すが如し。**若し人此の理を知らざれば、同無明と名く。般若を行ずる菩薩は、我が語を取り、及び教敎に依ることを得ざれと云ふが如し。瞋は石頭の如く、愛は河水の如し。祇だ如今但だ瞋なく、愛なくんば、是れ山河石壁を透つて、直に聲俗の病を治すとす。多聞辯説は眼病を治す。人より佛に至るは是れ得、人より地獄に至るは是れ失、是非も亦然り。祖云く、『得失是非一時に放却す』と。一切有無の諸法に執住せざるを、是れを不住有縁と名け、亦不依住に依住せざる、是れを不住空忍と名く。自己是れ佛なりと執し、自己是れ禪道なりと解する者を、内見執と名け、因縁修證して成ずる者を外見と名く。誌公云く、『内見外見俱に錯、眼耳鼻舌、各各一切有無の諸法に貪染せざる、是れを受持四句の偈と名け、亦四果、六入無迹に名く、亦六通と名く。祇だ如今但だ一切有無の諸法を被らず、亦不闕に依住せず、亦不依住の智解なき、是れを神通と名く。此の神通を守らざる、是れを無神通と名くることを爲す。無神通の菩薩、足迹尋ぬ可からずと云ふが如きんば、是れ佛向上の人、最

- ①黄葉。涅槃經二十卷云く、彼の嬰兒啼哭の時、父母即ち楊樹の黄葉を以て之れを語つて曰く、啼く莫れ、啼く莫れ、我れ汝に金を與へん、嬰兒見る、已にして真金の想を生ず、便ち止んで啼かず、然れどもこれ楊葉、金に非ざる也に
- ②三祖。僧肇鑑智禪師なり。
- ③誌公。支那の寶誌公を云ふ。
- ④六入。六處とも云ふ、十二因縁中の一にして、第四位なり、此の時より六根漸く具はるが故に、六入と名く。

も不可思議の人、是れ自己。天は是れ智照、讚即ち喜、喜は境に屬す、境は是れ天、讚は是れ人、人天交接、兩つながら相見ることを得。亦云く、『淨智を天と爲し、正智を人と爲す。本是れ佛にあらず、渠に向つて是れ佛と説くを體結と名く。祇だ如今但だ佛の智解を作すこと莫く、亦無不依住の知解なき、是れを滅結と名く、亦真如と名け、亦體如と名く。佛を求め菩提を求むるを現身意と名く。祇だ如今但だ一切の求心あるを、盡く現身意と名く。菩提を求むと云ふが如きは是れ勝求なりと雖も、重ねて塵累を増す。佛を求むるは是れ佛衆、一切有無の諸法を求むるは、是れ衆生衆なり。祇だ如今の鑑覺は、但だ一切有無の諸法に依住せず、是れ衆數に入らざるなり。祇だ如今一一の聲香味觸法等に於て愛せず、一一の境に於て貪らず、但だ十句の濁心無きは、是れ了因成佛なり。文句の覺解を學ぶ者を、縁因成佛と名く。佛を見、佛を知らば、則ち佛を説くことを得ん。知あり見あらば、却つて是れ佛を誑す、若し佛、佛を知り、佛を見、佛を説くことを聞くと云はば、即ち得じ、火を見ることは即ち得たり、火見るとは即ち得ず。刀の物を割くが如きは即ち得たり、物の刀を割くことは即ち得ず。佛を知る人、佛を見る人、佛を聞く人、佛を説く人とは恒河沙の如し。是れ佛知、是れ佛見、是れ佛聞、是れ佛説、萬が中に一も無し。祇だ自ら眼無うして、它に依つて眼と作すことを爲す、教中に喚んで比量智と作す。祇だ如今佛の智解を貪るも、亦是れ比量智なり。世間の譬喩は是れ順喩、不了義教も是れ順喩、了義教は是れ逆喩、頭目髓腦を捨つるは是れ逆喩。如今佛菩提等の法を愛せず、



是れ逆喻捨て難し、頭目髓腦に喩ふ。一切有無の境法を照著するが如きを頭と名け、一切有無の境法に相撓著せらるるを手と名け、都べて未だ前境を照さざる時を髓腦と名く。聖地凡因に習ひ、佛衆生の中に入つて、類を同じうして誘引化導して渠に同じ。餓鬼の肢節火然すれば、渠が與に般若波羅密と説いて、渠をして發心せしむ。若し一向に聖地に在らば、何に憑つてか彼に至つて渠と共に語ることを得ん。佛、諸類に入つて、衆生の與に船筏と作つて、渠と同じく苦を受くること勞極するに限り無し。佛、苦處に入つて、亦衆生と同じく苦を受けたまふ。佛は祇だ是れ去住自由なること、衆生に同じからず、佛は是れ虚空にあらず、苦を受けて何ぞ苦にあらざることを得ん。若し苦にあらずと説かば、此の語違負す、等閑に説くこと莫れ。錯つて佛の神通自在不在を説かば、且つ慚愧の人なり。敢て佛は是れ有爲、是れ無爲と説かざれ、敢て佛は自由不自由と説かざれ。藥方を除讚する外、兩頭の醜陋を露現することを得んことを欲せず。教に云く、『若し人、佛菩提を安置して、是の邊りに所ること有らば、其の人大罪を得ん』と。亦云く、『佛を識らざる人の前の如きは、渠に向つて與應に説くも過無し』と。無漏の牛乳の如きは、能く有漏の病を治す、其の牛といふは、高原に在らず、低隰に居らず、此の牛乳、藥と作すに堪へたり。高原佛に喩へ、下隰を衆生に喩ふ。如來實智法身には、又此の病無しと云ふが如きんば、辯才無闕、昇騰自在にして、不生不滅なり、是れを生老病死と名く。疼痛瘡癩、是れ暗に 菌莖を喫して、痢疾を患

菌莖、茸汁を云ふ。

へて、終に是れ暗には藏を爲し、明には迹を顯す。明暗都べて遣つて取ること莫く、無取も亦無取なし、他は不明不暗なり。王宮に 耶輸陀羅を納れて、 八相成道を生ず、聲聞は外道妄想の所計なり。非雜食身と云ふが如きんば、純陀云く、『我れ知る、如來は決定して不食を受けたまはず』と。第一に須らく兩隻の眼を具して、兩頭の事を照破すべし。祇だ一隻眼を帯びて一邊に向つて行くこと莫れ、即ち那箇の邊有つてか到る。功德天黒暗女相隨ふ、有智の主人は二人俱に受けず。祇だ如今心、虚空の如くに相似たらば、學始めて成ずる所有らん。西國の高祖云く、『雪山を大涅槃に喩ふ』と。此土の初祖云く、『心心木石の如し。』三祖云く、『兀爾として縁を忘す。』曹溪云く、『善惡都べて思量すること莫れ』と。先師云く、『迷人の方所を辯ぜざるが如し。』肇公云く、『智を閉ぢ聰を塞ぎ、獨覺冥冥たり矣。』文殊云く、『心虚空に同じ、故に敬禮觀る所なし。』甚深の 修多羅は不聞不受持なり。祇だ如今但だ是れ一切有無の諸法、都べて不見不聞、六根杜塞す。若し能く與應に學し、與應に持經せば、始めて修業の分有らん。這箇の語は耳に逆ひ口に苦し、可の中、與應に作し得ば、第二第三生に至つて、能

● 耶輸陀羅。釋尊が未だ宮中にありて、悉多太子と稱したる時、娶りたる妃なり。

● 八相成道。應身の佛が此の世に出現し給ふ、これを八相成道と云ふ、之れを俗に順じて衆生成佛の道を明し給ふ、八相とは、一には信率天より下り、二には託胎し、三には出胎し、四には出家し、五には降魔し、六には成佛し、七には說法し、八には涅槃に入る、此の八を云ふなり。即ち釋尊成道の状を述べたるものなり。

● 兀爾。樹木の大地より生ぜる如く、坐禪等の姿勢の端しきを云ふ。

● 修多羅。Sutra は梵語なり、契經と譯す、此の説く處、悉く事由に契ふが故なり、普通には「經」の事を云ふ。



く無佛の處に向つて、大道場に坐して、成等正覺を示現して、惡を變じて善と爲し、善を變じて惡と爲し、惡法をして十地の菩薩を教化せしめ、善法をして地獄餓鬼を教化せしむ。能く明處に向つて明縛を解し、能く暗處に向つて暗縛を解し、金を撮して土と成し、土を撮して金と成す。百般作し得て、變弄自由なり。恒沙世界の外に於て、救を求むる者有らば、<sup>①</sup>婆伽婆即ち三十二相を披して、其の人の前に現じて、渠と語音を同じうして、渠が與に說法して、機に隨つて感化し、物に應じて形を殊にし、諸趣に變現して我我所を離るるも、猶ほ彼の邊の事に屬す。猶ほ是れ小用、亦是れ佛專門中、大用を收むとは、大身は無形に隠れ、大音は<sup>②</sup>希聲に匿る、木中の火の如く、鐘鼓の聲の如し。因縁未だ具らざる時、其の有無を言ふ可からず、傍報生天、之を棄つること涕唾の如く、菩薩の六度萬行は、死屍に乗つて岸を過ぐるが如く、牢獄厠吼に在つて出づることを得るが如し。佛、三十二相を披して、相喚んで垢膩の衣と作す。亦云く、「若し佛は一向に五陰を受けずと説かば、是の處りあること無し。佛は是れ虚空にあらず、何ぞ一向に受けざることを得ん。佛は祇だ此れ去住自由にして、衆生に同じからず、一天界より一天界に至り、一佛刹より一佛刹に至ることは、諸佛の常法なり。」又云く、「若し三乘教に據つて、他の信施供養を受けば、他は地獄の中に在らん。菩薩は慈悲を行ひ、類を同じうして化導す。報恩常に涅槃に在るべからず。」又云く、「火を火と見て、但だ手づから觸るること莫ければ、火は人を燒かざ

① 婆伽婆、世尊と譯す。  
② 希聲、私語の聲の如き低くして稀なるをいふ。

るが如し。祇だ如今但だ十句の濁心無く、貪心愛心、染心瞋心、執心住心、依心著心、取心戀心、但だ是れ一句に各の三句有り、箇箇三句の外に透過して、但だ是れ一切の照用、任聽あれ縱横但だ是れ一切舉動施爲、語默啼笑、盡く是れ佛慧ならんことを。久立珍重。」

問ふ、「如何なるか是れ大乘入道、頓悟の法要。」師云く、「爾先づ諸縁を歇め、萬事を休息して、善と不善と、世出世間一切の諸法、竝に皆放卻して記する莫れ、憶する莫れ、緣する莫れ、念する莫れ、身心を放捨して、全く自在ならしめて、心、木石の如くならば、口辯する所なく、心行する所なし。心地若し空ならば、慧日自ら現すること、雲開けて日の出づるが如くならん。但だ一切の攀縁を歇め、貪瞋愛取清淨の情盡きなば、五欲八風に對するとも動かさず、見聞覺知の所関を被らず、諸法の所惑を被らず、自然に一切の功德を具足し、一切神通妙用を具足す、是れ解脫の人なり。一切の境法に對しても、心に諍亂なく、攝せず散せず、一切の聲色無有の滯悶を透るを名けて道人と爲し、善惡是非俱に運用せず、亦一法を愛せず、亦一法を捨てざるを、名けて大乘の人と爲す。一切善惡、空有垢淨、有爲無爲、世出世間、福德智慧の所拘繫を被らざるを、名けて佛慧と爲し、是非好醜、是理非理、諸の知解情盡きて、繫縛すること能はず、處處自在なるを、名けて初發の菩薩、便ち佛地に登ると爲す。」

① 頓悟、漸悟に對して云ふ。

問ふ、「一切の境に對して、如何が心木石の如くにし去ることを得ん。」師云く、「一切の諸法、本自



ら空と言はず、自ら色と言はず、亦是非と言はず、垢淨も亦人を繫縛するに心なし。但だ人自ら虚妄繫著を生ずることを爲して、若干種の解會を作し、若干種の知見を起し、若干種の愛畏を生ずるのみ。但だ諸法は自ら生ぜず、皆自己の一念に従つて、妄想顛倒して、相を取ることを了じて、心と境と本相到らざることを知る事有らば、當處に解脱し、一一の諸法當處に寂滅し、當處道場ならん。又本有の性は名目す可からず、本來是れ凡にあらざ、是れ聖にあらざ、是れ垢淨にあらざ、亦空有に非ず、亦善惡と諸の染法と相應するに非ず、人天二乘界と名く。若し垢淨の心盡き、繫縛に住せず、解脱に住せず、一切有爲無爲、縛脱の心量有ること無くんば、生死に處しても、其の心自在にして、畢竟諸妄虚幻、塵勞蘊界、生死の諸入と和合せず、迥然として寄なく、一切拘はらず、去留無闕にして生死に往來すること、門の開くるが如くに相似ん。」

「夫れ學道の人、若し種々苦樂の意に稱ひ、意に稱はざる事に遇ふても、心に退屈なく、一切名聞、利養、衣食を念せず、一切の功德利益を貪らず、世間諸法の所滯礙を爲さず、親なく愛なく、苦樂平懷、魚衣寒を遮り、糲食命を活し、兀兀として愚の如く聾の如く啞の如くに相偕たらば、稍相應の分有らん。若し心中の廣學知解に於て、福を求め智を求めば、皆是れ

- ① 妄想顛倒。迷ふが故に妄に有るを無思想ひ、無有思想ひ、善を惡思想ひ、惡を善思想ひて顛倒の思想を有するを云ふ。
- ② 繫縛。煩惱にたがれるを云ふ。
- ③ 有爲無爲。爲は爲作、造作あるを云ふ、即ち有爲は生滅法なるの義、無爲は生滅無きの義なり。
- ④ 兀兀。動かざる貌、韓文進學辭に、「先生兀兀として以て年を窮む」とあり。

生死なり、理に於て益なし、卻つて知解の境風に飄溺せらるゝことを被つて、還つて生死海裏に歸す、佛は是れ無求の人なり、之を求むれば理乖く、理は是れ無求の理なり、之を求むれば即ち失す。若し無求に著せば、復た有求に同じ、若し無爲に著せば、復た有爲に同じ。故に經に云く、「不取於法不取非法不取非非法」と。又云く、「如來所得の法は、此の法は無實亦無虛と。但だ能く一生、心、本石の如くに相偕て、陰界の所入五欲八風の所應溺を被らずんば、即ち生死の因斷え、去住自由ならん。一切有爲の因果の爲に縛せられず、有漏の所拘を被らずんば、他時還つて無自縛を以て因と爲して、同事利益し、無著の心を以て一切の物に應じ、無礙の慧を以て一切の縛を解せん。」亦云く、病に應じて藥を施す」と。

問ふ、「如今の出家、受戒して身口清淨にして、已に諸法を具ふ、解脱を得んや否や。」師云く、「少分解脱なり、未だ心解脱を得ず、亦未だ一切處解脱を得ず。」  
問ふ、「如何なるか是れ心解脱及び一切處解脱。」師云く、「佛を求めず、法を求めず、僧を求めず、乃至福智知解等を求めず、垢淨の情盡きて、亦此の無求を守つて是とせず、亦盡處に住せず、亦天堂を忻び地獄を畏れず、縛脱無礙ならば、即ち身心及び一切處皆解脱と名けん。汝言ふこと莫れ、少分戒の身口意淨有るを便ち以て了ぜりと爲すと。知らず、恒沙の戒定慧門・無漏解脱も、すべて未だ一毫毛に涉らざることを。努力めて向前して、須らく猛に究取すべし。耳聾し眼暗に、面皴み頭白く、老苦



身に及び、悲愛纏綿として眼中に流涙し、心裏悼惶として一も據る所なきことを待つこと莫れ。去處を知らざれば、恁麼の時節に到つて、手脚を整理すること得ざるなり。縦ひ福智、名聞、利養有るも、都べて相救はず、心慧未だ開けざるが爲に、唯だ諸境を念じて返照することを知らず。復た佛道を見ざれば、一生所有の善惡業縁、皆悉く現前して、或は忻、或は怖、六道の五陰、俱時に現前して、盡く嚴好の舍宅、舟船、車、輦を敷いて、光明顯赫す。皆自心の貪愛に従つて現はるる所の一切の惡境、皆悉く變じて殊勝の境と成る。但だ貪愛の重き處に隨つて、業識に引かれて隨著して生を受く、都べて自由の分なし。龍畜良賤、都總て未だ定らず。」

①墨。與同字なり。  
②天堂。天上に同じ。

問ふ、「如何が自由の分を得ん。」師云く、「如今得ば即ち得ん、或は五欲八風に對し情に取捨なく、慳嫉貪愛、我所情盡き、垢淨俱に忘じて、日月の空に在つて緣せずして照すが如く、心心土木石の如く、念念頭然を收ふが如く、亦大香象の河を渡つて、流を截つて過ぐるが如く、疑誤なからしめば、此の人、③天堂地獄、俱に攝すること能はざるなり。」

國譯百丈廣錄 終

百丈廣錄

夫語須辯縑素、須識總別語、須識了義不了義教語、了義教辯清、不了義教辯濁、說穢法邊垢、揀凡說淨法邊垢、揀聖從九部教說、向前衆生無眼、須假入雕琢、若於聲俗人前說、直須教渠出家、持戒修禪學慧、若是過量俗人、亦不得向他與麼說、如維摩詰傳大士等類、若於沙門前說、它沙門已受白四羯磨訖、具足全、是戒定慧力、更向它與麼說、名非時語說、不應時亦名綺語、若是沙門、須說淨法邊垢、須說離有無等法、離一切修證、亦離於離、若於沙門中、剝除習染、沙門除貪嗔病、不去、亦名聲俗、亦須教渠修禪學慧、若是二乘僧、他歇得貪嗔病去、盡依住無貪、將爲是、是無色界、是障佛光明、是出佛身血、亦須教渠修禪學慧、須辯清濁語、濁法者貪嗔愛取等多名也、清法者菩提涅槃解脫等多名也、只如今鑑覺、但於清濁兩流、凡聖等法、色聲香味觸法、世間出世間法、都不得有纖毫愛取、既不愛取、依住不愛取、將爲是、是初善、是住調伏心、是聲聞人、是戀筏不捨人、是二乘道、是禪那果、既不愛取、亦不依住不愛取、是中善、是半字教、猶是無色界、免墮二乘道、免墮魔民道、猶是禪那病、是菩薩縛、既不依住不愛取、亦不作不依住知解、是後善、是滿字教、免墮無色界、免墮禪那病、免墮菩薩乘、免墮魔王位、爲智障地障行障故、見自己佛性、如夜見色、如云佛地斷二愚、一微細所知愚、二極微細所知愚、故云、有大智人、破塵出經卷、若透得三句過、不被三段管、教家舉喻、如鹿三跳出網、喚作纏外佛、無物



拘繫得渠是屬然燈後佛是最上乘，是上上智，是佛道上立，此人是佛，有佛性，是導師，是使得無所礙風，是無礙慧，於後能使得因果福智，由是作車運載因果，處於生不被生之所留，處於死不被死之所礙，處於五陰，如門開不被五陰礙，去住自由出入無難，若能與麼，不論階梯勝劣，乃至蟻子之身，但能與麼，盡是淨妙國土，不可思議，此猶是解縛語，彼自無瘡，勿傷之也，佛瘡菩薩等瘡，但說有無等法，盡是傷也，有無管一切法，十地是濁流河衆，作清流說，堅清相，說濁過患，向前十大弟子，舍利弗、富樓那、正信、阿難、邪信、善星等，箇箇有榜樣，箇箇有則候，一被導師說破，不是四禪八定、阿羅漢等，住定八萬劫，他是依執所行，被淨法酒醉，故聲聞人聞佛法，不能發無上道心，所以斷善根人無佛性，教云：喚作解脫深坑，可畏之處，一念心退墮地獄，猶如箭射，亦不得一向說退，亦不得一向說不退，祇如文殊觀音勢至等，卻來須隨洹地，同類誘引，不得言他退當與麼時，祇喚作須隨洹人，祇如今鑑覺，但不被一切有無諸法管透，三句及一切逆順透得過，聞百千萬億佛出世間，如不聞相似，亦不依住不聞，亦不作不依住，知解說他這箇人退不得，量數管他不著，是佛常住世間，而不染世法，說佛轉法輪退，亦是謗佛法僧，說佛不轉法輪不退，亦是謗佛法僧，肇云：菩提之道，不可圖度，高而無上，廣不可極，淵而無下，深不可測，語也。梁生招箭，言鑑覺猶不是從濁辯清，許說如今鑑覺，是除鑑覺外別有，盡是魔說，若守住如今鑑覺，亦同魔說，亦名自然外道，說如今鑑覺，是自己佛，是尺寸語，是圖度語，似野干鳴，猶屬黏膠門，本來不認自知自覺，是自己佛，向外馳求覓佛，假善知識，說出自知自覺，作藥治箇向外馳求病，既不向外馳求病瘥，須除藥，若執住自知自覺，是禪那病，是徹

底聲聞，如水成冰，全冰是水救渴難望，亦云：必死之病，世醫拱手，無始不是佛，莫作佛解，佛是衆生邊藥，無病不要喫藥，病俱消，喻如清水，佛似甘草，和水亦如密，和水極是甘美，若同清水邊，數則不著，不是無，是本有，亦云：此理是諸人本有，諸佛菩薩喚作示珠人，從來不是箇物，不用知，渠解渠不用，是渠非渠，但割斷兩頭句，割斷有句不有句，割斷無句不無句，兩頭迹不現，兩頭提汝不著，量數管汝不得，不是欠少，不是具足，非凡非聖，非明非暗，不是有知，不是無知，不是繫縛，不是解脫，不是一切名目，何以不是實語，若爲雕琢虛空，作得佛相貌，若爲說道虛空，是青黃赤白作得，如云：法無有比，無可喻故，法身無爲，不墮諸數，故云：聖體無名，不可說如實理，空門難湊，喻如太末蟲處處能泊，唯不能泊於火燄之上，衆生亦爾，處處能緣，唯不能緣於般若之上，參善知識，求覓一知一解，是善知識，魔生語見故，若發四弘誓願，願度一切衆生，盡然後我始成佛，是菩薩法智魔，誓願不相捨故，若持齋戒，修禪學慧，是有漏善根，縱然坐道場，示現成等正覺，度恒沙數人，盡證辟支佛果，是善根魔，起貪著故，若於諸法，都無貪染，神理獨存，住甚深禪定，更不昇進，是三昧魔，久耽翫故，至上涅槃，離欲寂靜，是魔業，若智慧脫，若干魔網不去，縱解百本章，隨經盡是地獄滓，若覓如佛相，俱無有是處，如今聞說，不著一切善惡有無等法，卽爲墮空，不知棄本逐末，卻是墮空也，求佛求菩提及一切有無等法，是棄本逐末，祇如今食助命，補破遮寒，渴則掬水喫，餘外但是一切有無等法，都無纖毫繫念，此人漸有輕明分，善知識不執有不執，無脫得十句魔語，出語不繫縛人，所有言說，不自稱師說，如谷響，言滿天下，無口過，堪依止，若道我能說能解說，我是和尚，汝是弟子，這箇同於魔說，無端說道



目擊道存是佛，不是佛是菩提涅槃解脫等，無端說一知一解見，舉一手豎一指云，是禪是道。這箇語，繫縛人，未有住時，祇是重增比丘繩索，縱然不說，亦有口過，寧作心師，不師於心，不了義教，有人天師，有導師，了義教中，不為人天師，不師於法，未能依得玄鑑，且依得了義教，猶有相親分，若是不了義教，祇合聾俗人前說，祇如今但不依住，一切有無諸法，亦不作無依住，亦不作不依住知解，是名大善知識，亦云，唯佛一人是大善知識，爲無兩人，餘者盡名外道，亦名魔說，如今祇是說破兩頭句，一切有無境法，但莫貪染，及解縛之事，無別語句，教人若道別有語句，教人別有法與人者，此名外道，亦名魔說，須識了義教，不了義教語，須識遮語，不遮語，須識生死語，須識藥病語，須識逆順喻語，須識總別語，說道修行得，佛有修有證，是心是佛，卽卽佛，是佛說，是不了義教語，是不遮語，是總語，是升合擔語，是揀穢法邊語，是順喻語，是死語，是凡夫前語，不許修行得，佛無修無證，非心非佛，亦是佛說，是了義教語，是遮語，是別語，是百石擔語，是三乘教外語，是逆喻語，是揀淨法邊語，是生語，是地位人前語，從須隨洄向上，直至十地，但有語句，盡屬法塵垢，但有語句，盡屬煩惱邊收，但有語句，盡屬不了義教，了義教是持不了義教，是犯佛地無持犯，了義不了義教，盡不許也，從苗辯地，從濁辯清，祇如今鑑覺，若從清邊數鑑覺，亦不是清，不鑑覺，亦不是清，亦不是清，亦不是聖，亦不是不聖，亦不是見，水濁說水濁過患，水若清都無可說，說卻濁他水，若有無問之間，亦有無說之說，佛不爲佛說法，平等真如法界，無佛不度衆生，佛不住佛，名真福田，須辯主客語，貪染一切有無境法，被一切有無境惑亂，自心是魔王，照用屬魔民，祇如今鑑覺，但不依住一切有無諸法，世間出世間法，亦

不作不住知解，亦不依住無知解，自心是佛，照用屬菩薩，心是主宰，照用屬客塵，如波說水照萬像，以無功，若能寂照，不自玄旨，自然貫串於古今，如云神無照功，至功常存，能一切處爲導師，衆生性識，他爲未曾踏佛階梯，是黏膠性，多時黏著有無諸法，乍喫玄旨藥，不得，乍聞格外語，它信不及，所以菩提樹下，四十九日默然思惟，智慧冥朦難說，無可比喻，說衆生有佛性，亦謗佛法，僧說衆生無佛性，亦謗佛法，僧若言有佛性，名執著謗，若言無佛性，名虛妄謗，如云說佛性有，則增益謗，說佛性無，則損減謗，說佛性亦有亦無，則相違謗，說佛性非有非無，則戲論謗，如欲不說，衆生無解脫之期，如欲說之，衆生又隨語生解，益少損多，故云我寧不說法，疾入於涅槃，向後返尋過去諸佛，皆說三乘法，向後假偈說，假立名字，本不是佛，向渠說是佛，本不是菩提，向渠說是菩提，涅槃解脫等，知渠擔百石，擔不起，且與渠一升一合擔，知渠難信了義教，且與渠說不了義教，且得善法流行，亦勝於惡法，善果限滿，惡果便到，得佛則有衆生到，得涅槃則有生，死到得明，則有暗到，但是有漏因果，翻覆無有不相辭敵者，若欲免見翻覆之事，但割斷兩頭句，量數管不著，不佛不衆生，不親不疎，不高不下，不平不等，不去不來，但不著文字，隔渠兩頭捉，汝不得，免苦樂相形，免明暗相辭，實理真實，亦不真實，虛妄亦不虛妄，不是量數物，喻如虛空，不可修治，若心有少許作解，卽被量數管著，亦如封兆被金木水火土管，亦如黏膠五處，俱黏魔王捉得，自在還家，夫教語皆三句相連，初中後善，初直須發善心，中破善心，後始名好善菩薩，卽非菩薩，是名菩薩，法非法非非法，總與麀也，若祇說一句，令衆生入地獄，若三句一時說，渠自入地獄，不于教主事，說到如今鑑覺，是自己佛，是初善，不守住如



今鑑覺是中善，亦不作不守住知解，是後善。如前屬然燈後佛，祇是不凡亦不聖，莫錯說佛非凡。非聖，此土初祖云：無能無聖爲佛聖。若言佛聖者，亦非九品精靈龍畜等類，及釋梵已來，皆能通變。上品精靈，亦知今古百劫時事，豈得是佛？如阿修羅王，身極長大，敵兩倍須彌山，與帝釋戰時，知力不如，領百萬兵衆，入藕絲孔裏藏，通亦辯才，不少它，且不是佛。教語節級，奢緩陞降，不同未悟未解時，名貪瞋，悟了喚作佛慧，故云：不異舊時人，祇異舊時行履處。

問：斬草伐木，掘地墾土，爲有罪報相不？師云：不得定言有罪，亦不得定言無罪。有罪無罪事在當人，若貪染一切有無等法，有取捨心，在透三句，不過此人定言有罪，若透三句外，心中虛空，亦莫作虛空想。此人定言無罪，又云：罪若作了，道不見有罪，無有是處。若不作罪道，有罪亦無有是處。如律中本迷煞人，及轉相煞，尙不得煞罪，何況禪宗下，相承心，如虛空，不停留一用，亦無虛空相，將罪何處安著，亦云：禪道不用修，但莫污染，亦云：但融治表裏心，盡卽得，亦云：但約照境，祇如今照一切有無等法，都無貪取，亦莫取著，亦云：合與麼學，學似浣垢衣，衣是本有，垢是外來，聞說一切有無聲色，如但垢膩，都莫將心湊泊，菩提樹下三十二相八十種好，屬色，十二分教，屬聲，祇如今截斷一切有無聲色，流過，心如虛空相似，合與麼學，如救頭然，始得臨命終時，尋舊熟路行，尙不徹，到與麼時，新調始學，無有得期，臨終之時，盡是勝境，現前隨心所愛，重處先受，祇如今不作惡事，當此之時，亦無惡境，縱有惡境，亦變成好境，若怕臨終之時，悻狂不得自由，則須如今便自由始得，祇如今於一一境法，都無愛染，亦莫依住知解，便是自由人。如今是因，臨終是果，果業已現，如何怕得，怕是古今，古若有今，今亦有古，古若有佛，今亦有佛。

如今若得直至未來際，得祇如今一念，一念不被一切有無等法管，自古自今，佛祇是人，人祇是佛，亦是三昧定，不用將定入定，不用將禪想禪，不用將佛覓佛，如云：法不求法，法不得法，法不行法，法不見法，自然得法，不以得更得，所以菩薩應如是正念，於法罄然獨存，亦無知獨存之法，智性自如，非因所置，亦名體結，亦名體集，不是智知，不是識識，絕思量處，凝寂體盡，付度永亡，如海大流，盡波浪不復生，亦云：如大海水無風，匝匝之波，忽知，匝匝之波，此是細中之竈，亡知於知，還如細中之細，是佛境界，從此初知名三昧之頂，亦名三昧王，亦名爾焰智，出生一切諸三昧，灌一切諸法，王子頂，於一切色聲香味觸法，刹土，成等正覺，內外通達，悉無有闕，一色一塵，一佛一色，一切佛一切色，一切塵一切佛，一切色聲香味觸法，亦復如是，一一徧滿一切刹土，此是細中之竈，是善境界，是一切上流，知覺聞見，亦是一切上流，出生入死，度一切有無等，是上流所說，亦是上流涅槃，是無上道，是無等等呢，是第一之說，於諸說中，最爲甚深，無人能到，諸佛護念，猶如清波能說一切水，清深深流廣大之用，諸佛護念，行住坐臥，若能如是，我時爲現清淨光明身，又云：如汝自等語等，我亦如然，一佛刹聲，一佛刹香，一佛刹味，一佛刹觸，一佛刹事，悉皆如是，從此上至蓮華藏世界，縱廣總皆如是，若守初知爲解，名頂結，亦名墮頂結，是一切塵勞之根本，自生知見，無繩自縛，所知故繫世，有二十五，又散一切諸煩惱門，縛著於他，此初知二乘見之名爲爾焰智，亦名微細煩惱，便卽斷除，既得除已，名爲回神性空，竈亦名三昧酒所醉，亦名解脫魔所縛，世界成壞，定力所持，漏向別國，上都不覺知，亦名解脫深坑可畏之處，菩薩悉皆遠離，夫讀經看教，語言皆須宛轉歸就自己，但是一切言教，祇明如



今鑑覺自性，但不被一切有無諸境轉，是汝導師能照被一切有無諸境，是金剛慧，即有自由。獨立分，若不能與麼會得，縱然誦得十二章隨典，祇成箇增上慢，卻是慢佛，不是修行，但離一切聲色，亦不住於離，亦不住於知解，是修行讀經看教，若準世間，是好事，若向明理人邊數，此是壅塞人，十地之人，脫不去，流入生死河，但是三乘教，皆治貪瞋等病，祇如今念念若有貪瞋等病，先須治之，不用覓義句知解知解，屬貪，貪卻變成病，祇如今但離一切有無諸法，亦離於離，透過三句外，自然與佛無差，既自是佛，何慮佛不解語，祇恐不是佛，被有無諸法縛，不得自由，是以理未立，先有福智，被福智載，如賤使貴，不如先立理，後有福智，若要福智，臨時作得撮金成土，撮土成金，變海水為酥酪，碎須彌為微塵，撮四大海水入一毛孔，於一義作無量義，於無量義作一義，亦云失腳作轉輪王，令四天下人一日行十善，此福智猶不能等自己鑑覺，名王緣，念著有無諸法，名轉輪王，祇如今於藏腑中，都不納一切有無等法，雖四句外名空，空名不死藥，為喚前王，名不死藥，雖云不死藥，與王共服，亦非二物，亦非一物，若作一二解，亦名轉輪王，祇如今有人，以福智四事供養，四百萬億阿僧祇世界六趣四生，隨其所欲，滿八十年已後，作是念，然此衆生，皆已衰老，我當以佛法而訓導之，令得須陀洹果，乃至阿羅漢道，如是施主，但施衆生一切樂具，功德尚自無量，何況令得須陀洹果，乃至阿羅漢道，功德無量無邊，猶不如第五十人，聞經隨喜功德，報恩經云，摩耶夫人生五百太子，盡得辟支佛果，而皆滅度，各各起塔供養，一一禮拜嘆言，不如生於一子，得無上菩提，省我心力，祇收今於百千萬衆中，有一人得者，價直三千大千世界，所以常勸衆人，須玄解自理，自理若玄，使得福智，如貴使賤，亦

如無住車，若守此作解，名髻中球，亦名有價寶珠，亦名運糞入，若不守此為解，如王髻中明珠與之，亦名無價大寶，亦名運糞出，佛直是纏外人，卻來纏內，與麼作佛，直是生死那邊人，直是玄絕那邊人，卻來向這岸與麼作佛，人及獼猴，俱不能行，人喻十地菩薩，獼猴喻凡夫，讀經看教，求一切知解，不是一向不許，解得三乘教，善得瓔珞莊嚴具，得三十二相窟宅，覓佛即不是，教云，貪著小乘三藏學者，猶不許親近，何況自為是，破戒比丘名字羅漢，涅槃經中，被配入十六惡律儀中，同於畋獵漁捕，為利養，故殺害，大乘方等，猶如甘露，亦如毒藥，消得去，如甘露，消不去，如毒藥，讀經看教，若不解他生死語，決定透它義句，不過莫讀最第一，亦云須看教，亦須參善知識，第一須自有眼，須辯它生死語，始得，若辯白不得，決定透不過，祇是重增比丘繩索，所以教學玄旨，人不遺讀文字，如云說體不說相，說義不說文，如是說者，名真說，若說文字，皆是誹謗，是名邪說，菩薩若說，當如法說，亦名真說，當令衆生持心，不持事，持行，不持法，說人，不說字，說義，不說文，說道，欲界無禪，亦是帶一隻眼，人語，既云欲界無禪，憑何得至色界，先因地，上習二種定，然後得至初禪，有想定，無想定，有想定，生色界，四禪等天，無想定，生無色界，四空等天，欲界灼然無禪，禪是色界。

問：如今說此土有禪，如何？師云：不動不禪，是如來禪，離生禪想。  
問：如何是有情無佛性，無情有佛性？師云：從人至佛，是聖情執，從人至地獄，是凡情執，祇如今但於凡聖二境，有染愛心，是名有情無佛性，祇如今但於凡聖二境及一切有無諸法，都無取捨心，亦無無取捨知解，是名無情有佛性，祇是無其情繫，故名無情，不同木石太虛，黃花翠竹。



之無情將爲有佛性，若言有者，何故經中不見受記而得成佛者，祇如今鑑覺，但不被有情改變，喻如翠竹，無不應機，無不知時，喻如黃花，又云，若踏佛階梯，無情有佛性，若未踏佛階梯，有情無佛性。

問大通智勝佛十劫坐道場，佛法不現前，不得成佛道如何，師云，劫者滯也，亦云住也，住一善滯於十善，西國云佛，此士云覺，自己鑑覺，滯者於善，善根人無佛性，故云佛法不現前，不得成佛道，觸惡住惡，名衆生覺，觸善住善，名聲聞覺，不住善惡二邊，不依住將爲是者，名二乘覺，亦名辟支佛覺，既不依住善惡二邊，亦不作不依住知解，名菩薩覺，既不依住，亦不作無依住知解，始得名爲佛覺，如云佛不住佛，名真福田，若於千萬人中，忽有一人得者，名無價寶，能於一切處爲導師，無佛處云是佛，無法處云是法，無僧處云是僧，名轉大法輪。

問從上祖宗皆有密語，遞相傳授，如何，師云，無有密語，如來無有秘密藏，祇如今鑑覺，語言分明，覓形相了不可得，是密語，從須隨洄向上，直至十地，但有語句，盡屬法之塵垢，但有語句，盡屬煩惱邊收，但有語句，盡屬不了義教，但有語句，盡不許也，了義教俱非也，更討什麼密語。

問空生大覺中，如海一漚發，如何，師云，空喻於漚，海喻於性，自己靈覺之性，過於虛空，故云空生大覺中，如海一漚發。

問伐林莫伐樹，如何，師云，林者喻於心，樹者喻於身，因說林，故生怖，故云伐林莫伐樹。

問語也，梁生招箭，言既梁生，不得無患，患累既同，縑素何辯，師云，但卻發箭，途中相挂，如其相差，必有所傷，谷中尋響，累劫無形，響在口邊，得失在於來問，仰問所歸，還被於箭，亦如知幻，不

是幻，三祖云，不識玄旨，徒勞念靜，亦云，認物爲見，如持瓦礫，用將何爲，若言不見，木石何殊，是故見與不見，二俱有失，舉一例諸。

問本無煩惱，三十二相，如何，師云，是佛邊事，本有煩惱，今有三十二相，祇如今凡情是。

問無邊身菩薩不見如來頂相，如何，師云，爲作有邊見，無邊見，所以不見，如來頂相，祇如今都無一切有等見，亦無無見，是名頂相現。

問如今沙門盡言，我依佛教，學一經一論，一禪一淨，一知一解，合受檀越四事供養，爲消得否，師云，但約如今照用，一聲一色，一香一味，於一切有無諸法，一一境上，都無纖塵取染，亦不依住無取染，亦無不依住知解，這箇人日食萬兩黃金，亦能消得，祇如今照一切有無等法，於六根門頭，剗削併當，貪愛有識，毫治不去，乃至乞施主一粒米，一縷線，箇箇披毛戴角，牽犁負重，一一須償，它始得爲不依佛，佛是無著人，無求人，無依人，如今波波貪覓佛，盡皆背也，故云，久尋近於佛，不識於佛性，唯觀救世者，輪回六趣中久，乃見佛者，爲說佛難值，文殊是七佛祖師，亦云，是娑婆世界第一主首菩薩，無端作見佛想，聞法想，被佛威神力，故左降二鐵圍山，不是不解，特與諸學人作標則，令諸後學人，莫作與麼見聞，但無一切有無等法，有無等見，一箇箇透過三句外，是名如意寶，是名寶華承足，若作佛見法見，但是一切有無等見，名眼翳見，所見故亦名見纏，亦名見蓋，亦名見孽，祇如今念念及一切見聞覺知，及一切塵垢，祛得盡，但是一塵一色，總是一佛，但起一念，總是一佛三世五陰，念念誰知其數，是名佛闔塞，虛空是名分身，佛是名寶塔現，是以常歎言，嗟見今日所依之命，依一顆米，一莖菜餉，時不得食，飢死，不得水



渴死，不得火寒死，欠一日不生，欠一日不死，被四大把定，不如先達者，入火不燒，入水不溺，倘要燒便燒，要溺便溺，要生即生，要死即死，去住自由，這箇人有自由分，心若不亂，不用求佛求菩提涅槃，若著佛求屬貪，貪變成病，故云佛病最難治，謗佛法，乃可取食，食者是自己靈覺性，無漏飯，解脫食，此語治十地菩薩病，是從初至十地是聲聞，祇如今但有一切求心，盡名破戒比丘，名字羅漢，盡名野干，灼然銷他供養，不得祇如今聞聲如響，等嗅香如風，等離一切有無等法，亦不住於離，亦無不住知解，此人一切罪垢，不能相累，為求無上菩提涅槃，故名出家，猶是邪願，況乎世間諍論，覓勝負，說我能我解，貪一門徒，愛一弟子，戀一住處，結一檀越，一衣一食，一名一利，又言我得一切無閔，祇是自誑，祇如今能於自己五陰，不為其主，被人割截，節節支解，卻無怨吝之心，亦不煩惱，乃至自己弟子，被人鞭打，從頭至足，如上一等事，都無一念生，彼我心，猶依住無一念，將為是，此名法塵垢，十地之人，脫不去，流入生死河，所以常勸衆人，須懼法塵煩惱，如懼三塗，乃有獨立分，假使有一法過於涅槃者，亦無少許生珍重想，此人步步是佛，不假腳踏蓮花，分身百億，祇如今於一切有無等法，有纖毫愛染心，縱然腳踏蓮華，亦同魔作，若執本清滯，本解脫，自是佛，自是禪道，解者，即屬自然外道，若執因緣，修成證得者，即屬因緣外道，執有即屬常見外道，執無即屬斷見外道，執有亦無，即屬邊見外道，執非有非無，即屬空見外道，亦云愚癡外道，祇如今但莫作佛見涅槃等見，都無一切有無等見，亦無無見名，正見無一切聞，亦無無聞名，正聞，是名摧伏外道，無凡夫魔來，是大神呪，無二乘魔來，是大明呪，無菩薩魔來，是無上呪，乃至亦無佛魔來，是無等等呪，一變衆生，諛曲修羅，二變二

乘諛曲修羅，三變菩薩諛曲修羅，是三變淨土，但是一切有無凡聖等法，喻如金鑛，自己如理，喻如於金，金與鑛各相去離，真金露現，忽有人覓錢，覓寶，變金為錢，與他亦如麪，體真正無諸沙鹵，有人乞餽，變麪為餽，與他亦如智臣善解，王意，王若行時，索先施，婆，即便奉馬，食時，索先施，姿，即便奉鹽，此等喻學，玄旨，人善能通達，應機不失，亦云六絕獅子，話公云，隨人造作百變十地菩薩，不飢不飽，入水不溺，入火不燒，倘要燒，且不可得燒，他被量數管定，佛則不與麼，入火不燒，倘要燒，便燒，要溺便溺，他使得四大風水自由，一切色是佛色，一切聲是佛聲，自己滓穢，諛曲心盡，透過三句外，得說此語，菩薩清淨弟子明白，所有言說，不執無有，一切照用，不拘清濁，有病不喫藥，是愚人，無病喫藥，是聲聞人，定執一法，名定性聲聞，一向多聞，名增上慢聲聞，知他名有學聲聞，沈空滯寂，及自知名無學聲聞，貪瞋癡等是毒，十二分教是藥，毒未銷，藥不得除，無病喫藥，藥變成病，病去藥不消，不生不滅，是無常義，涅槃經云，有三惡欲，一欲得四衆圍遶，二欲得一切人，為我門徒，三欲得一切人，知我是聖人，及阿羅漢，迦葉經云，一欲求見未來佛，二欲求轉輪王，三欲求利利大姓，四欲得婆羅門大姓，乃至厭生死，求涅槃，如是惡欲，先須斷之，祇如今但有取染動念，盡名惡欲，盡屬六天，總被波旬管。

問：二十年中，常令除糞，如何？師云：但息一切有無知見，但息一切貪求，箇箇透過三句外，是名除糞，祇如今求佛求菩提，求一切有無等法，是名運糞入，不名運糞出，祇如今作佛見，作佛解，但有所見，所求，所著，盡名戲論之糞，亦名麤言，亦名死語，如云大海不宿死屍，等閑說話，不名戲論，說者辯清濁，名戲論，教文都總有二十一般空，淘擇衆生塵累，沙門持齋持戒，忍辱柔和



慈悲喜捨尋常是僧家法則會與麼會宛然依佛教祇是不許貪著依執若希望得佛得菩提等法者似手觸火文殊云若起佛見法見應當害己所以文殊執劍於瞿曇驚掘持刀於釋氏如云菩薩行五無間而不入無間地獄他是玄通無間不同衆生五逆無間從波旬直至佛盡是垢膩都無纖毫依執如是名二乘道況乎諍論覓勝負說我能我解祇名諍論僧不名無爲僧祇如今但不貪染一切有無諸法是名無生是名正信信著一切法名信不具亦名信不圓亦名偏信不具故名一闡提如今欲得慕直悟解但人法俱泯人法俱絕人法俱空透三句外是名不墮諸敷人這是信法這是戒施聞慧等菩薩忍不成佛忍不作衆生忍不持戒忍不破戒故云不持不犯智濁照清慧清識濁在佛名照慧在菩薩名智在二乘及衆生邊名識亦名煩惱在佛名果中說因在衆生名因中說果在佛名轉法輪在衆生名法輪轉在菩薩名瓔珞莊嚴具在衆生名五陰叢林在佛名本地無明是無明明故云無明爲道體不同衆生暗蔽無明彼是所此是能彼是所聞此是能聞不一不異不斷不常不來不去是生語句是出轍語句不明不暗不佛不衆生總與麼也來去斷常佛與衆生是死語徧不徧同異斷常等是外道義般若波羅密是自己佛性亦云摩訶衍摩訶是大義衍是乘義若守住自己知覺又成自然外道不用守如今鑑覺不用別求佛若更別求又屬因緣外道此土初祖云心有所是必有所非若貴一物則被一物惑若重一物則被一物惑信被信惑不信又成謗莫貴莫不貴莫信莫不信佛亦不是無爲雖不是無爲又不是冥冥猶如虛空佛是大身衆生鑑覺多鑑覺雖多它鑑覺清淨貪瞋鬼捉他不著佛是纏外人無纖毫愛取亦無無愛取知解是名具足六度萬行若

要莊嚴具種種皆有如不要他不用亦不失他使得因果福智自由是修行非是執勞負重喚作修行卻不與麼三身一體一體三身一者法身實相佛法身佛不明不暗明闇屬幻化實相由對虛得名本無一切名目如云佛身無爲不墮諸數成佛獻蓋等是升合擔語要從濁辯清得名故云實相法身佛是名清淨法身毘盧遮那佛亦名虛空法身佛亦名大圓鏡智亦名第八識亦名性宗亦名空宗亦名佛居不淨不穢土亦名在窟獅子亦名金剛後得智亦名無垢檀亦名第一義空亦名玄旨三祖云不識玄旨徒勞念靜二報身佛菩提樹下佛亦名幻化佛亦名相好佛亦名應身佛是名圓滿報身盧舍那佛亦名平等性智亦名第七識亦名耐因答果佛同五十二禪那數同阿羅漢辟支佛同一切菩薩等同受生滅等苦不同衆生繫業等苦三化身佛祇如今於一切有無諸法都無貪染亦無無染離四句外所有言說辯才名化身佛是名千百億化身釋迦牟尼佛亦名大神變亦名遊戲神通亦名妙觀察智亦名第六識供養者淨三業前際無煩惱可斷中際無自性可守後際無佛可成是三際斷是三業清淨是三輪空是三檀空云何比丘給侍於佛所謂不漏六根者亦名莊嚴空無諸漏林樹莊嚴空無諸染花果莊嚴空無佛眼約修行人法眼辯清濁亦不作辯清濁知解是名乃至無眼寶積經云法身不可以見聞覺知求非肉眼所見以無色故非天眼所見以無妄故非慧眼所見以離相故非法眼所見以離諸行故非佛眼所見以離諸識故若不作如是見是名佛見同色非形色名真色同空非太虛名真空色空亦是藥病相治語法界觀云不可言卽色不卽色亦不可言卽空不卽空眼耳鼻舌身意不納一切有無諸法名轉入第七地七地菩薩不退七地向三三地



菩薩心地明白易染，說火即燒，從色界向上，布施是病，慳貪是藥，從色界向下，慳貪是病，布施是藥，有作戒者，割斷世間法，但不身，手作無過，名無作戒，亦云無表戒，亦云無漏戒，但有舉心動念，盡名破戒，祇如今但不被一切有無諸境惑亂，亦不依住不惑亂，亦無不依住知解，是名徧學，是名勤讚念，是名廣流布，未悟未解時，名母悟了名子，亦無無悟解知解，是名母子俱喪，無善纏，無惡纏，無佛纏，無衆生纏，量數亦然，乃至都無一切量數纏，故云佛是出纏過量人，貪愛知解義句，如母愛子，唯多與兒酥餽，消與不消，都總不知，此語喻十地受人天尊貴煩惱，生色界無色界禪定，福樂煩惱，不得自在神通，飛騰隱顯，徧至十方諸佛淨土，聽法之煩惱，學慈悲喜捨，因緣煩惱，學空平等，中道煩惱，學三逆六通，四無惱煩，學大乘心，發四弘誓願煩惱，初地二地三地四地，明解煩惱，五地六地七地，諸知見煩惱，八地九地十地，菩薩雙照二諦煩惱，乃至學佛果，百萬阿僧祇諸行煩惱，唯貪義句知解，不知卻是繫縛煩惱，故云見河能漂香象。

問見否，答曰見，又問見後如何，答曰見無二，既云見無二，不以見見於見，若見更見，爲前見是，爲後見是，如云見見之時，見非是見，見猶離見，見不能及，所以不行見法，不行聞法，不行覺法，諸佛疾與受記，難曰見既不是授記之言，復何用記，師云先悟宗人，不被一切有無諸法相拘，如洗垢衣，故云離相名佛，虛實盡不存，中旨獨玄，玄達一路，同道後進契其階，故云授記耳，無明爲父，貪愛爲母，自己是病，還自己是藥，附己是刀，還殺自己，無明貪愛父母，故云殺父害母，一語類破一切法，喫非時食者，亦復如是，祇如今但是一切有無等法，盡是喫非食也，亦名惡

食，是穢食，置於寶器，是破戒，是汚器，是雜食，佛是無求人，如今貪求一切有無諸法，但是所有所作皆背也，卻是謗佛，但有貪染，盡名授手，祇如今但不貪染，亦不依住不貪染，亦無不依住知解，是名般若，火是燒，手指是不惜軀命，是節節支解，是出世間，是掌世界於它方，祇如今若於十二分教，及一切有無諸法，於藏腑中，有纖毫停留，是不出網，但有所求所得，但有生心動念，盡名野干，祇如今於藏腑中，都無所求，都無所得，此人是施主，是獅子吼，亦不依住無所得，亦無不依住知解，是名六絕獅子，人我不生，諸惡不起，是納須彌於芥子中，不起一切貪瞋八風等，是悉能吸四大海水，入口中，不受一切虛妄語言，是不入耳中，不令身起一切惡於人，是納一切火於腹中，祇如今於一一境，不惑不亂，不噴不喜，於自己六根門頭，刮削併當得淨，是無事人，勝一切知解頭陀精進，是名天眼，亦名了照爲眼，是名法界性，是作車載因果，佛出世度衆生，則前念不生，後念莫續，前念業謝，名度衆生，前念若噴，即將喜藥治之，卽名爲有佛度衆生，但是一切言教，祇是治病，爲病不同，藥亦不同，所以有時說有作，有時說無佛，實語治病，治若得瘥，箇箇是實語，治病若不瘥，箇箇是虛妄語，實語是虛妄語，生見故，虛妄是實語，斷衆生顛倒故，爲病是虛妄，祇有虛妄藥，相治，佛出世度衆生，是九部教語，是不了義教語，瞋及喜病及藥，總是自己，更無兩人，何處有佛出世，何處有衆生可度，如經云實無衆生得滅度者，亦云不愛佛菩提，不貪染有無諸法，名爲度它，亦不守住自己，名爲自度，爲病不同，藥亦不同，處方不同，不得一向固執，依佛依菩提等法，盡是依方，故云至於智者，不得一向，教中所辯喻於黃葉，亦如空拳誑小兒，若人不知此理，名同無明，如云行般若菩薩，不得取我語，及依教



救。瞋如石頭、愛如河水、祇如今但無瞋無愛、是透山河石壁、直爲治聲俗病、多聞辯說治眼病、從人至佛是得、從人至地獄是失、是非亦然、三祖云、得失是非一時放却、不執住一切有無諸法、是名不住有緣、亦不依住不依住、是名不住空忍、執自己是佛、自己是禪道解者、名內見執、因緣修證而成者、名外見、誌公云、內見外見俱錯、眼耳鼻舌各各不貪染一切有無諸法、是名受持四句偈、亦名四果六入無迹、亦名六通、祇如今但不被一切有無諸法、亦不依住不闍、亦無不依住知解、是名神通、不守此神通、爲是名無神通、如云無神通菩薩、足迹不可尋、是佛向上人、最不可思議人、是自己、天是智照、讚即喜喜者、屬境、境是天、讚是人、人天交接、兩得相見、亦云淨智爲天、正智爲人、本不是佛、向渠說是佛、名體結、祇如今但莫作佛知解、亦無無不依住知解、是名滅結、亦名真如、亦名體如、求佛求菩提、名現身、祇如今但有一切求心、盡名現身、如云求菩提、雖是勝求、重增塵累、求佛是佛衆、求一切有無諸法、是衆生衆、祇如今鑑覺、但不依住一切有無諸法、是不入衆數、祇如今於一一聲香味觸法等、不愛於一一境、不貪、但無十句濁心、是了因成佛、學文句覓解者、名緣、因成佛、見佛知佛、則得說佛、有知有見、却是謗佛、若云佛知佛見、佛聞佛說、即不得見、火即得、火見即不得、如刀割物、即得、物割、刀即不得、知佛人、見佛人、聞佛人、說佛人、如恒河沙、是佛知、是佛見、是佛聞、是佛說、萬中無一、祇爲自無眼、依它作眼、教中喚作比量智、祇如今貪佛知解、亦是比量智、世間譬喻是順喻、不了義教是順喻、了義教是逆喻、捨頭目髓腦、是逆喻、如今不愛佛菩提等法、是逆喻、難捨、喻於頭目髓腦、如照著一切有無境法、名頭、被一切有無境法相撓著、名手、都未照前境時、名髓腦、聖地習凡

因佛入衆生中、同類誘引化導、同渠餓鬼肢節火然、與渠說般若波羅密、令渠發心、若一向在聖地、憑何得至、彼共渠語、佛入諸類與衆生、作船筏、同渠受苦、無限勞極、佛入苦處、亦同衆生受苦、佛祇是去自由、不同衆生、佛不是虛空、受苦何得不苦、若說不苦、此語違負、等閑莫說、錯說佛神通自在不自在、且慚愧人、不敢說佛是有爲是無爲、不敢說佛自由不自由、除讚藥方外、不欲得露現兩頭醜陋、教云、若人安佛菩提、置有所是邊、其人得大罪、亦云、如不識佛人前、向渠與麼說無過、如無漏牛乳、能治有漏病、其牛者不在高原、不居低隰、此牛乳堪作藥、高原喻於佛、下隰喻於衆生、如云如來實智法身、又無此病、辯才無闕、昇騰自在、不生不滅、是名生老病死、疼痛瘡癩、是暗、與菌羹、患痢疾、而終是暗、爲藏、明顯迹、明暗都遣、莫取、無取亦無、無取、他不明不暗、王宮生、納耶輸、隨羅、八相成道、聲聞外道妄想所計、如云非雜食身、純陀云、我知、如來決定不受不食、第一須具兩隻眼、照破兩頭事、莫祇帶一隻眼、向一邊行、即有那箇邊到、功德天、黑暗女相隨、有智主人二俱不受、祇如今心如虛空、相似、學始有所成、西國高祖云、雪山喻大涅槃、此土初祖云、心心如木石、三祖云、兀爾忘緣、曹溪云、善惡都莫思量、先師云、如迷人不辯、方所肇、公云、閉智塞聰、獨覺冥冥者矣、文殊云、心同虛空、故敬禮無所觀、甚深修多羅、不聞不受持、祇如今但是一切有無諸法、都不見不聞、六根杜塞、若能與麼學、與麼持經、始有修行分、這箇語、逆耳苦口、可中與麼作得、至第二第三生、能向無佛處、坐大道場、示現成等正覺、變惡爲善、變善爲惡、使惡法教化十地菩薩、使善法教化地獄餓鬼、能向明處解明縛、能向暗處解暗縛、撮金成土、撮土成金、百般作得變弄自由、於恒沙世界外、有求救者、婆伽婆即



披三十二相現其人前，同渠語音，與渠說法，隨機感化，應物殊形，變現諸趣，雖我所猶屬彼邊事，猶是小用，亦是佛事門中收大用者。大身隱於無形，大音匿於希聲，如木中之火，如鐘鼓之聲，因緣未具時，不可言其有無。傍報生天，棄之如涕唾；菩薩六度萬行，如乘死屍過岸，如在牢獄廁孔，得出佛披三十二相，相喚作垢膩之衣，亦云。若說佛一向不受五陰，無有是處，佛不是虛空，何得一向不受？佛祇是去住自由，不同衆生。從一天界至一天界，從一佛刹至一佛刹，諸佛常法，又云。若據三乘教，受它信施供養，他在地獄中，菩薩行慈悲，同類化導，報恩不可常在涅槃。又云。如火見火，但莫手觸，火不燒人，祇如今但無十句濁心，貪心、愛心、染心、瞋心、執心、住心、依心、著心、取心、戀心，但是一句各有三句，箇箇透過三句外，但是一切照用，任聽縱橫，但是一切舉動施爲，語默啼笑，盡是佛慧，久立珍重。

問：如何是大乘入道頓悟法要？師云：爾先歇諸緣，休息萬事，善與不善，世出世間一切諸法，並皆放卻，莫記、莫憶、莫緣、莫念，放捨身心，全令自在，心如木石，口無所辯，心無所行，心地若空，慧日自現，如雲開日出，但歇一切攀緣，貪瞋愛取，垢淨情盡，對五欲八風不動，不被見聞覺知所閱，不被諸法所惑，自然具足一切功德，具足一切神通妙用，是解脫人。對一切境法，心無諍亂，不攝不散，透一切聲色，無有滯閱，名爲道人。善惡是非，俱不運用，亦不愛一法，亦不捨一法，名爲大乘人。不被一切善惡，空有垢淨，有爲無爲，世出世間，福德智慧之所拘繫，名爲佛慧，是非好醜，是理非理，諸知解情盡，不能繫縛，處處自在，名爲初發心菩薩，便登佛也。

問：對一切境，如何得心如木石去？師云：一切諸法，本不自言空，不自言色，亦不言是非，垢淨亦無心繫縛人，但爲人自生虛妄繫著，作若干種解會，起若干種知見，生若干種愛畏，但了諸法不自生，皆從自己一念妄想顛倒取相，而有知心與境本不相到，當處解脫。一一諸法當處寂滅，當處道場，又本有之性，不可名目，本來不是凡，不是聖，不是垢淨，亦非空有，亦非善惡，與諸染法相應，名人天二乘界。若垢淨心盡，不住繫縛，不住解脫，無有一切有爲無爲，縛脫心量，處於生死，其心自在，畢竟不與諸妄虛幻、塵勞蘊界、生死諸入和合，迥然無寄，一切不拘，去留無閱，往來生死，如門開相似。

夫學道人，若遇種種苦樂稱意，不稱意事，心無退屈，不念一切名聞利養衣食，不貪一切功德利益，不爲世間諸法之所滯礙，無親無愛，苦樂不懷，龜衣遮寒，糲食活命，兀兀如愚，如聾如啞，相侶稍有相應分，若處心中，廣學知解，求福求智，皆是生死於理無益，卻被知解境風之所飄溺，還歸生死海裏。佛是無求人，求之理乖，理是無求，理求之即失。若著無求，復同於有求；若著無爲，復同於有爲。故經云：不取於法，不取非法，不取非非法。又云：如來所得法，此法無實亦無虛，但能一生心如木石相侶，不被陰界諸入五欲八風之所飄溺，卽生死因斷，去住自由，不爲一切有爲因果所縛，不被有漏所拘，他時還以無自縛爲因，同事利益，以無著心，應一切物，以無礙慧，解一切縛，亦云。應病施藥。

問：如今出家受戒，身口清淨，已具諸法，得解脫否？師云：少分解脫，未得心解脫，亦未得一切處解脫。

問：如何是心解脫及一切處解脫？師云：不求佛，不求法，不求僧，乃至不求福智知解等，垢淨情



盡亦不守此無求爲是亦不住盡處亦不忻天堂畏地獄縛脫無礙即身心及一切處皆名解脫汝莫言有少分戒身口意淨便以爲了不知恒沙戒定慧門無漏解脫都未涉一毫毛努力向前須猛究取莫待耳聾眼暗而皺頭白老苦及身悲愛纏綿眼中流淚心裏悵惶一無所據不知去處到恁麼時節整理手脚不得也縱有福智名聞利養都不相救爲心慧未開唯念諸境不知返照復不見佛道一生所有善惡業緣皆悉現前或忻或怖六道五陰俱時現前盡敷嚴巧舍宅舟船車輦光明顯赫皆從自心貪愛所現一切惡境皆悉變成殊勝之境但隨貪愛重處業識所引隨著受生都無自由分龍畜良賤都總未定。

問如何得自由分師云如今得即得或對五欲八風情無取捨慳嫉貪愛我所情盡垢淨俱忘如日月在空不緣而照心心如土木石念念如救頭然亦如大香象渡河截流而過使無疑誤此人天堂地獄俱不能攝也。

百丈廣錄終

國譯枯崖漫錄

解題

本書は宋の興福寺の住持枯崖圓悟和尚の筆録する所のものなり。古來、禪門に於て、羅湖野録・叢林盛事・枯崖漫録・雲臥紀談・山庵雜録・林間録・人天寶鑑の七種の書を以て「七部の書」と稱し、又之に臨濟録・大慧武庫・正宗贊の三種を加へて「十部の書」とも稱せり。而して參禪の徒、孰れも咸餘暇に之等の書を繙いて進學辨道の資材に供したり。本録は乃ち亦其の一なり。

枯崖和尚は南宋の理宗皇帝の慶定年間（西紀一二六〇—一二六四）、泉南の興福寺に住して道學併び高く、名を四方に馳せたり。而も獨り常に破窓の下に坐して清苦憤發、敢て倦むことを知らず。其の平昔見聞する古尊の妙行格言や宗宿入道の機縁や、或は示衆の法語及び殘篇短碣中、其の名字・行事の未だ燈録に上らざるもの等、凡て古を集め遺を搜抉し、隨つて録して以て三卷となし、學者進修の指針と



なしたり。本書即ち是れなり。

其の後、度宗の咸淳八年（皇紀一九三二）に至り、枯崖和尚の弟子起藏主なるもの、北山の紹隆及び清漳の信庵の序と林希逸の跋とを得て之を梓に鋳り、和尚の號を冠し、枯崖漫錄と稱して世に公にせり。名は漫錄なりといへども、實は其の傳を草して、或は讚し、或は拈じ、或は著語し、或は又事實を記しなどして、恰も一種の僧寶傳に似たり。爾來、支那叢林の間に行はること久しく、我が國に於ても鎌倉時代より室町時代に涉りて夙に印行せられ、參禪の雲衲のために愛誦せられて、宗門に補ありしこと頗る大なるものなり。

著者枯崖和尚は名を圓悟といひ、枯崖は其の號にして、福州福清（今の福建省閩海道福清縣）の人なり。初め儒に志し、後、釋に入り、偃谿禪師に従つて其の法を嗣ぎ、南宋の景定年中、泉南の興福寺に住したりとの外は、師の傳記未だ明かならず。又各種の僧傳にも師の傳を載せず、従つて其の業蹟經歷の詳かならざるを憾みとなす。但し當時の顯官林希逸や紹隆和尚などと交遊ありし處を見れば、師も亦當時の大家匠たりしや疑を容れず。

### 國譯枯崖和尚漫錄序

石谿偃谿人物を愛し、風教を崇ぶこと、端嘉の諸老に賢れり。暮年、靈徑にて、余と尤も親密なり、述作を評商するに、一語諱むことなし。嘗て、枯崖仲簡を二老に道ふ、厥の後、俱に記を徑山に掌る、簡は文に富むも、惜しいかな早世せり。而して枯崖は清苦憤發して、正宗聞くことあり。余、喝石岩に居せし時、夾路の玉簪花一たび開いて、秋風騷然たり。或は笑つて曰く、禪和子纔かに此花を見れば、則ち寒を禦ぐに計なきを憂ひて、東馳西驚す、獨り枯崖破窓に坐して、怡然たり、毎に被を携へて、崑上に同宿す、月涼なれば閣に登り、雪霽るれば山を看て、相與に胸中耿々たり。余錦谿の報慈を出で、延平の含清に歸り、數年稍、睽る。間ろ聞く、枯崖古を集めて錄を成すと、偃谿其取る所の機緣皆、控人の入處あるを喜し、後村は何れ

① 石谿の心月禪師、偃谿の廣開禪師。

② 端平嘉熙は南宋理宗の年號、本朝の文曆嘉禎に當る、今より六百八十年程前なり。

③ 靈隱、徑山何れも臨安府にあり、支那五山の内なり、石谿偃谿此に住す。諱は遠慮なり。

④ 枯崖、仲簡兩人を石谿、偃谿の二老に取り持ちしを云ふなり。

⑤ 佛祖の正宗を了悟せしなり。

⑥ 喝石岩は徑山にあり、惠崇一喝して碎けて三片となりしものなり。

⑦ 劉克莊字潛夫、後村と號す、詩文超邁、文集五十卷あり。

⑧ 林希逸竹谿と號す。老莊列口義あり、世或は俗書と罵れども矮人の觀場に過ぎざるなり。



の時か茗を煮て重論を得んと謂ひ、竹谿は他時共に僧寶傳に入らんと謂ふ。枯崖南に歸つて、録を携へて相訪ふ、適余光孝に遷らんとし、率爾に過目して別る。今枯崖泉南の興福に瑞世す、而して起藏主爲めに梓に刊せんとして、叙を欲す。夫れ參方の正眼、爲人の峻機、逸致高標にして、貪を激し懦を立つるは、備さに此に見ゆ。因つて思ふ、石谿太白に閑居せしとき、仲宣の孚、非庵の光、良嵩の沂、勝叟の定、諸人の舊作を刻せんと思ふ。黄を捧げて住山するに及び、酬應不韻にして亦果さず。枯崖當に其遺を搜抉して繼ぎ繼いで彙集し、五燈の後、復た一燈の光明天下を燭すを見せしめば、豈漫録と云はんや。枯崖名は悟、福の福清の人。咸淳八年仲春、北山の紹隆、鼓山の老禪庵に書す。

- ① 本朝の學者は益を受けざるはなし。
- ② 瑞世は寺に住持せしなり。
- ③ 參方は四方に參するの意なり、爲人は學者を接するなり。
- ④ 當時住持の任命は黄紙に書す蟲蝕を避くるなり。
- ⑤ 應酬不韻は應接暇あらざるなり。
- ⑥ 五燈は、傳燈錄、廣燈錄、續燈錄、聯燈錄、普燈錄なり。又之を略稱して傳廣續聯普と云ふ。
- ⑦ 慶宗の年號、南宋の末年なり。
- ⑧ 北山の紹隆は癡絶沖に嗣ぐ、沖は曹源生に嗣ぐ、生は密庵咸傑に嗣ぐ。

序

昔し偃谿佛智禪師、靈隱に住し、予臨安に客たり、相與に往來す、神交道契、一日に非ざるなり。枯崖の名を知ること久し、未だ嘗て眉毛厮結ばざるなり。偶、泉に寓す、因つて興福寺を過ぎて一見す。元と是れ屋裡の人、恬淡寡言、眞に偃谿の印子を脱し來る。頃聞く、枯崖癸亥の歲、徑山の蒙堂に歸して、平昔聞見する處、宗宿入道の機緣、示衆の法語及び殘篇短稿、名字の未だ燈に上らざるものを哀集し、隨つて筆する所、名けて漫録と曰ふ。其志在る有り、偃谿に呈示す、叱して無事閣裡に掌下せらる。是歲夏五、忽ち謂つて曰く、將に謂へり、述ぶるところの者、紀談雜錄

- ① 靈隱は臨安府にあり。
- ② 交り契ることにて、神と道とは添へたるものなり、交際するなり。
- ③ 彼の眉毛と自分の眉毛と結び付くることは無かつたと云ふ「言ひまはし」にて面會はせざりしと云ふなり。
- ④ 屋裡の人は本分の家山に坐する人なり。
- ⑤ 脱は脱出し來るなり、閑遠谿の印子の中から脱出し來ると。癸亥は景定三年。
- ⑥ 既に傳燈に載せたるものは取らざるなり、哀集はよせあつむるなり。
- ⑦ 又無事閣裡に作る、家の内にて用無き處を無事閣と云ふ、邪寃ならぬ處へ放つて置けと叱られしなり。
- ⑧ 其れから七八年たつた今歳の夏に遠谿禪師が能く見るとまゝんざら捨てたもので無いと言はれしなり。
- ⑨ 談柄は話の種なり。
- ⑩ 採るべき處には鎌點を掛けられた、其餘は切り捨てられた、余漫録の評語を讀むに悟公の見地頗る隔靴の怨あるを覺ゆ、而も江湖數百年の愛讀を贏ち得たるは全く偃谿取捨の當を得たるに據るのみ。
- ⑪ 御手本に據つて瓢箪を書きしにあらす、北宋陶穀の故事なり。
- ⑫ 箱の内に祕藏せられし美玉を發見せしものにて似せものと違ふ。藕椀は論語に出づ、椀は箱なり蘊はをさむるなり。眞の死骸を朴と云ひ玉の磨か



に効ふて 談柄に資するのみと。今之を閱すれば、則ち是れに異なり、收むる處の機語、皆控人の入處ありしと。已に筆を用ひて 點下し、餘は則ち刻卻す。且つ囁すらく、宜しく之を珍藏すべしと、予是の録を見んと欲すと雖も、而も未だ叩くに暇あらず。忽ち起座元の元藁を携へて我に過ぐるを得、爲めに梓に鋸せんと欲し、信庵が一轉語を請ふ。予詳復すること數四、枯崖は、之を聞く處見る處に得ると雖も、然も編集して傳を成すや、或は讚し、或は拈し、或は着語し、或は實を記し、一々胸襟より流出す、豈是れ依本の胡蘆ならんや。則ち知る、枯崖和尚集むる所の者は、皆蘊積の美玉を發して鼠璞にあらず、佛智禪師點する所のものは、皆走盤の遺珠を選んで魚目にあらざるを。予更に贅語せば、恐らくは反つて玉の瑕を生じて、珠の類を爲さん。起兄之を請ふことを力む。已むを獲ずして再び一足を垂れ、彼の畫蛇を助く。噫、漫録の一出、何ぞ揚雄が玄を草して、譏りを人に取るに異ならんや。然りと雖も 後世必ず、子雲なるものあつて出でん。

咸淳壬申夏、清漳の信庵陳叔震序す。

### 國譯枯崖和尚漫錄卷の上

① 圓通の宗照庵主、因みに木庵初めて泉南に到り。是の庵に館す。一日威儀を具して問うて曰く、「某甲愚鈍なり、乞ふ師箇の見所を指せ。」木庵面前の香爐を指して、曰く、「見るや。」照曰く、「見る。」庵曰く、「見處如何ん。」照曰く、「某甲不會。」庵曰く、「又見ると道ふや。」照悚悟、流汗背を浹す。此れより、門を杜ちて四もに出でず、一帙百結、韻致高古、能く之を親疎するものなし。

② 慈慧の祖派禪師は、溫陵張氏の子、開元の羅漢寺に祝髮し、文關西の嗣、宗岱餘に參す。宗「僧雲門に問ふ、如何なるか 是れ正法眼 答へて曰く、普。又僧問ふ、如何なるか 是れ正法眼。答へて曰く、瞎。」と云ふを擧して、子作麼生か會すと云ふ。派措くことなし。此れより、焦慮飢寢を忘る。一夜坐して子の刻に至り、山禽の叫一聲するを聞いて、省悟す。黎明に宗の印證を求む。纔かに門に入つて、便ち喚んで曰く、「和尚」と。宗曰く、「汝來ること作麼ん。」派曰く、「東家の杓柄は長く 西家の杓柄は短し。」宗曰く、「子夜來 發顛するか。」派曰く、「是れ和尚を親疎するものなし。」

ざるを璞と云ふ、朴と璞とは同音にて璞が直段高きと聽き態、玉屋へ鼠の死骸を賣りに來たものがある、戰國策に出づ。

③ 眞珠を取つて魚の目玉は取つてない。

④ 類もきすなり。

⑤ 昔し問禪の僧の入るを見て曲条の上から片足だらりと垂れ

し和尚あり、畫蛇は蛇の足を畫くなり、むだ事をしたと云ふ意。

⑥ 揚雄大玄を著して曰く、後世子雲再び出でば必ず我書を取らんと云へり、子雲は揚雄の字なり。

⑦ 咸淳壬申は第八年なり、日本の文永九年にして蒙古入寇の翌年に當る。

① 圓悟・大惠・懶庵・木庵・宗照・庵主。

② 又鶉衣百結の語あり「ツギツギ」の布衲なり、韻致高古は人品氣高く古人の風あるなり。

③ 黃龍・眞淨文・宗岱餘・祖派禪師。

④ 普賢は公案なり。

⑤ 發顛は狂氣なり。



の顛か、是れ某甲が顛か。宗禪床を下つて、擒住して曰く、「什麼の道理をか見し。」派曰く、「伏して惟んみるに、和尚尊候萬福」と。宗托開して曰く、「我れに前日の話頭を還し來れ。」派、女人拜を作す、復た頷を呈して曰く、「正法眼を問ふ。答へて曰く普、晴。萬里の清風一溪の明月」と。今、香泥の像、里の四松に留む、緇素の爲めに欽仰せらる。

黄莊定公祖舜、晩に尤も淡薄、心を禪宗に留む、因みに傳燈を見て悟入す。偈を述べて曰く、「六載心を留めて釋書を讀む。幾回か紙上に模糊せらる。今朝放下して都て無事。只だ是れ從前の箇の老夫」と。仕へて執政に至り、紹興の名臣となる。且つ能く此道に證徹す、未だ裴李の、美を前に專にするを許さざりき。

浙翁佛心禪師、初め雙徑に到り、大慧の嗣仁公に見え、扣くに、當時千七百衆、咨決の要を以てす。狗子無佛性の話を得て、黙して領し去る。台の報恩を過ぎ、決を佛照に求む、夜參に、世尊鞭影の話を擧げて、「鞭影を見て行くは、良馬に非ざるなり」と曰ふを聞いて、言下に省悟す。旦日入室のとき、「不思議、不思議、正恁麼の時、如何なるか是れ琰上座本來の面目」と問ふ。曰く、「佛手も遮ることを得ず」と。復た證長老に番陽に隨

二

① 死骸に香泥を塗りて祭るなり。

② 傳燈は禪宗の僧傳の名。

③ 前度の劉郎今又來るの意なり。

④ 裴休は黄檗に參じ李翱は藥山に參ず、皆發明する處あり。

⑤ 浙翁は佛照に嗣ぎ、佛照は大慧に嗣ぎ、大慧は圓悟に嗣ぐ、浙翁諱は如琰。

⑥ 千七百衆は傳燈錄に載せたる人の數なり。

⑦ 話墮は公案なり、字義は話に落ちしなり。

⑧ 凌霄は徑山にあり、普覺佛日禪師は大慧宗杲なり。

侍す。旁僧の雲門の、話墮の話を商量して、「那裡か是れ這の僧話墮の處」と云ふを聞いて、豁然として、佛性從前の機用を洞見す。佛照毎に人に話

げて曰く、「我れ拂柄を握りしより以來、的に吾が機に契ふものは、惟だ琰あるのみ」と。後に佛照佛心、武を接して、凌霄に住す、法席の俱に盛なること、佛日の猶ほ在せし時の如きなり。佛心の塔は、潤東に在り、詳かに誌銘に見ゆ。

興化軍の、瑞香烈庵主は、本郡の人、幻住叟と號す。妙年より奇逸にして、叢林に飽く、久しく等庵に參じ、後に東庵を得て、必要を發明す。郷に歸りて、虎丘巖に居ること十年に餘る。山居の小詠あり、其一に曰く、「客來つて秘密を詢ふ。幽鳥語聲喧し。此の意分明なること甚し。何ぞ我が再言を消せんや」と。嘉定の間、郡主東塔を以つて、之を招げども出でず、錫を瑞光に移すに及

び、東庵の計を得、哀を擧して、拈香して云ふ、「向來采に任せて江外に遊ぶ。業風吹き到る明州の界。贅頭の老拙庵に、壅着して、毒手に相残害するに遭ふ。猛虎の林を出づるも威るゝに足らず、虻蛇の路に當たるも、未だ怪しとなさず。虚空激揚して火星飛び、叢林に流布して惡聲あり。死中に活を得て復た歸り來る。冷地に思量すれば眞に耐へ難し。近ごろ、筋斗已に倒翻すと聞き、

① 佛心の法系極めて盛なり、之を潤東の道と云ふ。

② 烈庵主は東庵に嗣ぐ東庵は大惠に嗣ぐ大惠は圓悟に嗣ぐ。

③ 東庵は佛照德光なり、又拙庵とも云ふ。

④ 贅頭は蜀の方言にて人語を入れざる人に順はざるの意なり。

⑤ 壅着は築着に同じ「ツキアタル」なり。

⑥ 虚空と虚空がすれ合ふて火が出る。

⑦ もんどり打つてはつたり倒れる、東庵の示寂を云ふ。



且つ喜ぶ昇平吾道の泰なるを。香を炷いて聊か以て殷勤を表し、拳頭と竹篋の債を償却す。大衆、只だ佛照和尚の如きは既に然く與麼なり、且く道へ、只だ今是れ屈を雪ぐとせんか、是れ恩に酬ゆとせんか。説着せば半文に直らずと雖も、誰れか知らん却つて通人の愛あることを。瑞香、得處分明にして、確く其志を守り、應世を肯せず、伽梨は水光林影の中に勃率たり、其高風逸韻を想見せば、人をして意消せしむ。

鐵鞭の詔禪師、因みに密庵開堂のとき、直ちに前に趨んで曰く、「箇れは是れ選佛場、心空及第して歸る。今日相見の處、大地に風雷を起す。作麼生か是れ相見底の事。」庵答へず、又曰く、「十二時中箇の漢あり、劍を把り來つて你が頭を截り、將ち去る渠を奈何せん。」庵亦答へず、遂に械すること一座具して曰く、「這の冤家に遇ふて打たすんば、更に何れの時をか待たん」と。庵亦答へず。身を退けて、喏を唱ふること三聲して曰く、「賊頭の袁達李磨を捉得し到れり」と。鈞旨を請ふとき、庵方に一拳を豎て、之を示す。曰く、「鈞旨を領す」と。筋斗を翻じて便ち出づ。庵入室罷んで、衆に告げて曰く、「適來箇の漢あつて、牙は劍樹の如く、口は血盆に似たり、手に一條の垂條を把つて、鐵鞭の如くに相似たり。老僧親しく一下に遭ふ、汝等諸人切に須からく照顧すべし」と。此れより號して鐵鞭

- ① 意氣消沈なり、僧を愛して愛せず紫衣の僧。
- ② 鐵鞭允詔禪師は密庵に嗣ぐ密庵は應庵に嗣ぐ應庵は虎丘に嗣ぐ虎丘は圓悟に嗣ぐ。
- ③ 械は拂なり、座具で一打ち打拂ふなり。
- ④ 喏は賤しき者の貴人に對する受け答へに用ふる語、はいと云ふが如し。「ハロー」「ハロー」「ハロー」と三聲するなり。
- ⑤ 袁達李磨は達磨に姓を付けしなり。

と曰ふ、不釐務の侍者たること六年なり。

萬庵柔禪師、衆に示し云ふ、「有句無句は藤の樹に倚るが如し。荆棘林中に活路を開く。樹倒れ藤枯るるとき、句何れの處にか歸す。生鐵の秤鎚蟲に炷る。泥盤放下して呵呵と笑ふ。殺人劍と活人刀と、若し是れ金毛の獅子ならば、三千里外に誦詠を見ん」と。佛生日に云ふ、「周行すること七步、已に邪路に入る。目四方を顧みて、眼を開いて尿床す。天を指し地を指して、甚の巴鼻がある。唯我獨尊、猶ほ是れ兒孫。畢竟他を浴して箇の什麼をか圖るや。良久して曰く、珊瑚枕上千行の泪、半は是れ君を思ひ半は君を恨む」と。此の數語を聞すれば、霜を履んで氷を知り、露を踐んで暑を知る。密庵は門戸嚴緊にして、人を接すること甚だ盛なりと雖も、豈吞舟の鱗の、能く網を漏るゝあらんや。芥堂、聰禪師、木庵の室に預る、一日侍する次で、忽ち其怒に逢ふ。曰く、「你ち此に在つて什麼をか作す、夏制將に満たんとす、西來意作麼生か會す」と。纔かに答へんと擬すれば、劈口に打一掌せらる。且聲を厲しうして曰く、「速かに道へ速かに道へ。」纔に答へんと擬すれば、又打一掌せられ、忽ち省發して汗下り、禮謝して去る。此れより諸方弘法道者と號す、往いて參激せざるなし。晩に吳門の聖因に住し、益聲譽を馳す、白髮肩に垂れ

- ① 萬庵致柔は密庵に嗣ぐ。
- ② 誦詠は入りくみなり、誦は雜なり詠は謔なり。
- ③ 巴鼻は牛の鼻づら、尻尾の如く「トラマヘドコロ」なり。
- ④ 接穴多くして手のまはり兼ねるとは云へど、斯る吞舟の鱗は漏さないの意ならん。
- ⑤ 芥堂瓊は木庵に嗣ぐ、木庵は懶庵に嗣ぐ、懶庵は大慧に嗣ぐ、大慧は圓悟に嗣ぐ。
- ⑥ 耳へ掛けて打つを劈耳と云ひ口へ掛けて打つを劈口と云ふ



しかば、叢林呼んで瓊白頭と爲すと云ふ。

⑦ 眞源惠日禪師、字は明可、方峻超卓なり、黃龍の三關を頌して云ふ、「我手は佛手、糞箕掃帚、拈起して便ち行く、誰れか先後を分たん。我が脚驢脚、歩々踏踏、虚空を踏破す、一任あれ下度すべし。人々箇の生縁あり、屋漏りて青天を望見す、昨夜泥牛、勃跳、金剛を帶累して發顛す」と。應庵之を見て嘆じて曰く、「眞に黃龍的骨の孫なり」と。竹篋子を頌して云ふ、「半載帥を出して古塞に當る。將軍の匹馬意嶢嶢。知らず重城を打破了つて、空しく牢關を把つて放行せず」と。大慧聞いて曰く、「此れ黃龍の兒孫にして、亦我が楊岐下の説話を解するものなり」と。眞源嘗て僧に問うて曰く、「佛一大事因縁をもつて世に出世す、如何なるか是れ一大事因縁」。僧「無語」。復た引諭して、之に謂つて曰く、「例へば一顆の明珠の、頓ちに 朝天門瀾頭市裡に在るが如し、千人萬人、行き過ぐれども見ず、忽ち一箇の漢あつて遇着し、便ち叫んで云ふ、我れ快活せりと、只是れ這箇の道理なり、會すや」と。初め杭の多福に住し、後に昇の興教、明の香山に住す。乃ち天台萬年の 雪巢一村僧の嗣にして、語言宗旨、木水の本源あるが如きなり。雪巢別帖に云ふ、「專价の來りし時、書を收めて且喜す。臨安の命を被り、遷選出世すと。仍て審かにす。別後新に住持を領す」と。

⑦ 眞源惠日は村僧法一に嗣ぐ、法一は草堂清に嗣ぐ、清は黃龍慧南に嗣ぐ。  
 ⑧ 糞箕掃帚は「ちり取り」「はうき」。  
 ⑨ 勃跳は「をどる」なり、帶累は「まさぞへ」、發顛は前出。  
 ⑩ 朝天門瀾頭市は銀座通り、新京極なり。  
 ⑪ 村僧法一禪師雪巢と號す。  
 ⑫ 臨安府の命により遷次公選せられて住持の職を領するなり。

し、道體康安なりと。深く以て慰となす。中間長蘆に赴き、相見を得んと欲す。已に入院せるを知る。人は言ふ、多福は政に於瀆新城の深山中にありと。只悵然を成すのみ。我身畔、別に人無し。甚だ汝の歸來を望むも、已に出で、空王の印を佩ぶるを奈何せん。事兩全を要することは則ち難し。且つ勉力して、向前道を行せよ。自己を恣縱にして、厚からしめ、却つて他人を薄うすべからず。軟暖淡薄は、汝も亦深く之を悉せ、今の住院多くは此の如し。① 相信すべきなり。若し秋間に到らば、我定めて天台萬年の觀音別院に歸り、必ず長往の計をなさんと要す。汝を見るに因なきなり。且つ自ら世間の人情に保順して、祖道を光顯せしめよ。至祝」と。普燈には、只だ其嗣法の、法常首座を載するのみ。

② 愛堂妙湛禪師、水庵に、杭の淨慈に依つて、水頭淨頭となる。一日寺前に於いて、扇を擧げて錢を化す、忽然として猛省し、因つて臂を縮むるを忘る。旁僧訶して曰く、「默子、扇上に錢あるなり」と、通身汗掖より出づ。歸つて水庵に白して之を印可す。亦頌あり、之に示して云ふ、③ 「一堆屎上の一尊佛、毫光を放出して天地を照す。錢湯爐炭裡に蓮を生ず。只洗面に因つて鼻を摸着す」と。肯堂の爲めに、衆に首たるの日、新福帥王公度、遊山し、與に論じて契合す。福に到つて、黃檗を以て之を招く、後に、吳門の守趙公彦樞の承天の請に赴き、方

① 釋迦の印綬を佩び住持せしむ云ふなり、住持に視象の儀あり。  
 ② 小言と思はずに予が言を信ぜよ。  
 ③ 愛堂妙湛は水庵師一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。  
 ④ 花藥欄金毛の獅子、毫光は黃金佛の白毫光なり。



に順寂す。愛堂は安吉の人、朴野にして文飾を絶す、問々語言を發すれば、枯柴の如し、人見るに及ばず、惜しい哉。

臨安府徑山少林の佛行松禪師は、建の浦城の徐氏に生れ、業を夢筆峰の等覺に受け、安吉の報本に瑞世し、東庵に嗣ぐ。道聲四に馳す、未だ幾ならず、杭の淨慈に住す。上堂に、「僧鹽官に問ふ、如何なるか是れ本身の盧舍那。官曰く、我が爲めに淨瓶を過し來れ。僧淨瓶を提げて至る。官曰く、復舊處に安んじ着せよ」と云ふを擧して、拈じて云ふ、「鹽官八萬四千の毛竅、竅々俱に開き三百六十の骨節、節々斷たんと欲す惜むべきかな這の僧夢の如くに相似たり」と。上堂に、「洞山云ふ、初秋夏末、兄弟東に去り、西に去る。直に萬里無寸草の處に向つて去れ。後來瀏陽庵主道ふ。門を出づれば便ち是れ草。大陽云ふ。門を出でざるも亦漫々地。」と云ふを擧して、拈

蓋し承天の住持たること未だ久しからずして遷化せしなり、故に人多く見るに及ばず。  
佛行松禪師は東庵徳光に嗣ぐ、光は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。

じて云く、「同聲相應じ、同氣相求むることは、則ち三大老無きにはあらず。仔細に檢點し將ち來れば、總て是れ藤蛇足を繞る。且く利害什麼の處にかある。誰れか知らん雲外千峰の頂。別に靈松の雨を帯びて寒きあり」と。上堂に云ふ、「是法不可示。言辭相寂滅。春葩千萬叢。春山千萬疊。正與麼の時。釋迦老子鼻孔を打失す。是れ汝諸人還つて知る麼。」喝一喝して下座。上堂に云ふ、「大用現前を得んと欲せば、直に須らく頓に諸見を忘すべし。諸見若し盡くれば、昏霧生せず、大智洞明なり。更に他物

にあらず。遂に拂子を擧して云ふ。看よ看よ、若し見ると道はゞ、頭上に頭を安ず、若し見すと道はゞ、頭を斬つて活を覓む。畢竟如何ん。良久して云く、泊んど錯つて注脚を下すべかりし。喝一喝して下座。既に席を退き、武康宴山の接待寺を過ぐ。寧廟尤も佛法を重んじ、嘉定の間、再び旨を得て南山を董す、即ち詔して、延和殿に登對す。號を佛行禪師、金襴の袈裟を賜ふ、寵榮至れり矣。  
臨安府淨慈の肯堂充禪師は、餘杭の人にして、顔萬庵に嗣ぐ。風規肅整、望み一時に尊し、即心即佛を頌して云く、「美なることは西施の金闕を離るゝが如く、嬌なることは楊妃の玉樓を下るに似たり。終日君と花下に醉ふ。更に嫌ふ何れの處か不風流」と。曹山酒を喫するに云ふ、「販海の波斯大唐に入る。先づ珍寶を將つて暗に埋藏す。却り來つて手を伸べて人に従つて覓む。爭奈せん瞞じ難し當行あるを。」擧す、萬庵先師語あり、云ふ、「佛床に坐し、佛脚を研る。東家の孔夫子を敬せず。却つて他郷に向つて禮學を習ふ」と。拈じて云く、「泥に入り水に入るは、則ち先師無きにはあらず。爭奈せん寒蟬枯木を抱き、泣盡くれども頭を廻らさず。拄杖を卓して云く、灼然として頭を回らさざる底ありや。肯堂 升子裡に下つて、你を禮すること三拜せん」と。昔し大瀉の佛性謂ふ、「頌古拈古は、

寧宗皇帝は南宋の第四主。  
肯堂彦充は顔中庵に嗣ぐ、中庵は大惠に嗣ぐ、大惠は圓悟に嗣ぐ。  
公案なり、僧問ふ、清銳孤貧請ふ師救濟せよ、山曰く、銳蘭黎近前來銳近前す、師曰、泉州自家三盞酒喫了猶道ふ唇を沾さず。  
販海の波斯は海を渡つて商賣に來る波斯國の人なり。  
踏みだんの下に降つて三拜せん、又踏床とも云ふ。  
佛性諱法泰、大瀉に住す、圓悟に嗣ぐ、古人の公案を頌し、或は拈提するを頌古拈古と云ふ。



奢儉所を得んことを要す、人の錢を使ふを解するが如く、多きを必ずとせざるなり」と。善く肯堂の語を讀む者は、當に自ら之を知るべし。

寶峰の端庵主、久しく佛照に侍し、其の女子出定の因縁を頌するを見て、悟入の處あり、一日丈室に造り、座の左側に於て、又手して立つ、少頃して便ち出づ。照、前に呼び來して曰く、「什麼の辨白かある。」端又右側に於て、又手して立つ。照喝す。端趨り出づ。照之を頷ふ。端、恂恂たること鄙人の如く、小庵に居て宿給なし、然も戸外の履常に満てり、同門の權孤雲、印鐵牛の如き、書を致して招けども出でざりき。

安吉州烏回の月林觀禪師は、性純誠にして矯飾なし、福の侯官黃氏の子なり。初め牧童となり、鞭もて牛を叱して省あり、革血を屏く、雪峰の忠道者に投じて出家し、荆南二聖の戒準に調して得度し、澧州の證老衲に見えて、其の法を獲たり。初めて室に造るとき、話を擧するを聞く、云く、「若し能く物を轉すれば、即ち是れ如來なり。面前の香臺、作麼生か轉せん。」曰く「築着、磕着」と。叱し去らる。復隨侍す、饒の薦福を過ぎ、雲門の話墮を見る。又十年にして、一日蓮池を繞つて行くと、自ら誦して

④ 端庵主は佛照に嗣ぎ、佛照は大惠に嗣ぎ、大惠は圓悟に嗣ぐ。  
⑤ 恂恂は恭敬の貌、此語もと漢書に出づ、宿給は一晩の蓋へなり。  
⑥ 月林は證老衲に嗣ぐ、證は月庵に嗣ぎ、庵は開福の寧に嗣ぐ、寧は五祖法演に嗣ぐ。  
⑦ 築着は撞着に同じく、「つきあたる」なり、磕着は石と石と打ち合す音「つきあたり」「かちあたり」なり。  
⑧ 碧斑賓豹博は、唐音「ビン、パン、ビン、ピヤウ、ボ」唇音、當的帝都丁は、唐音「タン、テ、テイ、ト、テ」舌音なり。  
⑨ お玉お玉に用事はないが忍び

云く、「那裡か是れ這の僧話墮の處」と。忽ちに大徹す。塗毒徑山にあり、遯庵華藏にありしとき、皆書の之れを致すありて分座す。洞山の麻三斤を頌して云く、「唇上は碧斑賓豹博、舌頭は當的帝都丁。頻りに小玉と呼ぶ

男にしらせた。

① 閻維は火葬なり。

② 曹源道生は密庵成傑に嗣ぐ、傑は應庵曇華に嗣ぐ、華は虎丘紹隆に嗣ぐ、隆は圓悟に嗣ぐ。

元と無事。只檀郎が聲を認得せんことを要す」と。嘉泰の間、吳門の聖因に瑞世し、承天萬壽に遷る、學者輻湊す。烏回に住し、疾を示すの日、猶ほ再鼓入室し、且つ曰く、「桂花開く時、吾れ將に行かんとす」と。其徒をして預め夏制を結ばしむ。已にして桂花盛に開く、嘉定丁丑四月十三日也。參禪入室し、再び鼓を鳴らして普説す、衆集まり定まる時、拄杖を拈じて云く、「拄杖あらば拄杖を與へん。拄杖無くば拄杖を奪はん。衆中會する底のもの有るなきや。出で來つて道へ看ん」と。衆對ふるなし、拄杖を擲下して危坐、偈を書して、寂す、世を闋すること七十五、坐夏五十一。閻維のとき、舍利計るべからず。烏虛命世の宗師、死生に處して、雲行き鳥飛ぶが如く、初より留礙なし。烏回夏中に入滅して、桂花盛に開くこと其の言の如し、是れ尤も其超絶奇瑞明驗の處を見る。荷負大法精一の力に非ざらん乎。

曹源生、禪師、信の龜峰にあつて衆に示して云く、「朝より暮に至るまで、鐘魚鼓板、諸人の爲めに上々の機を發し了れり。若し信得及せば、塵沙の諸佛、諸人の脚跟下にあつて跣跳す。若し信不及ならば、龜峰口を收得して飯を喫せん」と。禪床を拍つて下座す。眞に黃龍の所謂數世の富人、一錢



も虚用せざるが如きのみ。

松源岳 禪師、初め閩に入つて、乾元の木庵に見ゆ。久うして辭し去るとき、木庵「有句無句は藤の樹に依るが如し」と擧す。源曰く、「裂破。」曰く、「琅邪道ふ好一堆の爛柴と甕。」曰く、「矢上に矢を加ふ。」曰く、「吾が兄の下語、老僧過す。能はず、其れ如んせん未在なるを、他日拂柄手に在るとき、爲人し得ず、人を驗することを得ず」と。曰く「爲人は博地の凡夫をして、一超に聖域に入らしむ、固に難し。人を驗することは、面前に打向して過ぐ、口を開くを待たずして、已に渠れが骨髓を知る、何の難きことか之れあらん」と。庵手を舉げて曰く、「明々に汝に向つて道ふ、口を開くは舌頭上に在らず、後當に自ら知るときあるべし」と。年を逾えて、源密庵に衢州の西山に見ゆ、隨つて問へば即ち答ふ。庵笑つて曰く、「黄楊の禪のみ」と。後ち徑山に在つて、庵旁僧に不是心不是佛不是物と問ふを聞いて、忽ち大徹す。乃ち曰く、「今日方に知る、木庵の口を開くは、舌頭上に在らずと道ふことを」と。源は處の龍泉の吳氏に生れ、法を蘇臺の澄照に開く、慶元の間、旨を蒙つて靈隱に住す、門庭高峻にして、入るもの大器たらざる鮮し。烏摩松源、破庵、

- ①松源崇岳は密庵に嗣ぐ、曹源と兄弟なり。
- ②非難の仕様は無けれどもどうも矢張りけない。
- ③爲人は學者の世話するなり、人を驗するは人の手元を試験するなり。
- ④もうよいよいと手を舉げて制するなり。
- ⑤黄楊は「ツゲ」の木なり、生長し難きもの、黄楊の禪は「コドリツギ」或は「シヤチコバ」の禪なり。
- ⑥南宋寧宗の年號也、日本後鳥羽院建久に當る。
- ⑦中峰は密庵の塔所、天童にあり。
- ⑧大梅の止翁は無用の淨全に嗣ぐ、全は大慧に嗣ぐ、慧は圓

曹源、萬庵、豈に中峰の道起すものに非ずや。

大梅の 止翁禪師は、無用の嗣子なり。衆に示して云く、「瑞岩の示衆支離を絶す。栗棘金圈劈面に揮ふ。直下に人あり吞透得せば、更に須らく來つて頂門の鎚を喫すべし」と。語言質直、其の人の如し。住山の規模尤も人に過ぐ。

月林觀 禪師の會下に、一杜多の、行なるものあり、俱胝一指の話を明得す。且曰く、「吾れ老いたり、須らく再來すべし」と。歸寂の後三十餘年にして、月林湖の報本にあり、夜夢らく、開堂して俱胝の話を擧するに、杜多の行、室に至つて一指を豎つと見る、明日室内に前話を擧す、孤峯の秀公時に日過の中にあり、趨り入つて亦一指を豎つ。月林曰く、「杜多行再來す」と。

福唐の 明首座、寂照と號す、飽參聰敏なり、久しく空叟に四明の玉几に侍す。叟風疾を感ずること數年、左右相繼いで辭し去る、照服勞益々勤む。叟常つて囑するに、福鮮し、宜しく出世爲人すべからざるを以てす。里に歸つて、鑑絶照の爲めに、衆に鼓山に首たり。帥李公俊大雲峰をもつて之れを招く、辭するに偈を以つてして云く、「箇は是れ皇朝無事の僧、談禪説

悟に嗣ぐ。

- ①栗棘は栗のいがなり、金圈は鐵丸なり、或は云ふ、圈は牢なり、鐵の牢なりと、劈面は「まつかう」なり。
- ②月林は證老衲に嗣ぐ、前出。
- ③鉢坊主、名は行俱胝、和尚は指一本で横説堅説す、之を俱胝一指と云ふ。
- ④孤峰秀は月林の法嗣なり。
- ⑤寂照明首座は空叟宗印に嗣ぐ、印は佛照德光に嗣ぐ、光は大惠の法嗣なり。
- ⑥今の肺病ならん。
- ⑦汝の福分鮮し、出世して人の世話などすべからず。
- ⑧絶照の話は中巻に出づ。



道總べて無能、頽然日を送るすら猶ほ贅かと嫌ふ。敢へて虚名を把つて祖燈を玷さんや」と。絶照も其の出づるを勉む、復た曰く、「願はくは閑人と做らん」と。偈を述べて云く、「恰も半頭を露して原畔に立つ。故人底事ぞ又相逢ふ。柴門此を去つて關鑰なし、佛若し來る時却つて容れず」と、即日遁れ去る。後に閩清の白雲に寓し、學者景嚮す。又數年にして、帥趙公希諱、禮を盡して雪峰をもて迎請す。照書を以つて、小師 圓庵主に授け、辭謝して赴かず、帥沈香を封じて供となし、將るに四句を以つてして云く、「道人高臥して挽けども來らず。凜々たる清風儒顏を起す。太守親しく道を問ふに由なし。辨香聊か小師の回るに寄す」と。寂照三十餘年、一破紙被を守り、見地明白なるも、記前①に遵つて表褻を恥ぢ、林藪に依つて寂寥に安んじ、始卒易らず、名位を爭競し、佛祖を販賣するものに、其風を聞かしめば、亦以て少しく愧づべきなり。

浙翁佛心 禪師、如璨に示す法語に云く、「本色の道流は、十二時中、六

根門頭、空牢々地なること、一面軒轅の寶鑑の如く、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現す。甚んの眞如涅槃、菩提煩惱をか選ばん。以至、世間の虚幻、情欲、逆順、是非、一々照破して、直きにはれ汚染することを得ざれ。若し也、六根門頭纔かに纖毫の異念あらば、便ち許多か、障をなし、礙をな

① 圓庵主は寂照の弟子也、弟子を小師と云ふ。  
 ② 記前の語は福鮮し云云是也、褻は表なり、出世を云ふ、始卒は始終なり。  
 ③ 佛は法を賣り祖師は佛を賣るなり。  
 ④ 瑛漸翁は佛照に嗣ぐ、前出。  
 ⑤ 空牢牢は空朗朗なり、黃帝軒轅氏の照鏡軒轅鏡は書に出處なしと聞く、蓋し古來然く相傳ふるなり。

し、冤をなし、懟をなされて、七顛八倒を得せしむ。凡聖の岐此れよりして分かる。然れども、凡聖は初より兩種なし。只だ是れ一箇了事の人のみ。了する底を喚んで聖となし、了せざるは便ち是れ凡夫なり。龐居士云ふ。「是れ聖人にあらず、了事の凡夫」とは、此れの謂なり。既に得了を知らば、更に須らく子細にすべし。目前に輕結裹着すべからず。箇の裡方に人の牙關を咬定し、且つ崖し將ち去るを見んことを要す。驀然として、懸崖に手を撒する處に崖到せば、正に好し、人の爐竈に入り、人の鉗鎚を受け、箇の本色の道流と稱せんこと、分外と爲さず。忽爾として時縁に迫られ、出で來つて、人の與めに、粘を解き、縛を去るも、内亦愧づる無うして、自然に綽々として、餘裕あるなり」と。此を閱するに、眞に臨濟宗の骨髓のみ。

常州華藏の 明極禪師は、暉自得に嗣ぐ、嘗つて保壽開堂の語を擧し

て、拈じて云く、「保壽開堂衆の爲めに力を竭す。三聖推し出す、故園の春色。保壽便ち打つ。可知禮也、鎮州一城の人の眼を瞎却す。三聖重々に肝膽を露す。保壽下座便ち方丈に歸る。千古叢林の榜様を爲す。喝して云く。喚んで 榜様と作し得んや。」明極は、大父をもつて宏智に事ふ、拈提は、山濤の兵を論するが如く、闇に孫吳に合ふ、亦叢林の榜様たるべきなり。

① へばりつくなり。  
 ② 崖又堙に作る、拒也、邪覺ものを推しのけて進むなり。  
 ③ 明極は暉自得に嗣ぐ、自得は宏智覺に嗣ぎ、覺は丹靈の淳に嗣ぎ、淳は芙蓉道楷に嗣ぐ、曹洞派下なり。  
 ④ 可知禮也は「いろはにほへと」なり、支那にて小兒に教ふる習字の手本なり。  
 ⑤ 榜様又模様に作る措模なり。



安吉州鳳山資福の破庵先禪師は、王氏、蜀の廣安新明の人なり。密庵に烏巨に參ず、衆に従つて入室し、其の旁僧の爲めに、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず」と擧するを見て、忽然として朗悟す。復た隨侍して蔣山を過ぐ、五載自ら街衢せず、亦未だ嘗て其の許可を得ず、遂に辭して蜀に歸る。密庵酒かに小肩輿に乗じ、前詣すること五里、袖中より語を出して之れに餞す。曰く、「萬里南來す。川蕪草、奔流刃を度して玄關を叩く。頂門歡晴す摩醯の眼。去住還た珠の盤に走るに同じ」と。破庵夔府の臥龍に住して、始めて法嗣の書を通す。時に密庵天童にあり、育王の佛照に謂つて曰く、「元來川僧に道義あり」と。佛照曰く、「待て、汝が知り得ることの、遲了なることを」と。蓋し密庵は平生川僧を怕れて、掛搭を肯んせず、而して佛照は川僧を喜ぶ、堂中の大半は是れなり。

妙峯善禪師、台州の惠因に住す。開爐の示衆に云く、「翠雲例に隨つて也た開爐。寒灰を撥盡して火も也た無し。拂子を豎起して云く、「拈起す死柴頭上底」。吹いて云く、「知らず誰れか是れ赤鬚胡」と。高原之れを聞いて、青山鄭公に薦む。公の云く、「見説らく、他れ人の院子を住壞す」と。原云く、「佛法も也人の撐拄する在らんを要す」と。後に臨安の永教に居す、公果して省節を付下し、請じて小瑞岩に住せ

①破庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應安に嗣ぐ、應安は虎丘に嗣ぐ、虎丘は圓悟に嗣ぐ。  
 ②六祖風動幡動の公案。  
 ③自己の見所をてらはず、密庵も蜀僧は嫌ひなれば印可せざりしなり。  
 ④蕪草は横着なり、四川の人は手に合はぬ故川蕪草と云ふ。  
 ⑤妙峯は拙庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。  
 ⑥人の寺を預りて大層荒したと云ひしなり、佛法の頹瀾を柱ふる柱も必要なりと答ふ。

しむ。再び佛照に育王に見え、風幡の語を以つて、箭鋒の機にあつ。佛照之に贈るに偈を以つてして云く、「今日君が爲めに一線を通す。斬釘截鐵吾が宗を起す」と。妙峯は劉氏なり、晚年叢林老劉をもつて之を呼ぶ。

衢州報恩の百拙登禪師は、和州烏江の人、族は閔氏、應庵の晩子なり。初めて見ある時、言ふ、「夜半白晝の如し」と。學者に示して曰く、「道人の相見は週遊する莫れ。大地都盧べて是れ一州。手に信せて拈じ來り、手に信せて用ふ。始めて知る大地一毫に收まることを」と。又曰く、「道人の相見。哆々すること勿れ。一句以つて干戈を定むべし。得失是非都べて拈却す。知らず那事か復た如何ん。」報恩に住すること三夏、賦性彫飾を絶し、機語皆質直なり、故に百拙の號あり。

野雲南禪師は、會稽の人、表裡端勁なり、先きに無用の會中に於て圓頭となり、契悟し、後に瑞世す。衆に示して云く、「霜風落木、雁陣寒きに驚く。生身の父母、心肝を露出す。觀音菩薩、嗔霍不盡。鼻孔を失却す。諸人且喜すらくは天下太平なることを」と。又云く、「百計推尋すれども永く面を見ず。一時に休し去れば、在處に渠れに逢ふ。長連床上に粥を喫し飯を喫し、飽を取るを期となす。我れ且く欄に問ふ。常住の一粒米、是れ幾番か手を過すぞ。」烏虜、楊岐の道、大慧に至つて

①百拙善登は應庵に嗣ぐ、應庵は虎丘に嗣ぐ、虎丘は圓悟に嗣ぐ。  
 ②哆々は多言なり、大口あいてしやべりちらすは禁物なり。  
 ③野雲處南禪師は無用淨全に嗣ぐ、無用は大慧宗杲に嗣ぐ、大慧は圓悟克勤に嗣ぐ。  
 ④生みのおやぢつらだしをした、嗔霍は怒りおどすなり。



大いに振ふ。語言機辯<sup>①</sup>胥江八月の濤、能く遏むるもの無きなり。無用は、祇だ其の親切底を以つて人を接す、亦敢へて湊泊するもの無し。晩に始めて野雲を得、此等の示衆は、真に無用親切の語なり。孰れか<sup>②</sup>優孟たり、孰れか孫叔たるを知らず、佛日の子孫たるを忝しめざるものなり。

淳庵淨<sup>③</sup>禪師、蜘蛛の頰に云く、「立處は孤危、用處は親し、一絲頭上に乾坤を定む。渠儂は是れ機變に誇るにあらず。衆生の爲めに命根を斷たんと要す、」と。人の爲めに誦せらる。尤も能く節儉省事、人を勞役せず、亦舜老夫の爇燈掃地、皆躬ら之を爲すが如し。

退庵奇<sup>④</sup>禪師、印別峯の室に徑山に預る。別峯纔かに其の來るを望見し、失喜して、床を下つて之れに接し、復た衆の爲めに舉話せず。退庵衆を妨げんことを恐れて、後惟だ未だ至らず。金山に住する普説に云く、「便ち恁麼に散じ去るも、早く是れを平生に辜負し了れり。那んぞ更に進前諮詢するに堪へん。某甲等、生死事大無常迅速の爲めに、種草と爲るに堪へず。若し是れ互に賓主となつて、成法爲人せば、却つて些子に較れり。此れを已に徹證するものの説と爲す。或るものは久しく叢林にあり。用心せざるに非らず。箇の透徹を得る能はざるものは、過什麼の處にかある。過は信根の重からざるにあり。半は信じ半は疑ひ、做

① 大慧下に法嗣九十九人を出だす。  
② 揚子江八月の満月を以て濤の高浪となす、澎湃として山岳の如し。  
③ 優孟は役者なり、曾て孫叔敖に扮す、佛日は大慧果禪師、前出せり。  
④ 淳庵善淨禪師は息庵親に嗣ぐ、親は水庵師一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ、退庵道奇は別峰印に嗣ぐ、印は密印民に嗣ぐ、民は圓悟に嗣ぐ。  
⑤ 謙語なり。

すに似て做さず。ただ是れ決定の志無く、又全身放下すること能はざるなり。縱使放得下し做し得るも、理路絶する處、情識盡くる處、靜境も戀はず、鬧境も拘らず、只だ與麼に死水裡に浸在して、分明に死したつて、活すること得ざるもの、往々に多し。只這裡に向つて着到し、若し能く猛烈にして、寄せ將ち去り、一撞に撞着して初めて得ん。此れを久しく叢林にあつて、未到頭を打するものの説となす。若し是れ乍入叢林の兄弟、信根純淨にして、此の事を諦聽せば、恰も箇の白練絹の如くに相似て、他人の點汚を受けず。明師に遇ふを得て、一片の誠心を發し、人前に出づるを願はず。唯だ只だ是れ參禪學道し、心地を發明せんことを要し、之に資するに勇猛確然生死の大事をもて念となし、十二時中、時時に<sup>①</sup>戲捕し、驀然として慮を泯じ知解を絶せば、晴空萬里片雲を掛けざるが如くならん。何ぞ日頭の出でざるを思ひんや。日頭僅かに出づれば照さざる處なし。日頭の出づる時恰も箇の什麼にか似たる。山野老婆心切にして、<sup>②</sup>壁角頭に向つて一片の陳橘皮を拈出し、諸人の爲めに様子を作さん。豈に見ずや。壽禪師因みに普請の次いで、一片の柴頭を放下して、驀然として契悟す。便ち道く、「撲落他物にあらず。縱横是れ塵にあらず。山河と大地と、全く法王身を露はす」と。這箇の時節還つて計較し得んや。人の水を飲んで冷暖自知するが如し。法眼和尚も也曾つて恁麼に打發すること一回す。便ち解道す。「物物心上に到る。全心物おのづから閑なり。古今城郭の裡、得

① 戲は親ふなり。  
② 壁の角の塵まみれの内より蟲喰ひの橘皮を拈出して見やう。



るもの住もすれば山の如し、』と。眞語の者實語の者と謂ふべし。恁麼の時に當つて、殊勝を求むるを用ひざるも殊勝自然に至る。但だ壽禪師大法眼此の如きのみならず。三世の諸佛、六代の祖師、天下の老和尚に至るまで、皆此を出でず。若し別證別悟あらば、即ち是れ外道の法にして、是れ佛法にあらず。金山恁麼に、<sup>①</sup>切々怛々たること、恰も箇の媒人の如くに相似たり。東邊に説くこと一歇し、西邊に説くこと一歇し、兩邊に説くこと一合す。到家相見するに至るに及び、備自ら理會して、媒人の事に干らす。備若し實に到家相見すること一回せば、便ち捨つるに忍びざるなり。參禪學道は、須らく捨つるに忍びざる處底の田地に至つて、正に好し工夫を做すに、人の山に上るが如く、各自に努力すべし。烏庠、大爐輔<sup>②</sup>に入り、大鉗鎚に上り、等閑に一機を發し、一境を示すも、自ら尋常にあらず、此等の普説、恰も田を賣つて契を立つる如くに相似て、東西南北、四至、一々人の爲めに指出す。別峯三十餘年、曲糸床に坐して、只だ退庵を得て、<sup>③</sup>一鱗足れり。

南嶽の方廣照禪師は、淳素鄙朴、罵詈を以つて佛事をなす、學者之れを憚る。二僧あり、至る、照問うて曰く、「天寒く歳暮る上座何れより來る」。僧曰く、「一家事あれば百家忙し」。照曰く、「相見す

<sup>①</sup>達磨二祖三祖四祖五祖六祖より、其餘の諸善知識に至る皆然り。  
<sup>②</sup>切怛怛は永々しく用も無き事をしやべるを云ふ。  
<sup>③</sup>到家は家に到るなり、此の家は床も柱も疊も天井もなし、本分の家山なり。  
<sup>④</sup>爐輔は鍛冶の「ふいこ」なり、鉗鎚は鍛鍊なり。  
<sup>⑤</sup>古語に衆角多しと雖も一鱗足れり。  
<sup>⑥</sup>方廣照禪師は佛照徳光に嗣ぐ、光は大慧に嗣ぐ、大慧は圓悟に嗣ぐ。

る底は是れ阿誰ぞ。僧曰く、「某甲と和尚と」。照香臺を指して曰く、「面前は是れ什麼ぞ」。僧曰く、「香臺」。照曰く、「將に謂ふ收番<sup>①</sup>の猛將と元來是れ行間の小卒のみ」。僧喝す、照便ち打す。第二僧に問うて曰く、「天寒く歳暮る、上座何れより來る」。僧曰く、「氣力の祇對するを得ず」。照曰く、「聞く爾衆を攪して出院すと是なりや否や」。僧曰く、「和尚幾時か者の消息を得たる」。照曰く、「近前來爾が爲めに道はん」。僧舌を吐く、照便ち打す。且つ舍胡詬罵して曰く、「我が這裡米なく菜なし、也來つて亂統す」と。拄杖を以つて之れを趁ふ。照は西蜀の人にして、佛照の會中に、照白眉と稱するものなり。垂示機語、空叟鐵牛の下に在らず。

橘洲曇禪師、字は少雲、嘉定府の人、峽を出で、明の仗錫に住す。暇日論を著して、佛祖の機縁を發明し、名けて大光明藏と云ふ。筆勢宏濶なり。惜しいかな、未だ全書を成さずして寂す。丹霞を論贊して云く、<sup>②</sup>殿前の草を割り、聖僧の項に騎り、天寒うして木佛を焼く。三事併せ案するに、夫れ豈に他人の能くする所ならんや。衡山の雲の軒豁呈露、遽かに突兀を見るが如し。自ら能となさざるなり。然れども、時に觀願悻

<sup>①</sup>收番はえびすに打ち勝つと云ふ意。  
<sup>②</sup>其の様に寒うては返詞する氣力もなしと。お前は大衆を煽動して搥分散させたと云ふがほんまか。  
<sup>③</sup>舍胡又含糊に作る、口を「モガモガ」さすなり、詬罵はのゝしるなり。亂統は亂道と同じ。  
<sup>④</sup>橘洲寶曇禪師は大惠に嗣ぐ、大惠は圓悟に嗣ぐ。  
<sup>⑤</sup>大光明藏三冊、今猶ほ傳ふ。  
<sup>⑥</sup>殿前草刈の作務を命ぜし時、丹霞盆に水を盛り剃刀を添へて石頭の前に伏す、石頭笑つて爲めに鬚髪を剃除す、是れ丹霞得度の因縁なり。次の二事は人皆之を知る故に注省。  
<sup>⑦</sup>南陽國師の侍者には一手許して南陽國師を生擒せるなり。  
<sup>⑧</sup>大光明藏には宜しくの上に學者の二字あり、津は津液なり、後腋の涎なり。



怖して、其の守る處を喪ふものあり、院主是れなり。等閑に南陽侍者を放過して、直きに南陽國師を擒取す。謂ゆる弓を挽いては、須らく強きを挽くべしとは、是れ此の手なり。重く末世疲癯の疾を哀しみ、古人必効の方を増損し、大法藥を成すもの、宜しく元和津を用ひて嚙下すべし。和平の福立つて俟つべきなり」と。余佛智老人に見えしとき、偶々之を閱す、且つ曰く、「學者も亦宜しく此に於て、元和津を用ひて嚙下すべし。」洲嘗つて自ら龜志を撰す。略に云く、「初め楞嚴圓覺起信を聴き、復た捨て去つて、成都照覺の徹庵、白水の庵に依り、包を繋げて南に來り、先大慧に育王徑山に従ひ、後東林の萬庵、蔣山の應庵に見ゆ。辛苦艱難始めて平生の願を畢れり」と。則ち知る、其涉歴尤も艱辛なるを、未だ容易にして得るを聞かざるなり。

慶元府天童の無際派禪師は、佛照に嗣ぐ。建安の張氏に生る、慶元四年常の保安に開堂す。上堂に云く、「説けば即ち無功有過、説かざるも亦是れ罪過。今より各々己れの過を省して、以つて人の過を責むる無かれ。拄杖應に放過すべからず。也從頭より按過せんことを要す。拄杖を卓して

①音伊なり、古句に伊字の三點首羅に似たりの句あり。  
②無際了派禪師は佛照に嗣ぐ、佛照は大慧に嗣ぎ、大慧は圓悟に嗣ぐ。  
③慶元四年は日本の建久九年にして、西行法師示寂の年なり。  
④易の卦の下三本を内卦と云ひ、上三本を外卦と云ふ。  
⑤小畜の三爻變じて大過を成す、風山と云ふよりも風天と云ふ方安なり、風山は漸の卦なり、小畜は上風下天なり、小畜は密雲して雨ふらざる卦なり。無際は初め密庵に參じ後佛照に嗣ぎしなり。  
⑥耽源は人の名、曾て頌を作つて曰く、湘の南潭の北中に黃金あり、一國に滿つ云云。  
⑦夾山善會の船子德誠に參する因縁を頌す、船子善會に問ふ、絲を垂るる千尺、意は深潭にあり、釣を離るる三寸、子何ぞ言はざる、會口を開かんと擬

す、船子機を以つて劈背に打つて水に落す、會才かに船に上る、船子急に迫つて言ふ、道へ道へ、會又口を開かんと擬す、船子また打つ、會茲に於て豁然大悟す。  
⑧生涯は資産なり、喪盡は身代限りなり、見聞覺知得失是非の資産を喪失せるなり。  
⑨裸々は明白なり、洒洒は清潔なり、赤は空の義、赤地千里などの赤なり、沒可把は捕へ處なきなり、無鼻孔と同じ。  
⑩東庵は佛照禪師、徳光多く宗匠を出す、又拙庵と號す。  
⑪螺庵元肇禪師は晦庵惠光に嗣ぐ、光は雪堂道行に嗣ぐ、行は佛眼清遠に嗣ぐ。五祖下に三佛あり、佛鑑、佛眼、佛果、各格外の機を具し多く宗匠を出す、是れ佛眼派なり。  
⑫祖師は雪峰の開山義存禪師なり、蟬螟は蚊睫に聚まる「ぶ

云く、内卦已に成り、再び外象を求む。又卓すること三下。風山小畜を占得して、澤風大過を變成す。卓すること一下して下座。初め密庵の法席に預る、剪紙塔あり、戯れに頌せしむ。頌して云く、「當陽に拈起すれば剪刀裁。七級の浮圖手に應じて廻る。笑ふに堪へたり。耽源多口の老。湘南潭北戸骸を露はす」と。一衆服膺す。船子に讚して云く、「三寸釣を離れて、撼すること一椀す。百千の毛竅冷颼々たり。然く兩手親しく分付すと雖も、要するに渠儂が自ら點頭するにあり。」靈照女を讚して云く、「老爺生涯を喪盡するの後、汝を累して街に沿ふて箆篋を賣る。是れ家貧にして兒子の苦しむにはあらず。此の心能く幾人の知るある。」叢林之れを稱す。嘉定の間、天童に在つて疾を示す。辭衆の上堂に云く、「十方壁落なく、四面亦門なし。淨裸々、赤洒々。沒可把。喝一喝して云く、幾度か賣り來つて、還た自ら買ふ。爲めに憐れむ松竹の清風を引くを、」と。下座して丈室に入り、端座、泊然として化す、壽七十六、膺五十二。佛果の下、大慧人を接するの多き、馬祖の如し。今は獨り東庵下を盛んなりとす。



螺庵肇①禪師、雪峰に住するの日、祖師を賛して云く、「徳山の棒下に桶底脱し、蟪蛄眼裡乾坤潤し、東南の第一峰に坐断し、百川倒流して鬧聒聒たり」と。自ら照子に題して曰く、「陰崖鳥は滅す槎頭の雪、午夜猿は啼く竹外の烟、怪しむなかれ住山技倆なきことを。牛に騎つて踏破す水中の天。」余己酉の夏、石翁玉和尚の會中に在り、耆宿猶ほ能く之れを言ふ、今僅かに此の二贊を憶すと云ふ。

金華の元首座、剛峭簡嚴、叢林目して飽參となす。等庵に白雲に見えて

始めて大事を了す。僧問ふ、「如何なるか是れ佛。」曰く、「即心即佛。」問ふ、「如何なるか是れ道。」曰く、「平常心是れ道。」問ふ、「如何なるか是れ佛。」曰く、「南斗七北斗八。」問ふ、「如何なるか是れ道。」曰く、「猛火に麻油を煎る。」問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」曰く、「龜毛長きこと數丈。」傳者皆喜ぶ。噫若し此の如く答話を辨驗せば、惟だに己靈を埋没するのみにあらず、抑も亦前輩に辜負す。

蒙庵聰禪師は、福州長樂の朱氏に生る。少長侵侮好狎せず、年十九にして信の龜峰の光晦庵に依り、二十七にして得度す。即ち告ぐるに、衆に隨つて專一に己身の大事を體究し、衆務をもつて役となすを免れんと欲するを以つてす。庵笑つて曰く、「汝緊參禪を要するや、佛法は一切作用の處、

と一なり、聒聒は水聲の浩浩たるを云ふ。

② 照子は肖像なり、自分の肖像の贊なり、槎は「いかだ」なり。

③ 蒙庵元聰禪師は螺庵と俗兄弟にして又同じく光晦庵に嗣法す、佛眼派。

④ 緊參禪は當時の語、確かり參禪するを云ふ。

尋常行履の處にあり、何んぞ事務の奪ふを懼れんや。即今且く一月の日を限り、如し了せずんば、決して罰して怒さざらん」と。退いて、佛法は尋常行履の處にあるを以つて、寫して窓上に貼し、脇席に至らざるもの半月、庵時々黙かに之れを探る。其の作意甚だ猛烈なるを見て、私かに念じて云へらく、此の子若し悟らすんば、恐らくは狂し去らんと。一日鼻を搗めて泣聲あるを聞いて云く、「啞、此の子を壊したんぬ」と。詢問して乃ち俗家訃音の至れるを知る。庵舉意して曰く、「這裡好し一槌を與へんには」と。即ち喚び來つて問うて曰く、「汝に什麼の事がある。」且つ道ふに父の亡するを以つてす。聲未だ絶えざるに、庵扭住⑤して一掌を與へて云く、「許多の無明煩惱、甚の處より得來る」と。又一掌す。當下に疑滯氷釋して、即ち禮謝す。口を衝いて偈を呈して曰く、「了々々徹底了、端無く赤脚東西に走る。晴空の月一輪を踏破して、八萬四千門洞曉」と。庵曰く、「這の鈍漢、且く三十棒を放す。」曰く、「某甲も亦和尚に三十棒を放す」と。曰く、「爾看よ、瞎漢使ち敢へて亂統す」と。此れより機鋒峻捷にして敢へて當るものなし。庵臨寂のとき、付するに法衣并びに偈を以てして、曰く、「再來の毒種、元聰侍者、耐へ難し吾が宗、汝が邊に滅せん。」且つ曰ふ、「異日老僧に辜負するを得ざれ。」曰く、「即今も亦少からず。」曰く、「恁麼ならば、三十年後、此の語大に行はれん。」曰く、「蒼天の中更に冤苦を添ふ」と。龜峰に瑞世し、晦庵の嗣となる。後六處に移り、旨を被つて徑山に住し、十四

⑤ 啞又啞字を用ふ、覺えず發聲するなり。

⑥ 扭住はれぢふせるなり。

⑦ 蒼天は旻天に號泣するなり。



夏にして寂す。鳥窠、蒙庵は晦庵の門に於いて、焼尾麟なり、鳥窠の會通を得るが如く、<sup>⑤</sup>三登九至の勞なし。師資縁合と曰ふと雖も、顯微一貫、印の空に印する如く、了に朕迹なし。介にして勇、願にして專なる者の驗に非ざるか。

笑翁堪 禪師、初め遊方して明の太白に抵る。無用問うて曰く、「汝は行脚僧か遊山僧か。」曰く「行脚。」又問ふ、「如何なるか是れ行脚の事。」翁坐具を以つて之を撼つ。無用曰く、「此僧敢へて虎鬚を持つ、參堂し去れ。」一日室中に狗子無佛性の話を擧す。口を開かんと擬す、無用竹篋を起擧す、翁應聲して曰く、「大茶毒鼓、天に轟き地に震ふ。腦を轉じ頭を回せば、横屍萬里。」無用之を然りとす。翁平生未だ嘗つて言を以つて物に徇ひ、色を以つて人に假さず。

自牧謙 禪師は西蜀の人、温雅博喻、雙徑蒙庵の嗣なり。閩に入つて鳳山に住し、鼓山に遷る。時に高州の文學劉鎮叔安、謫居最も久し、間々往いて咨參す。一日問うて曰く、「某甲參禪し得んや。」曰く、「人々は分あり」と。曰く、「即心是れ佛、如何なるか是れ非心非佛。」曰く、「夜行を許さず明に投じて須らく到るべし。」劉此に因つて心を佛法に留む。自牧後に雪峯

⑤ 三登九

① 會通は鳥窠和尚の侍者なり、通偶々出でて諸方に參ぜんと請ふ、窠曰く、汝佛法を學ばんと要せば此の間亦少許ありと、布毛を拈じて之を吹く、通即ち悟入す。

② 雪峯九たび洞山に上り、三たび投子に到る。

③ 笑翁妙湛禪師は無用淨全に嗣ぐ、全は大惠に嗣ぐ、慧は佛果に嗣ぐ。

④ 修行を成す爲めに雲遊する行脚僧か、或は大事了畢して遊山玩水する遊山僧かと尋ねしなり。

⑤ 誠に及ぐしき笑翁なり。

⑥ 自牧謙禪師は蒙庵元曉に嗣ぐ、聰は龜峯の晦庵に嗣ぐ、庵は雪堂行に嗣ぐ、行は佛照法遠に嗣ぐ。

にあり、室中學者に問ふ、「雪峯に句子あり。」僧曰く、「請ふ和尚道へ。」自牧拄杖を以つて趕ひ出す。此の如く爲人せしかば、機に契ふもの少し。

妙峰善 禪師、杭の靈隱に住す。丞相青山鄭公、天童人を闕ぐに因つて、奏して其の行を勉む。答ふるに、年耄に踰えたり、尚ほ夜行休せざらんやを以つてし、二偈を述べて辭免す。一に曰く、「剝啄門を敲いて定眼開く、驚傳す鈞論山に入り來ると。岩に倚るの古木摧殘甚だし。空しく費す陽和の到ること一回するを。」二に曰く、「鼻繩掣斷已

に多年。老倒す松楸澗草の邊り。相國恩波海の如く濶し。何を妨げん乞與日高うして眠るを。」嘗つて魯祖僧の面壁を見るを拈じて云く、「力を費すこと少からず。」瑞岩主人翁云く、「即今亦少からず。」妙峯晚年足限を越えず、晝夜惟だ楮衾を擁して兀座す。垂示語言、皆人を藥發す。鄭公其の録に題して云ふ、「師佛法中に於いて、<sup>①</sup>橫鶩直貫、曾つて留難なし。方圓の器の虚空を滿貯するが如く、執着すべからず。七寶山の智慧の泉を湧かしむるが如く、悉く法味を具す。」と。知言と謂ふべし矣。

慶元府天童の如淨 禪師は、頽然たる豪爽、叢林號して淨長と曰ふ。真歇の塔を禮する偈に云く、「眞空を歇盡して活機に透る。兒孫相繼いで命絲の如し。而今倒指して空しく斷腸す。杜宇血に啼く

- ① 世系前出。
- ② 空しく費すとは、折角花を咲かさうとする春の神様にむだ足を踏ませたとの意なり。
- ③ 鼻繩掣斷は、牛も老いては荒れぬ故、鼻づらの繩を解くなり。
- ④ 豎横十文字自在自由に働くなり。
- ⑤ 長翁如淨は足庵盤に嗣ぐ、鑑は七休狂に嗣ぐ、狂は真歇清了に嗣ぐ、了は丹霞子淳に嗣ぐ、曹洞派なり。



花上の枝。」衆に示して云く、「心念紛飛如何んか手を措かん。趙州の狗子佛性無し。只だ今の無字鐵掃帚、掃ふ處に紛飛多し。紛飛多き處に掃ふ。轉た掃へば轉た多し。掃ひ得ざる處命を拵て、掃ふ。晝夜脊梁を豎起し、勇猛にして切に放倒する莫れ。忽然として大虚空を掃破せば、千差盡く豁として通ず」と。宗趣知るべし矣。「瑞世は誰に嗣ぐ」と問ふものあり、曰く、「如淨。」道號は何とか謂ふ」と問へば、曰く、「淨長。」後太白山に於いて、疾に感して席を退く。涅槃堂に下つて始めて大哭し、鑑足庵の爲めに焼香す。入寂の時、侍者告ぐるに、法堂寶蓋の鏡座上に墮つるを以つてす。曰く、「鏡枯禪の至るなり」と。其の言の如し。

高原泉 禪師、令聞素より著る。慶元の梨洲に瑞世す。問ふものあり、「囊錫已に露はる。至寶は藏し難し。四衆側かに聆く。願くは法要を聞かん。」曰く、「截舌に分あり。問ふ、恁麼なれば則ち一句古今に超え、禪徒萬機を息む。」曰く、「又恁麼にし去るや。」問ふ、「如何なるか是れ梨洲の境。」曰く、「猿は古木に啼き、月は高峰を照す。」問ふ、「如何なるか是れ境中の人。」曰く、「匙挑すれども上らず。」問ふ、「人境已に師の指示を蒙る、向上宗乘の事、若何ん。」曰く、「且く、驢年を待て。」四衆拭目傾耳す。

空叟印 禪師、齊王に詣る、時に佛照の法席鼎に盛なり、善財を頌する

① 枯禪自鏡禪師は密庵に嗣ぐ。  
 ② 高原泉禪師は退庵奇に嗣ぐ、奇は別峯に嗣ぐ、峯は華藏民に嗣ぐ、民は圓悟に嗣ぐ。  
 ③ 匙は「さじ」なり、さじにて挑げ上ぐるなり。  
 ④ 驢の千支の來るを待て、「なとつひ」來いと云ふ如し。  
 ⑤ 空叟宗印禪師は拙庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。  
 鼎は「ヤサニ」と讀むべし、春

もの累昏なり。空叟云へるあり、「童子纔かに生じて河沙の福聚まる。凜然たる氣宇王の如し。覺城の東際、智願已に全く彰はる。展轉知識に參尋して、寸歩を移さず。南方に歷遍す、無窮の事、風高く月冷かに、煙水渺として茫々たり。一聲彈指の處、毗盧の樓閣門戸盡く開張す。塵々頓に現じ、法々圓常す。都て是れ夢中の境界、惺々の後滿面の慚惶。歸り來つて也重ねて摩頂に遭ふ。雪上に更に霜を加ふ。」衆之れを推す。後空叟の道、益々聞著し、亦育王に住す。

浙翁佛心禪師云く、「空東山余才茂 借脚に答ふるの書は、眞に閻老子、殿前一本の敎書なり、今の諸方、道眼若何を知らず、果して能く、此の書を受持せば、則ち他日大いに得力の處あらん。」書に云く、「空は本巖穴の閒人、今長老と作るといへども、只だ是れ前日の空上座のみ。常住の有無一に知事に付す。豈に敢へて私に涉らんや。常住を盗用して、好を貴人に結び、或は用ひて俗家に資給し、或は用ひて知己に接陪す。今にして帶角披毛し、負ふ所を償ふ者は、皆是れ等の人なり。先佛の明言懼れざるべけんや。願はくは、公我を此輩の中に置くことなかれ。則ち公の帝郷に入り、好事を求む、前途未だ量り易からざるなり。耳

秋に鼎盛或は匡鼎來等あり。  
 ① 善財童子五十三員の善知識に參ず、寂後に彌勒の樓閣に至る、彈指一聲樓閣盡く開く事は華嚴出づ、また文殊指南圖贊あり。  
 ② 樓閣開張し善財入り已つて閣門又閉づ、百千萬億の樓閣を見るに、一一樓閣の内に一彌勒あり、諸眷族を領し一善財を併せて立つ。  
 ③ 空東山は晦堂心に嗣ぐ、黃龍派なり。  
 ④ 借脚は金を借るなり、脚は要脚の脚にて金子を云ふ、秀才の余才茂より借金を頼みし返詞ならん。  
 ⑤ 今にしては「追付け」なり、牛に生れかばるを帶角披毛と云ふ。



に逆ふの言、以つて如何となす」と。佛心毎に、此れを以つて人に擧示す。璨隱山もまた云ふ、「常住の金穀、供衆を除く外、幾んど煖毒の如し。住持の人と、其の出入を司どるものと、纔かに需着せば、則ち通身潰爛せん。律部に之れを載すること詳かなり。古人の錢を將ふる、庫下に就て、生薑を回ふて、藥を煎す。蓋し見るべきなり。今の方丈に踞るもの、特衆人鉢盂中の物を括つて、以つて口腹を恣にするのみに非らず、且つ將に以つて自己に追倍せん」と。

①好事は試験及第なり。  
 ②回は買なり。  
 ③泛凡音同じ、凡人の意。  
 ④退谷義雲禪師は佛照總光に嗣ぐ。  
 ⑤南陽忠國師三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび應諾す、國師云く、將に謂へり吾れ汝に辜負すと、元來却つて汝我れに辜負す。  
 ⑥且つ謂は佛照和尚の言なり、雪堂行は佛眼の法嗣なり。

泛人の情に非らずや。又其の甚しきときは、則ち剋り去つて珍奇を搜買し、廣く人情を作し、大刹に遷らんことを冀ふ。只だ恐らくは、他日鐵面閻老子、與めに計算せんかな」と。因つて併せて之れを録す。

臨安府淨慈の退谷雲禪師、初め鐵庵一大禪會中に在つて侍者となりて、其の開堂に値ふ、「國師三喚侍者」を問ふとき、谷手を以つて其の口を拵ふ。又問ふ、「侍者三應す、又作麼生。」谷拂袖して徑ちに出づ。後に佛照の印可を得たり。且つ謂ふ、「其の機語雪堂の行の如し」と。旨を得て、明の育王に住するに及び、時に佛照東庵に居る、父子相從ふの樂み、昔より未だあらざるなり。退谷は福州閩清の黃氏に生る。

寂照明首座、孤風超絶、生縁は福州の長樂なり、多く宗匠に見ゆ。嘗つて頌あり、曰く、「大事未だ明

かならずんば考妣を表するが如し。既に明かなれば雪上又霜を加ふ。曾つて三峽猿啼の苦を聞いて、鐵作の心肝も也斷腸。」晩に浙より閩に歸り、漏澤園に幹す。頌に曰く、「劍刃に身を翻すもの能く幾くかある。端なく平地に死人多し。從頭より喚起して重ねて煮過す。未だ免れず依然として他を埋没するを」と。其の人となりを見るべし。出世を肯んせず、白雲古寺の閑房の中に終老す。樞相鄭公性之、尙書陳公鞏、私第に居りし時、嘗つて道を問ふ。瑩雲臥謂ふ、「臨邛の復首座嘗つて尊宿に見え來る、演祖待するに父執を以つてす。始終一節、亦以つて懿を緇林に増すに足れり。豈に特り雄席に高踞して、然る後榮とせんや、吾れ寂照に於いても亦云ふ。」

湖翁佛心禪師雙徑の法席、人物林立、嘗つて膝を撫して云く、「爾ち這裡に向つて轉語を下し得ば、一夏を空過せず」と。觀面相呈して、更に回互なしと云ふものあり。天下の人を疑殺すと云ふあり。皆叱せらる。謂ふ「口快を

①漏澤園は墓所の名也。  
 ②雲臥の瑩は大惠法嗣なり、復首座の紀傳は羅湖野錄に出づ、復首座は白雲の友なりしを以て、五祖法演は父執を以て之に事へしなり。  
 ③遼天の索價は、大なる掛け直の意、貼地に相酬は大地程の仕拂はいけぬ。

趁ふべからず」と。佛智老人時に侍傍にあり、緘黙するのみ、老人後爲めに拈香して云く、「千鈞絃に上る。當時遼天の索價、一言に道ひ盡す。貼地に相酬ゆべからず。只だ今驀路に相逢ふ。諱むこと得べからず。避くるに亦由なし。禮拜燒香、錯を以つて錯に就く。何か故ぞ、覆水收め難し。」又云ふ、「大脫空を説き、無轉知を用ひ、當時面前に打向して過ぐ。暮に手を以つて一晝せられて、三十年悔



ゆるも追ふべからず。恨み消すべからず。曲は直すべからず。只だ今白浪堆中、我が遮の一鍬。香を挿んで云く、「怪しむ莫れ粘出するを。」大宗師家、一絲毫を粘出して、四世界を牽動す。更に一絲毫の疎漏の處なし。此の語皆是れ相見の時の話、入道の時の因縁なり。

泉州法石の隠山璨禪師、上堂に云く、「徳山の棒雨點の如く、臨濟の喝雷奔に似たり。隠山當時若し見ば、一時に三門を趁ひ出さん。什麼として此の如くなる。門に當つて荆棘を裁うるを用ひず。後代の兒孫、衣を惹着す。佛涅槃に云く、「我が佛もと降生せず。今日何ぞ曾て入滅せん。若し生に非らず滅に非らずと道ふも、是れ眼中に屑を着く。汝諸人瞥すや瞥せずや。畢竟今朝を喚んで甚んの時節と作さん。一度風來つて一度寒し、一回氷を飲んで一回噎ぶ。請ふ看よ陌上桃花の紅なるを。盡く是れ離人眼中の血。」垂示此に類す。隠山は泉の晋江の人、性褊躁にして貶剝を好む、自ら叢林の一害と謂ふ。下生に瑞世し、涼峰の空退庵に嗣ぐ。此庵は乃ち其の大父なり。

高泉の法系前出。 雙杉會下のあり。原夜坐に、「江月照して松風吹く、永夜の清宵何

高泉の法系前出。 雙杉會下のあり。原夜坐に、「江月照して松風吹く、永夜の清宵何

の所爲」と擧す。荆叟曰く、「觀着せば氷河連底の氷。」雙杉曰く、「牽き來つて好し頂門の槌を與ふるに。」原默然たり。壯歳の時、已に奇退庵の許與を得たり。

丞相蔣公芾、建昌に居る時、莫齋居士と號す。屢々光孝寺に詣り、道を璨隱山に問ふ。狗子無佛

性の話を擧するを聞いて、下語せんと擬し、喝住せらる。偈を呈して曰く、「眼前一座の鐵壁、天を拄へ地を拄へて黒漆、今朝瓦解氷消す、一段の孤明歷々たり」と。又喝出せらる。後に請益して示しを得、清素侍者兜率の悦に語り、能く佛に入るべきも、魔に入る能はざるを以つて、渙然として氷釋す。偈を述べて曰く、「襦衫を翻着し、靴を倒着し、横拈豎放、搥に他に由る。魔に入り佛に入るは尋常の事、一段の風流當家に出づ。」又曰く、「姪坊酒肆經過に飽く。一曲尊前囉哩囉。鼓を打つて看來るも君會せず。大家手を把つて高坡に上る。」隱山深く之を肯ふ。即ち陞堂して、衆に告ぐ、「隱山鼓を搥つて證明を爲す。千古叢林の一盛事、」の句あり。

天目禮 禪師、鄭峯に在りし時、佛照の開室に擧す。「風動幡動者の僧如何ん。」答へて曰く、「物主を見て 眼卓堅す。」照曰く、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、甚れの處に祖師を見ん。」答へて曰く、「腦蓋を掲翻す。」空印叟後へに隨つて入室す、照復た前話を擧す。叟答へて曰く、「白浪を食観して、手中の橈を失却す。」照曰く、「老々大々、者箇の語話を作す、爾看よ、適來の後生子、此の一轉語を下せるを。」天目佛照の會中に在つて依止すること三年、因みに書狀の職を受けず、靈巖を過ぐる時、癡鈍も亦前話を擧す。答ふることに前の如し。鈍曰く、「此の語只だ育王の會中にのみ用ふるを得、我が者裡、飯水も也未だし、爾に到つて喫せしめざることを在り、」と。烏虜、二大老の人を接する此の

囉哩囉は歌と歌との間に挟む 樂聲なり。 天目禮禪師は松源に嗣法す。 眼卓堅又卓案に作る、眼の突き立つなり。



如し、宜しく萬世の師と爲すべきなり。

少室の睦禪師、瑞岩に在り、偶々鳳山の礪老、松源の像を持して贊を請ふ。贊に曰く、「口を開くは舌頭上に在らず。話墮せり。大方量の人脚を擡げ起さざる。未だ分外と爲さず。平生者の些兒を用ひて、却つて鳳山に捉敗せらる。瑞岩與麼の贊揚、也是れ賊を送つて界に入る」と。少室の宗眼端正なること此に類す。人に示すに徒に事に語言の末に従ふに非ざるなり。

本真書記は、福唐の朱氏の子なり。儒を棄て資福山主に依つて祝髮し、嶺を出でて遍く叢席に參す。特立の操行あり、晩に天童の慈航の印記を得、即ち里の松溪に歸り、庵を卓して居す。己に奉ずること甚だ約にして、食僅かに足るのみ。嵩谷幽遠、水木清華、眇然として俗を絶し世を離る、將に身を終へんとするが如し。偈あり曰く「茆庵卜築して溪南に向ふ。踪跡唯だ饒す野鹿の參するを。昨夜滿簷霜月白し。最

①少室の睡は松源に嗣法す。

②本真書記は天童の慈航に嗣ぐ、黃龍派。

③秀岩瑞は光佛照に嗣ぐ、大惠下。

だ憐む松葉の落ちて髪々たるを。」又曰く、「高く櫻拂と節杖とを懸けて、靦面相呈するも早く辭を費す。此の外更に親切の句なし。知らず若箇か尋思を解す。豈に其の志を高尙にするに非ずや。或は議す、其の後學を激發するを得ざるを不幸となすと。予謂ふ、櫻拂節杖を以つて人に示す、止だ此れ足る。又何ぞ必ず別に語言を求めんや。

秀岩瑞禪師曰く、大慧和尚擧す、趙州一日佛殿上に在り、文遠の佛を禮するを見て、拄杖を以つて

打つこと一下す。遠云く、「佛を禮するも也是れ好事。」州云ふ、「好事も無きに如かず。」頷して曰く、

「文遠の脩行着空ならず。時々瞻禮す紫金の容、趙州の拄杖然く短しと雖も、腦後の圓光又一重。」大圓見て曰く、「妙喜の作用、嵩頭死心に滅せず、肯へて來つて商榷す。謂つべし光前絶後な

④當時大圓と稱するもの多し、

此れ蓋し大瀉大圓智禪師ならん、明の昌國の人、黃龍派。

りと。今爲めに末句を改む、必ず來らん、但だ恐らくは相見を得ざるを」と。改めて「華山の千萬重を劃破す。」と云ふ。大慧之れを聞いて、果して詣り見えんと欲す。而して大圓已に遷化す。只だ其の錄に題して云く、

「七佛の命脈、諸祖の眼睛、但だ此の錄を看ば、一切現成」と。二老相敬すること此の如し。今復た其の人を見るなし、氣欲猶ほ人に迫る。烏摩、二大老は故より復た見るなし、秀巖も亦已む。因つて錄して、之れを識す。能く筆語の外に於いて、隻眼を着得する有らば、庶はくは三人龜を證するを免れん。

國譯枯崖和尚漫錄卷の上終



# 國譯枯崖和尚漫錄卷の中

祖賢首座は、撫の金溪の人、人品高妙なり、法を癡鈍に得、久しく閩に留る。南郷に歸らんと欲し、義江に至り、感あつて反る。綾牒を焚いて、歸竟嘉と、茅を編んで、莆の土囊山に隠る。嘉既に福の帥の長生の招きに赴きしかば、即ち黃山の篠塘に遷り、自ら土室を朽る。僅かに膝を容るるのみ、扁して樂此と曰ふ。遠近の者之れを聞いて、始めて供するに粟を以つてす。居ること二十年、一日の如し。郡侯曾公用虎、其風を高しとし、囊山の慈壽、席を虚しうするを以つて、禮請すれども赴かず、嘗つて十不去を讓して、以つて意を見す。末章に云ふ、「十不去。止だ此便ち諸佛の土なり。假饒天子の詔書來るも、向道す事故を生ずるを須ひざれ。」復齋陳公宓、與に持敬の二字を論す。答へて云く、「敬と云つて足れり、何ぞ持を用ふるを爲んと。遷化の後、玉堂林公希逸、祭るに文を以つてす。略に曰く、「六經の外、此の良友を得。余近ごろ方劉の諸公と、石室に遊び、晩に其の故廬に造る。月色清朗、松聲蕭騷たり。慨然として其の高標逸致を想見す、」と。

① 圓悟・化・或庵禮・癡鈍・祖賢首座。

② 綾牒は僧侶の度牒なり。

③ 向道とは「相手に言ふ」の意なり、向つて道ふと讀むも可なり。

④ 希逸の跋文に墓に銘せりと云ふ、蓋し親交あるなり。

鐵鞭詔禪師は直諒にして、窺密せず、福州縣亭の人なり。溫陵の光孝の請に赴く。開堂祝聖拈香し罷んで、乃ち云く、「什麼を喚んで第一義と作す、旁らに甘はざる者有る莫きや、出で來つて道へ、看ん、」と。時に僧あり出で、問ふ。「頂額摩醯の眼卓堅す。」拄杖を拈じて、卓すること一下して云く、「住めよ住めよ。今日の開堂尋常の佛事に比せず。設し問答して彌勒の下生に到るも、鈎鎖連環す。水を盛つて漏さざるも、也ただ是れ粥飯の氣を鼓す。自己に於いて了に没交渉なり。所以に道ふ、問は答處に在らず、答は問處にあらず。問答交馳して青天に霹靂を轟かすが如く、看る者貶眼を容さざるも、那んぞ更に言中に向つて旨を定め、句下に宗を明むるに堪へん。大いに木に縁つて魚を求め、株を守つて兔を待つに似たり。殊に知らず、我が宗に語句なし、亦一法の人に與ふるなし。這裡に徹し去らば、皇恩佛恩一時に報畢せん。其れ或は未だ然らずんば、更に爲めに錦上に花を添へん、」と。復た拄杖を卓して下座す。八會の錄あり、世に行はる。① 聲を審かにして音を知り、音を審かにして樂を知るべし。

① 圓悟・大慧・無用全・鐵鞭詔禪師。

② 窺密は蓋し人の秘密を窺ふなり。

③ 頂額は「ひたひ」なり、摩醯は修羅の一、眼は頂額に卓堅す。

④ 鈎鎖連環は「ひつかかり」「つなぎ」が出来てぐるぐるまはるなり。

⑤ 聲を審かにす云云は、語録によつて鐵鞭の働きを知るの意なり。

覺庵趙贊府、釋書を看て省あり、官を休めて翠微に依り、乞ふて惟覺と名づけ、冠を裂いて薙髮



し、毗尼を具す。後居山の偈に曰く、「氣衰へ力憊れて言ふに堪へず。得意濃かなる時、便ち肩を息へよ。俗を捨て官を捨て、兼ねて欲を捨て、人に由り命に由り、更に天に由る。飢ゑ來れば黄糧の飯を爛煮し、困じて後、衣に和して白日に眠る。山鳥一聲驚いて夢覺む。一知らず今夕は是れ何れの年ぞ。」謂ふべし、幽人貞吉、中自ら亂れざるなりと。

破庵先禪師嘗つて曰く、今時の兄弟は、工夫を做すのみにして、性を索めず、所以に效驗を見ず。我れ行脚の時、密庵衢州の烏巨山に住す、我れ彼の中に在つて知客に充てらる。職を解き了つて、往いて水庵に雙林に見ゆ。兩廊長し、我れ毎夜睡らず、東廊より西廊に到る、話頭を提起して工夫を做す。行くこと兩三匝了つて、堂中に歸つて打一着するに、上下間の兄弟、一に爛冬瓜の似くに相似たり。觀了つて自ら思量す。道く、「我れ若し便を着けずんば、也者の一堂の爛冬瓜に似て、什麼の椀子を討ねんや」と。我れ那の時に在つて、些の工夫を做し得て、室中にも亦口を開くを得。只だ是れ命根未だ斷たず、心下畢竟に穩かならず、遂に起單して平江に至つて、萬壽の僧堂に歇ふ。那の時、是の燈止庵萬壽に住す、是れ無鼻孔の長老なり。粥し罷んで、鼓を打つて入室す。我れ心裡に他れを欺いて去らず、同行あり去つて入室了つて、却り來つて我れに問ふ。「爾去つて入

- ② 是れを退一步の方と云ふ。
- ③ 山中曆日無し、寒盡きて年を知らず。
- ④ 周易履の卦九二の文。
- ⑤ 圓悟・應庵・密庵・破庵祖先禪師。
- ⑥ 腐つた冬瓜の如くころころ落ちて居る。
- ⑦ めしも食はれないの意なり。
- ⑧ 無鼻孔の長老は、見地明白の長老の意。

室するや也未だしや。我れ同行を謾つて云く、「我れ去つて入室了る。」又却つてみづから思量して道ふ。「他れは是れ我が同行なり、我れ他れを謾るは心下穩當ならず、漸く川に歸り去らんことを要す。却た是れ如何ん」と。此の如く思量して、心中躁悶す。遂に行いて、僧堂の後に入り去つて、忽然頭を擧げて、照堂の二字を見て、従前の疑情頓に釋く。迤邐して蔣山に上り、再び密庵に見ゆ。室中契合せざるなし。破庵の參禪、韓信が軍の、孤り水上に在るが如く、必死して二志なし、勝つ所以なり。秀巖瑞禪師、上堂に擧す。馬祖の日月面、後來水庵頌して云ふ、「日月面、胡來れば漢現す。胡漢不來、清光一片」と。拈じて云く、「馬大師を見んことは未可なり。」秀巖也頌あり、「日月面、磚頭瓦片、淨瓶を踢倒し、門扇を憾動す。」老宿一夏、僧と説話せざるの語を擧して、拈じて云く、「者の僧は正に是れ飯糲裡に餓死するの漢。老宿甚の死急を着く。恁麼の見解、喚び來つて痛打すること一頓して、三門を趁ひ出さん。甚として此の如くなる。人の爲めにしては須らく徹するをなすべし。人を殺しては須らく血を見るべし。」烏虜拙庵の爲めに拈出す底は、木庵の處より得來る。語は叢林にあり、話は人口にあり、然りと雖も、秀巖を見んと要せば、猶ほ海を隔つるあり。江西の雲臥瑩庵主曰く、徑山の謙首座、建陽より歸り、茅を仙洲山に結ぶ。其風を聞くもの、悦んで之に歸す。曾侍郎天游、呂舍人居仁、劉

- ① 韓信背水の陣をもつて趙の軍を破る、人を死地に置いて活を求むるなり。
- ② 秀巖瑞は光佛照に嗣ぐ、前出。
- ③ めし櫃の中で餓死するなり。
- ④ 拙庵は秀巖の師、佛照なり。
- ⑤ 雲臥瑩は大恵に嗣ぐ、雲臥紀談、羅湖野錄の著あり。



實學彦脩、朱提刑元晦の如き、書牘を以つて道を問ひ、時に山中に至る。元晦に答ふる書有り、其略に曰く、「十二時の中、事ある時は事に隨ひ、變に應じ、無事の時は、便ち頭を回して、這の一念子上に向つて、『狗子に還つて佛性ありや也無きや、趙州云く、無。』と云ふを提擲し、這の話を將つて、只管提擲して、思量すべからず。穿鑿すべからず。知見を生ずべからず。強ひて承當すべからず。眼を合して黃河を越るが如く、越り得過ると越り過ぎざるとを問ふことなかれ。十二分の氣力を盡して、打一越せよ。若し眞箇に越り得ば、這の一越便ち百了千當せん。若し越つて未だ過ぎずんば、但だ越ることを管して、得失を論ずるなかれ。危亡を顧みるなかれ。勇猛向前して更に擬議するを休めよ。若し遲疑動念せば、便ち『沒交渉なり』と。謙嘗つて劉實學の請に従ひて、建の開善に住す、向に雲臥と同じく、大慧に侍すること最も久し。劉朔齋云く、「文公朱夫子、初め道を延平に問ふ、篋中に携ふる處、惟だ孟子一冊、大慧の語録一部のみ、」と。

臨安府淨慈の北磻簡禪師、茶陵の郁を贊して云く、「歩を竿頭に進め

て斷橋に頼ず、太虚凸き處水天回む。古今喫癩人多少ぞ。閑梨の這の一交に似す。」靈照女を贊して云く、「屋裡に機を横へて老爺に抗す。門前に手を斂めて丹霞を揖す。娘生の爺は好兒女を養ふ。也許多の無賴查あり。」叢林多く之を誦す。淳祐丙午三月晦日、偈を書して云く、「平生伎倆なし。赤脚須彌を走る。一步は一步より闊く、三更鐵圍を過ぐ、」と。且つ曰く、「翌日行くべし」と。期に至つて跣坐して滅す。中書舍人程公許、奠るに文を以てす。略に曰く、「南山の頂に踞して、綸を垂る、こと千尺、湖水渺瀰たり。魚寒うして食はず。病を示して期に及び、體癩せて神逸なり。維れ莫の春、參徒雲の如く集る。師顧みて笑ふ。吾れ歸るに日ありと。四句の偈を題す。茲れを絶筆となす。孟夏の朔に及び、泊然として入寂す。師昔し證する處、もと自ら秘密。末後の一着、乃ち眞實を見る、」と。是れ實錄なり。噫、老磻神情秀特にして、博學強記なり、而して喜んで文を爲り、法を東庵の佛照に得たり。昔甘露滅瑩仲溫、皆見地明白なり、其れ文字を以つて之を多とすべけんや。老磻委順の時、尤も殊特なること此の如し。

- ①曾開、字は天游、官は禮部侍郎に至る、呂本中字は居仁、江西傅衣詩派圖を作り、黃山谷を推して詩祖となす。
- ②朱熹字は元晦、宋一代の名儒なり。
- ③暗の夜の提燈の如く大切に持つを提擲と云ふ、提も擲もひつさぐるなり。
- ④百了千當は何も彼も一時に埒明くなり。
- ⑤沒交渉は埒あかぬなり。
- ⑥劉實學彦脩は、大惠禪師に參じて柏樹子の話を明得す。
- ⑦朔齋は疑らくは劉謚ならん、三教平心論を著す。
- ⑧北磻居簡禪師は光佛照に嗣ぐ、大惠下。
- ⑨茶陵郁山主、曾て蹇驢に騎つて溪橋を過ぐ、喫癩して水に落ち即ち大悟す。交は頼と同じ、ひつくりかへるなり。
- ⑩靈照女は麗居士の女なり、老

- 爺は麗居士なり、丹霞子諱禪師麗居士を訪ふ、途に靈照に逢ふて居士在りや否やを問ふ。靈照茶籃を放下して手を斂めて立つ、霞又問ふ、居士在りや否や、靈照籃を掲げて便ち去る。
- ⑪娘生とは母から生んで貰ふた儘を謂ふ、所謂赤子の心を失はざると同意なり。
- ⑫無賴查は俗語解に小兒の詐り多きを無賴と云ふ、查は煎薬の滓也とあり。
- ⑬淳祐丙午は本朝寛元四年にして東福の創立より四年目なり。
- ⑭甘露滅は洪覺範、瑩仲溫は雲臥庵主、二人當時其見地の明白を稱す、後來虛堂出づるに及び覺範の面皮を劈破す。
- ⑮眞德秀は西山先生と稱す。
- ⑯甲子乙丑は嘉泰四五年頃なり。



參預眞文忠公 德秀、雙徑の崧少林と里閉を同じうす。相與に講道、翰帖の往來、歳として無きはなし。一帖に云く、「甲子乙丑年間、延平にあり。嘗つて夢に一處に至る。十六羅漢あり、其中の相好端嚴なるもの、忽ち目を開き、相視て微笑して曰く、大堅固力を得たりと。俄かにして天樂空に浮んで至る、音節の妙、絶だ世間に異なり。遂に寤む。今將んど三十載なり。佩服して忘れず。近ごろ夢筆に於いて、閑山一片を得。小庵を其の上に築き、大堅固力を以つて、銘と爲さんと欲す。吾が師の一偈を得て、蒙滞を開發せんと擬す。等覺も亦舊遊なり。其れ能く忘情せんや」と。余此帖を徑山の三塔庵に見る。烏摩、西山謂つべし三十年一夢にして覺むと。大堅固力を銘せんと欲す、寤語して作廢かせん、何ぞ必ずしも、佛行重ねて説偈すと言はん。

- ① 等覺は寺の名、佛行曾て業を此の寺に受く、故に舊遊と云ふなり、寺は夢筆峰にあり。
- ② 柏巖疑は息庵觀に嗣ぐ、觀は蓬庵裕に嗣ぐ、裕は圓悟に嗣ぐ。
- ③ 簡は脱略なり、元は不群なり。
- ④ 啣喙の反は秀なり、不啣喙は愚なるまれなり。
- ⑤ 此處疑ふらくは原本に脱字あらん。

慶元府小靈隱の 柏巖疑禪師は、性簡亢にして交接する所なし、乃ち息庵の法嗣なり。金文に住するの日、提綱に云く、「盡大地是れ箇の住處、強ひて安排するを用ひず。盡大地是れ箇の當人、何ぞ影迹を求むるを須ひん。東邊に住しては、喚んで東邊の長老となし、西邊に住すれば、喚んで西邊の長老となす。翻して來り覆し去り、横倒堅直、一月の間、許多の不啣喙を做し出す。然りと雖も、爾凝上座を見んと要せば、又却つて 那邊にあつて、更に那邊ぞ。爾見んと要せずんば、又却つて爾諸

人の眉毛眼睫上にあり。是くの如くにして住し、是くの如くにして説く。一箇の舌頭を分つて兩椀となす。且く道へ、那箇の舌頭ぞ。左右を顧みて云く、「了」と。大抵步驟の熟すること、雲を籜むの汗血の如く、蹇態なきなり。

秀巖瑞禪師、無用松源と闕に入り、乾元の木庵に見ゆ。庵問ふ、「近離甚の處ぞ。」曰く、「鼓山。」曰く、「恰も鼓山の信を得んと欲す、將ち得來るや。」巖、兩手を展く。庵曰く、「參堂し去れ。」其れをして庫務を執らしむ。亦勞を憚らず、庵陰かに之れを奇とす。衣を洗ふの次、庵曰く、「什麼を作す。」巖衣を提起す。庵曰く、「答話も也會せず。」巖擬議す、庵便ち掌し、忽ち省發す。後明の育王に住し、佛照の嗣となる。庵之れを聞き、寄するに偈を以つてして曰く、「媽々年來齒髮疎なり。心々只た是れ奴々を念ふ。一從あれ 潘郎に嫁與して後、記得す從前梳洗無きを」と。余昔し石門會和尚の法席に九峰に預つて、其の言を聞くこと此の如し。

- ① 汗血は駿馬なり、蹇態は疲蹇の體なり。
- ② 瑞は拙庵に嗣ぐ、前出。
- ③ 媽媽は母なり、奴奴は女子なり。
- ④ 潘安仁は美男子なり、晋時代の人。
- ⑤ 世系上巻に出づ、密庵に嗣ぐ。

鐵鞭詔禪師、剛正孤硬、大法を以つて重任となす。吳門の承天に住す、廣く僧堂を架して、以つて衲子を延く。室中狗子佛性の話を擧して之を驗す、契ふことあるもの少し。元雙杉時に會中にあり、偈を投じて曰く、「狗子無佛性、一正一切正、寰中は天子の勅、塞外は將軍の令。」鐵鞭之を頷ふ。



笑庵悟禪師は周氏、蘇の常熟に居る。久しく才無等に侍し、復た松源と同じく密庵を扣く。密庵曰く、「爾が平生の見處試みに我れに語げ來れ、隨つて所見を通ず。」曰く、「未仕。」參堂し去れ。笑庵後に僧堂中に於いて、燈を剔るを見て省悟す。室中、横機讓る處なし。徳山門に入れば便ち棒すを頌する時、世事に疎なり、笑庵は微細皆責に任ず。源の靈隱に住するに及び、庵は里の靈巖にあり、舟を具して杭に抵つて之を訪ふ。門に到り、三日にして方に相見を得、慚色なし。後に源法華の招に赴く。又靈隱を以つて、力め擧げて、自ら代らしむ。前輩の見る處、流俗に異なり、今人の一語或は訛すれば、終身恨と爲すものと大いに逕庭あるなり。併せて此を書して、後來の龜鑑となす。

- ① 笑庵は密庵に嗣ぐ、應庵下。
- ② 二句三級浪高うして魚龍と化す、癡人猶酌む野塘水より轉化す。
- ③ 松源が自分の代りに笑庵を擧げしなり。
- ④ 全無用に嗣ぐ、前出、大惠下。
- ⑤ 開遮持犯は律儀なり、南山宣律師の戒法を唱ふる也。

笑翁堪禪師、門風壁立にして、氣諸方を蓋ふ。初め台の報恩に住す、台舊律宗なし。師、郡守齊公碩と議して、十寺を合せて一となし、壇を築きて、南山開遮持犯の法を唱へ、後學を風厲す。平江の虎丘に遷るに及び、閩の帥王公居安、復た雪峰を以つて之を招ぐ。且つ書を廟堂に貽つて謂ふ。「南方の佛法競はず、須らく頼ひに作興すべし」と。旨を得て乃ち行く。未だ幾くならず、詔して杭の靈隱

に住す。忽ち僧あり、釋迦出山の像を持して贊を請ふ、即ち書して云く、「半夜逾城、全く背重なし。端坐六年、久靜動を思ふ。衲は寒雲に卷いて雪山を下る。人と相見するとき又何の顔ぞ。」

松源岳禪師虎丘より靈隱に遷る、老いて、職す、叢林呼で老叢翁となす。

傳ふる所の白雲端和尚の法衣を以て、亟に人に付せんと欲す。三轉語を垂れて云く、「口を開くは舌頭上に在らず。」大力量の人什麼として脚を擡げ起さざる。「大力量の人什麼として脚根下、紅線不斷なる。」而も契ふ者なし。衣を塔下に留めて曰く、「三十年後我家の子孫あつて、來つて此山に住せん、此を以て之に付せよ」と、遂に寂を告ぐ。石溪後亦虎丘より旨を奉じて

- ① 松源密庵に嗣ぐ、上卷前出。
- ② 職は聲に近く耳甚だ遠きなり。
- ③ 天上の仙人、男女の足に紅線を結びつけて夫婦となす、因縁熟すれば如何んともし難きなり。
- ④ 石溪は佛海心月禪師なり。
- ⑤ 絶照鑒禪師は、訥庵仁に嗣ぐ、仁は鈍庵頴に嗣ぐ、頴は此庵淨に嗣ぐ、淨は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。
- ⑥ 老鼠は天を指し地を指す像を指す、誕生佛なり。
- ⑦ 波瀾の奔るが如く浮雲の集まるが如し。

徑に至る。衣を拈じて云く、「大庾嶺頭、黄梅夜半、之を争ふて足らず。之を讓つて餘あり。而今公案現成、免れず錯を將て錯に就く。衣を捧げ起して云ふ。敢て問ふ此衣、白雲傳へ來つて松源留下す。什麼邊の事を明む。春風に腦亂して卒に未だ休せず」と。今佛海雙徑の傳衣庵に留む、其復待つ所あるか。

絶照鑒禪師、初め里の乾元に住す。佛生日の上堂に云く、「老鼠三寸の光なしと雖も、天に徧く地に徧く灾殃を起す。命根落ちて乾元が手に在り、當頭一杓の湯を消得す」と。是れに由つて名叢林に播く。後に鼓山に遷る。學者、瀾趨雲萃す。脱年玉几に論薦す。惜し



いかな命將に下らんとして寂す。絶照は福州の人なり。訥庵に嗣ぐ。

肯庵圓悟禪師は、建寧の人、天恣閑暇なり。武夷山に居ること十年に餘る、因に牛歌を聽いて悟道す。嘗つて偈あり云ふ、「山中住して識らず、張三<sup>①</sup>と李四<sup>②</sup>と。只だ松栗を收めて齋糧に當つ。靜かに聽く嶺猿の古樹に啼くを」と。福唐の大目禪苑に瑞世す。嘗つて儒學を晦庵朱文公より授けらる、師と辛公棄疾と同門の友たり、因つて黄檗を以つて之れを延く。入寺に其の行李數十檐ありと讒するものあり、辛公之を聞いて蹙然として樂まず、後に都運黃公瓊を過ぎ、同じく之を訪ふ。且つ曰く、「有道の士、三衣の外長物なし、多々益々辨するは道人の累、爲らすや」と。庵笑つて答へず、徐ろに共に諸老の手帖を觀る、因つて盡く籠篋を掲げて之れに示す。皆古徳の墨蹟、紫陽の書翰なり、辛慚色ありきと。

①張三李四は、三右衛門四郎兵衛なり、又朝三暮四を持ち掛けてもある。  
②紫陽は朱文公なり。  
③鍊丹の術の成就を待たずして羽化登仙するなり、輕舉は登仙なり。

寒齋高士林公公遇字は養正、官を棄て、經世の意なし、惟だ山林に大法を負ふ者と此の道を講明す。竹溪の林公希逸に寄するに云ふ、「此の事何ぞ人に向つて説くことを須ひん、耳あつて聾の如きは眞の秘訣。此事何ぞ人に向つて語ることを須ひん、口あり瘖の如きは眞の活句。盲聾瘖啞是れ仙方、箇の中別に長生の路あり。長生の路、また朝なくまた暮なし、また今なくまた古なし、また萬象と森羅となし、また山河と國土となし。長生の路何の許にかある。丹成を待た

ずして自ら輕擧す。只だ目前にあつて尋處なし。尋ねんと要せば、只だ尋ぬる無きところに在り」と。寒齋が著述する所の心鑑録、吾教に補あり。後村劉公其の墓に銘して云く、「猗公の立つ所、天壤と俱にし、畫前に起り、性初に復す。以つて釋とせんか、則ち實を踐む、以つて老とせんか、虚に放ならず。千古の秘寶を探つて獨得し、一世の苦淡を叢めて以つて自ら娛む。余の述ぶる處は迹の區々たるのみ。君の心の如きは擬摹すべからず。有之を求めんと欲せば、君の書に於てせよ」と。此れ名言なり。問ふこと勿れ元いに吉し。

①畫前とは八卦を畫せざる以前を云ふ。  
②東山は浙翁に嗣ぐ、浙翁は佛照に嗣ぐ、佛照は大恵に嗣ぐ、大恵は圓悟に嗣ぐ。  
③當陽は「まつかう」の如し、まつ向に一喝を怒雷山を劈くの意。

東山源禪師、初め痴鈍の室中にあり、如何んか是れ大道の源と擧するを聞いて、一喝を下し、偈を述べて曰く、「大道の源問端を立つ。老魔徹底みづから欺瞞す。誰か知らん家醜遮蔽し難きを。一喝當陽に雷山を破る。」久しく老佛心に徑山に従ひ、閩域を證徹す。閩に歸り、投するに偈を以つてして曰く、「腦蓋を掲翻す笑談の間、槃に珠を走し珠槃に走る。一段の風光攔不住。堂々手を擺つて長安を出づ。」時に凌霄會中、人物林の如し。清鐵脚、阡都寺、威く在り、皆韻を趣ふて之れに饒す。後出世して佛心に嗣ぐ。東山は參與徐公清叟と方外の友たり、公閩に帥たるの日、雪峰を以つて招致す。蘇の虎丘を離れて、建上に至り、光孝に順寂す。悲しいかな。



雙杉元禪師、戒行嚴潔、秀の天寧に住す、小參に、應庵室中に密庵に問ふ。「如何なるか是れ正法眼。」庵云く、「破沙盆と云ふを擧して、拈じて云く、「者些の說話、三叉路口多年一條の爛木頭の如く、風吹き日炙り、誰れか敢へて觀着せん。忽ち箇の健兒に駄し將ち去らる。上面に元來官印あり。且道へ、印文什麼の處に在る。五陵の公子少年の時、得意の春風馬蹄を躍らす。惜ます黄金を彈子と爲すを。海棠花下に黃鸝を打す。」と。薰石田特に之れを稱す。雙杉は福州の福清の鄭氏に生まる。先に溫蘿庵あり、後に密庵あり、繼いで遂僻雙杉あり、遂僻は即ち其の俗門の叔父にして、法門落髮の師、清如源なるもの、見趣操行尤も卓然たり。鄭氏出す處の尊宿、盛なりと謂つべきかな。

枯禪鏡禪師は清苦古朴にして、太師史衛王尤も之れを致敬す。初めて接見し、即ち問うて曰く、「疎山曹家の女の始末如何ん。」枯禪厲聲して曰く、「相公與麼の間、一隻眼を失却す。然らば則ち祖師の垂示得て箋注すべきか。」左右愕然たり、王笑ふのみ。遂に席を進めて徵詰論辯し、夜分に至つて方に散す。惜むらくは、當時人の與に記録する無きのみ。枯禪掛搭を求むる者を見る毎に、則ち先づ白領を撤去し、潤袖を剪除せしめて、方に相看を許す。

- ① 雙杉は萬庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ、密庵の師は應庵、應庵の師は虎丘、虎丘の師は圓悟なり。
- ② 破沙盆は破れたる摺鉢なり。
- ③ 枯禪鏡は密庵に嗣ぐ、庵は應庵華に嗣ぐ、華は虎丘隆に嗣ぐ、隆は圓悟に嗣ぐ。
- ④ 疎山嘗て木蛇を僧あり、問ふ手中是れ何んぞ、疎山提起して曰く曹家の女。
- ⑤ 白領は汚れ易く、潤袖は切れを川ふこと多し、故に之を許さざるなり。

① 龍峯定禪師は、福の長溪の人なり、嘗つて毗陵の時思庵を過ぎて、無際に依る。開堂に値ふ、擧す、「釋迦彌勒は他の奴、他は是れ阿誰ぞ。」定曰く、「不會。」又之れを擧せしとき、又曰く、「不會。」無際拈住して曰く、「一不會二不會。」定失聲答へて曰く、「泥團土塊。」後に永嘉龍翔の文絶象の會中に於いて分座す。無際明の太白にあり、書を貽つて歸を趣す。昔し佛智老師も亦無際に侍す、故に嘗つて之れを言ふ。

安吉州道場別浦舟禪師、老佛心に師事し、後に空叟の嗣となる。佛成道のの上堂に云く、「釋迦老子二千年、摩竭陁國にみづから云ふ。明星見る時豁然として悟道すと。胡人は詐り多し。知んぬ、他は是れ實か是れ虚か。後來眞淨道ふ。」今克文比丘あつて、東震旦の中に於いて、赫日見る時また箇の什麼をか悟る」と。關西の人は頭腦なし、争でか知らん是れ有か是れ無か。川僧口を開いて膽を見る。一句は是れ一句。床を拍つて云く、是れ那の一句ぞ。曾つて巴峽猿啼の苦を経て、三聲を待たざるも也斷腸。又云ふ、百丈三日耳聾、馬祖有過無功。臨濟三たび痛棒に遭ふ。黃檗始めあつて終りなし。虎丘は棒を行せず、喝を行せず。蛇と成る底は蛇となり、龍と成る底は龍となる。床を拍つて曰く、道ふことを見ずや、鶯は楊柳の岸に遷り、蝶は海棠の風に舞ふ。見處穩密、拈出して人に示す。春の花を行

- ② 龍峯は無際に嗣ぐ、無際は拙庵に嗣ぐ、庵の師は大惠、惠の師は圓悟なり。
- ③ 佛智は開遠谿にして枯崖の師なり、故に老師と云ふ。
- ④ 克文は眞淨の諱なり。
- ⑤ 川僧は四川の僧、別浦自ら云ふ。
- ⑥ 細技に入るの春の如しの語ありて、花と花には皆春が入つてゐる。



るが如く、月の水に在るが如く、了に朕迹なし。空叟の門、嶄然として絶出するものなり。老藏云ふ、  
「別浦嘉定の間、癡絶と並び駢つて先を争ふ、惟だ壽癡絶に及ばず。烏摩、惜しいかな。」

① 雙杉元禪師は、乃ち柔萬庵の嗣なり。國史陳公 貴謙、弟の參預文定  
公貴誼と、武康の龍山に於いて、雙杉庵を創め、こゝに館す。國史公宗鏡  
を編するに答ふる書に云ふ、「正に 台屏に詣つて恭しく問訊を致さんと欲  
す。藻翰寵臨す。伏して審かにす。深く宗鏡三昧に入つて、辯才機用、

① 元雙杉は柔萬庵に嗣ぐ、庵は  
密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣  
ぐ、應庵は虎丘に嗣ぐ、丘は  
圓悟に嗣ぐ。

無畏をほしいまゝにす。就いて録する處の 數板を掲ぐれば、聯珠貫壁、  
眞に 乳を擇ぶ鵝王の眼腦なり。深く用つて降歎す。但だ恐る日新の證、  
將に舊習を棄てんとす。此に於いて去取或は一定せず。多聞強識を啓發し、  
聖賢の地位を知らしめんと欲するが如し。 知力を以つて挾むべきを容さ

② 陳貴謙、官は樞密に至る。  
③ 台屏は御屋敷と云ふ如し。  
④ 數板は數枚なり、聯珠貫壁は  
眞珠寶玉を并ぶる如くなり。  
⑤ 乳を擇ぶとは、鵝と云ふ鳥は  
水中に乳を投すれば美事に乳  
だけをすひ取るなり、鵝王乳  
を喫するの語禪錄に多し。

す。此れを用つて 致道の具と爲して求めば、入るとして自得の妙に非ざ  
るなし。時を康んじ物を濟ひ、浩然として窮りなし。是れ思ふに佛を用つ  
て眞儒の効と爲すなり。世に見聞に局する者、門戸を主張するものあり。  
心に是として口に之を非とし、其の詳を得ず。意ふに愚人に在つて、其の  
自ら欺くを知らず。眞に所謂憐憫すべきもの、 此れを觀ば亦解意すべきなり。室中の三轉語は、禪

⑥ 此事は決して多聞博識の知を  
以つて到るべきにあらず。  
⑦ 但し大道に至るの道具として  
善用するは可なり。  
⑧ 此書物を見れば善くわかる。

和子平生の工夫を窮む。應舉三場の文字の如くに相似たり。日夜を通じて之を爲すも、猶ほ未だ暇あ  
らざるを恐る。豈に是れ難を越ふて易を捨て、彼れを棄て、此れを取るを好まんや。蓋し工を専らにし  
て體窮せずんば、未だ大休歇の田地に到らず。徒らに知見解會を成して、  
自己の眼を障へ、 倒行逆施す。前輩言へるあり。若し眞箇に此事を打透  
せんと要せば、切に 此録を見て、意識を將ち來つて、先行すべからず。  
未だ舉せざるに便ち會せば、更に疑ふべきなし。佛の方便を失せば、則ち  
入頭の處なし。之れを利すと曰ふと雖も、其の實は害を爲す。陳操尙書は  
是れ今の參禪の様子なり。雲門の教意に對し、尙ほ自ら口言はんと欲して  
詞喪し、心縁せんと欲して慮忘すと拈出して、雲門に一期に 家財を籍没  
し了らるゝ是れなり。今居士法施の大檀越たるを要せば、須らく 金圈栗

棘鐵酸餡子なこべし。事を用ひて、人を引いて草窠に入り、反つて其の粘  
縛を増す勿れ。如何ん。筆に因つて 切怛す。稍 暇あらば當に請ふ 柱  
杖以つて多口の罪を謝せん。國史公、此に因つて開悟す。

西山亮禪師、趙州婆子を勸するを頌して云く、「飢うる時は定めて飢を聞  
き、飽く時は定めて飽を聞く。婆子は臺山に在り趙州勘破し了んぬ。遯庵

郎當と鳴つた。



之を可とす。金陵の清真に出世す、提唱語言、發すること機括の如し。天童の癡絶に寄せて云ふ、<sup>①</sup>「潦倒たる西山百不能、隨身幸に一杖藤あり。東に撐へ西に拄へ閑日を消す。甘んじて荒山小院の僧となる。」四明の小靈隱に住して終ふ。西山は蜀の人、性方雅にして俗流と交るを喜ばず、無準其の語に叙して、稱して <sup>②</sup>「本色の宗師と爲す者なり。」

無準佛鑑圓照範禪師、少うして穎悟、機辯を以つて自ら將ふ。蒙庵に雙徑に謁す。庵問ふ、「何の處の人事ぞ。」曰く、「劍州の人。」問ふ、「還つて劍を將ち得來るや。」佛鑑一喝を下す。庵曰く、「鳥頭子也人を括噪す。」佛鑑髮黒し、時に呼んで鳥頭となす。後破庵に隨侍す。因に謙道者方丈に入つて請益す。 <sup>③</sup>「躡蹤して往く、破庵謙の至るを見て便ち問ふ、<sup>④</sup>「近日胡孫子如何ん。」謙曰く、「胡孫捉不住。」破庵曰く、「捉を用ひて作麼。」佛鑑之れを聞いて曾次豁然たり。

井山密禪師、<sup>⑤</sup>至節の小參に云く、「正令全提して十方一團の鐵、冥樞坐斷して大地行蹤を絶す。是れ禪ならず是れ道ならず。摩羯提國三七日の中、鐵壁鐵壁、少林山下九年の冷坐。」<sup>⑥</sup>浣盆浣盆、自餘の臨濟德山摠べて是れ衆旨の象を摸するなり。

① 本色は「まじめ」と云ふ如し、彩色を施さざるなり。  
② 無準師範禪師は破庵先に嗣ぐ、先は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵、應庵は虎丘、虎丘は圓悟に嗣ぐ。  
③ 鳥頭は鳩に似て非常の毒藥なり、引きかけてあるなり。  
④ 括噪は「がみく／＼わす」と云ふ如し。  
⑤ 躡蹤は跡からついて往くこと也。  
⑥ 此頃手飼ひの猿はどうした、猿はつかまりませぬ。  
⑦ 井山密禪師は枯禪に嗣ぐ、枯禪は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ、庵の師は虎丘、虎丘の師は圓悟克勤なり。  
⑧ 是れは冬至の小參なり。  
⑨ 浣盆又換盆に作る、蓋し笑樂の意ならん。

一向に與麼ならば、荒草天に連る。拂子俯して時宜に狗ひ、曲げて方便を開く。拂子を以つて劃して云く、一劃は陽となる。又劃して云く、一劃は陰と爲る。陰陽交々感じて歲功乃ち成る。忽ち乾坤窄きを若んせん。乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。且く道へ、是れ陽か是れ陰か。拂子を擲下して云く、石筍の枝を抽くを待つて、即ち汝に向つて道はん。井山は、乃ち枯禪の俗門の姪にして、法門の嗣子なり。幻より長に至るまで、之を羽し之を翼し、鷹兒の巢を出づるが如く、便ち冲天の志あり、明師の賢資を出すこと信なり矣。恨むらくは、其施設を盡す能はずして早世せるを。

建康府保寧の <sup>①</sup>即庵覺禪師、嘗つて無準と同じく破庵に參す。後無準の山居に因つて、寄するに偈を以つて云く、「松風を吸ひ山色に飽く。浩浩養妨げず清骨に徹するを。夢覺めて千巖香靄分かれ。興來つて一笑乾坤窄し。霧霞凝雪翠滴々たり。泉斷崖に瀉いて聲瀝々たり。故人斯の樂み我れ何ぞ知らん。退かに白雲に跂つて幽石を抱く。」高源の梨洲の住するを送つて云ふ、「小玉聲中些を認得す。今に至るまで兩眼尙は眯麻す。阿師雪がすんば郷人の恥なり。鼎に鼎に誰れをして正邪を辨せしめん。」蜀の諸老・高源・即庵・石田・無準の如き、道價皆一時の重きを爲す。猗歟、盛なるかな。  
慶元府雪竇の <sup>②</sup>無相範禪師、松源に參じ、法を焦山に開く、龍象駢集す。新雪竇の爲めに、無準上堂、「楊岐和尚出世、陸座罷んで、九峯勤和尚其の手を握つて曰く、且喜すらくは箇の同參を得たり。」

① 即庵は破庵に嗣ぐ、破庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。  
② 無相範は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ。



岐云く、如何なるか是れ同參の事。峰云く、楊岐犁を牽けば九峯耙を拽く。岐云く、正恁麼の時、楊岐前に在るか九峯前にあるか。峰擬議す。岐云く、將に謂へり、同參と。元來不是。」と云ふを擧して、頌して云く、「楊岐左眼半斤、九峯右眼八兩、一對無孔の鐵鎚、今に至るまで收拾し上せず。」叢林咸く、大範を以つて之を呼ぶ。蓋し無準と行道同一時なり。雪竇の請に赴き、遂に遷寂す。是れより先き、紹定辛卯の歲旦、上堂に云く、「春來萬彙悉く皆新なり。一段の風光畫けども成らず。無事妙高行一轉、知らず誰れか是れ境中の人。」明日齋より退き、巡察して妙高峯に登り、且つ云く、「吾が意を會すや否や」と。又明日堂に赴き、粥を喫し罷んで、湯を索めて沐浴し、端坐して寂す。衆議して峰頂に窣堵波を建つ。佛鑑の記する所に見ゆ。

①張良蜀の棧道を焼いて陳倉より出でて三秦を襲ふ、表通りを行かないで裡道通る。

平江府雙塔の無明性禪師は、性端潔にして諄諄を疾む。「開口不在舌頭上」を頌して云く、「明に棧道を修して、暗に陳倉を度る。舟を刻んで猶ほ劍を覓む。夜雨瀟湘を過ぐ。」「大力量人擡脚不起」に云く、「只だ老胡の知を許して、老胡の會を許さず。白雲盡くる處是れ青山。行人は更に青山の外にあり。」「大力量人脚下紅線不斷」に云ふ、「兩を放ち三を抛ち、神を瞞し鬼を諱す。換盆換盆、誰れか彌を識らざらん。」趙州二庵主を見るを頌して云く、「南枝は暖に向ひ北枝は寒、一種の春風に兩般あり。語を寄す高樓に笛を吹くこと莫れ。大家留取欄に倚つて看る。」松源之れを首肯す。無明一生眠食清衆を離れず、老いて益々精進なり。惟だ此の一節、亦書すべし。

況んや、衲子其の決擇に資するをや。

柏岩山禪師は、福の玉融林氏の子なり、至る處輒ち席を前む。水波を畫くの壁に題して云く、「波浪鼓する時點滴なし。風濤息む處即ち瀾漫、明聰紙罽に尋覓を休めよ。壁上の行船方に好看。」同輩皆稱す。里に歸つて洋嶼の雲門に住し、息庵に嗣ぐ。節を砥き行を礪く、衆の畏服する所なり。

中巖寂禪師、天性孤高、衆に示して云く、「過去の諸如來は溝に填ち壑を塞ぐ。現在の諸菩薩は、棍に頭無く禪に口無し。未來の修學人は推せども向前せず、拽けども向後せず。若し也會得せば、同坑に異士なし。若し也會せずんば、君は西秦に向ひ、我れは東魯に之く。」又云く、「行も亦禪、坐も亦禪。終日頭を擧げて天を見ず。爾に出づるものは你に反る。認着すれば依然として還つて不是。拈起すれば則ち大虚に充塞す。放下すれば則ち織塵立せず。拈起せず放下せずんば、鎮州の蘿蔔頭、趙州の遠天の價を索盡す。」又云く、「今朝七月旦、夏制將に滿つるに垂んとす。更に曲糸床に上つて舊公案を擧則す。擧し得て全きも、鼻孔半邊なし。擧し全からずんば、舌頭に梵天を挂ふ。」啞、胡亂し了れり。我れに這の則公案を還し

②柏岩山は息庵に嗣ぐ、庵は水庵一に嗣ぐ、一は佛智裕に嗣ぐ、俗は圓悟に嗣ぐ。  
③窓の紙の破れ目から見る必要は無い。  
④棍は男のふんどし、今の猿股の如くにて端なし、禪は女のゆまき、行燈袴の如くにて口なし、此解古來難めり、要するに渾拈たる處を得ば其意すむなり。  
⑤天迄届く様な高い直段を需む。  
⑥啞は發聲なり。よい加減の、と云ふてしまった。



來れ。卓拄杖して云く、切に思む。昭啄するを。此の數語、含沙の射影に巧なるが如し。吾れ恐らくは之に見ふて、其毒に中らざるもの幾んど希なり。

① 天目禮禪師、同參を訪ふて、値はざるの偈に云く、「庭前一樹の紫荊花、老子何ぞ嘗つて家に在らざらん。若し弟兄相見し了ると謂はゞ、先師の門戸天涯を隔つ。」叢林の爲めに誦せらる。野狐の話を頌して云く、「墮落知りぬ何の處ぞ、君に憑つて子細に看る。潮來つて別浦無く、木落ちて他山を見る。」癡鈍の爲めに喜ばる。曾つて北澗と同じく、佛照會中にあり、相與に提衡す。故に簡川禮寮の呼あり。余景定の間、保寧に寓し、始めて全録を見る、天目老臘の許可に預る。豈苟然の者ならんや。

② 短篷遠禪師、平生臥具を設けず、晝夜枯坐す、遠鐵概の稱を得たり。餘杭の永壽に開法し、明極の嗣となる。中秋同輩に寄するに云く、「一點の孤明大虚に徹す。體に盈缺なく方隅に任す。光萬象を含んで、珠蚌を懷き、影は千江に落ちて井鹽を觀ふ。」馬祖翫ぶ時向背に迷ひ、長沙用ふる處名摸を絶す。衲僧直下に標旨を忘し、吐七吞三總に自如。筆墨の遊戲を

① 昭啄はくちばしでつつくならり。  
② 含沙は「おさき狐」で、人の影を見て毒を噴き掛ける。

③ 松源に嗣ぐ、前出。

④ 紫荊花が見ゆれば此偈全部分明なり、紫荊は紫色の花のさく「すをな」なり。

⑤ 抵敵抗衡の意ならん、簡は才あつて川の如く、禮の蘊蓄は藪の如し。

⑥ 短篷遠は明極に嗣ぐ、極は目得に嗣ぐ、得は宏智に嗣ぐ、智は丹霞に嗣ぐ、曹洞家。

⑦ 概は「くひ」なり、鐵の概を打込んだ様々と云ふ處から此名を得しなり。

⑧ 珠が蚌を懷き、井戸が驢馬を窺ふ。

⑨ 馬祖曾て百丈等と月を遊ぶ。皓月と云ふ供奉官が長沙に業障の事を尋ねし也、名摸又名乳に作る、名摸を絶すはさぐ

害せず、後吳門の承天に住す。一日上堂に云ふ、「承天の一句、言前に分付す。達磨不會、隻履歸去。」宿を越えて病無うして坐逝す。時に光東谷も亦道行なり、一力洞上の宗を起す、人無しと謂ふこと無かれ。

⑩ 石田薰禪師は、眉山の彭氏なり、嘉定の間高峯に出世す、屋老い僧殘す。是れより先き、高原、無準、即庵、中岩、石溪の諸老之を徐して、然る後請に従ふ。開爐上堂に云く、「高峯の門戸灰の如くに冷かなり。多謝す諸公の。歳寒あるを。些子なり死柴頭上の火、大家力を着けて試みに吹き看ん。」石田吳門の高峯に住する、寥寞荒寒、法昌の分寧に在る時に勝る。開爐に高原宿徳、咸く集まる。又差一力を以つて、鼓を搥つて、十八泥人の爲めに説法するに勝れり。

臨安府淨慈の混源密禪師は、天台盧氏の子、泉南に遊び、教忠の光晦庵に參す。乃ち大惠の謂ゆる禪狀元なるものなり、久しうして盡く其の道を得たり。後示衆あり、云く、「恁麼々々、地を掘つて青天を覓む。不恁麼不恁麼。虚空骨を搥き出す。釋迦老子僧伽梨正法眼藏を以つて摩訶大迦葉に分付す。生錢放債し換水養魚す。世尊金襴を傳ふるの外、別に何物を

るべき引きかりなきなり。標旨は標指なり、月を指す指なり。

⑩ 當時曹洞門下人無きの嘆あり。

⑪ 石田は破庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ。

⑫ 徐は蓋し薦除するなり。

⑬ 歳寒の節操。

⑭ 泥人は土偶なり、大家なき故人形に説法せしなり。

⑮ 混源密は光晦庵に嗣ぐ、庵は大惠に嗣ぐ。

⑯ 生は主也、生錢放債は人より錢を借りて借金なしをするなり。

⑰ 阿難。

⑱ 大びら切つての商賈をせずして内證の賣買計りする。

⑲ 二被。

⑳ 係は敗墟の「石すま」なり。

㉑ 拗は「いちわる」なり、役所のいちわるより役人のいちわる



か傳ふ。門前の刹竿を倒却着せよ。官路を行せず只だ私商を販す。内外中間、心を覓むるに了に不可得、汝が爲めに安心し竟れり。家財俱に籍没し、磔下に黄金を得たり。徳山の棒臨濟の喝、官拗は曹拗に如かず。情親は義親に如かず。腰間の曆日已に多時、用ひず。龜を攢り瓦を打するを、楊岐三脚の驢兒、爾諸人の鼻孔に入る。雲門黒漆の竹篋を以つて、衲僧の命根を斷す。東勝神州に火發して、帝釋の眉毛に燒着す。西翟耶尼の人、忍俊不禁にして連聲に屈と叫ぶ。初三十一中九下七、鉢囊を掛起し柳棟を放下す。山河大地、日月星辰、三月安居、諸佛菩薩、畜生驢馬、九旬禁足、大圓覺を以つて我が伽藍と爲し、寂滅現前、欸に據つて案を結ぶ。去年の梅今歳の柳、顔色馨香舊に依る。喝。但願ふ春風齊しく方を着け、一時に我門に吹き入り來れ」と。人の語句を閱するに須らく其の密説、顯説、直説、曲説を定むべし。恒山の雲の開遮自在なるが如く、須らく是れ同一眼觀、圓一意見にして、方に前輩に辜負せず。混源の出處、已に嘉泰普燈に備はる、此數語未だ載せず。石田の曰く、「受虚中只だ能く事跡を詳類す」と。愚謂ふ聯燈の去取眞に放過せざるものなり。

- ① 龜の甲、瓦のかけでうらなひするなり。
- ② 忍俊不禁は俗語の辛抱しきれないの意なり。
- ③ 鉢囊は持鉢ぶくろ、柳棟は拄杖。
- ④ 欸は罪人の白狀也、案は申し渡狀なり。
- ⑤ 受虚中は普燈錄の著者、傳・廣・續・聯・普・これを五燈と云ふ、普燈は其一なり、僧傳の編纂に此等の語は放過すべからずと云ふなり。

國史陳公貴謙、舍人眞公徳秀に答ふる書に曰く、「承はる禪門の事を下問せらるゝを。仰いで虚懷樂

善の意を見る。顧ふに淺陋何ぞ以つて此を辱うするに足らん。然れども敢て管見を以つて陳白せざらんや。所謂話頭看る合しや否やとは、某を以つて之を觀れば、初めより定説なし。若し能く一念無生なれば、全體是れ佛なり。何れの處に別に話頭あらん。只だ多生の習氣に縁つて、覺に背いて塵に合ふ。刹那の間、念々起滅す。猴孫の栗を拾ふが如くに相似たり。佛祖の輩、已むを得ずして、權に方便を設けて一箇無滋味の話頭を咬嚼して、意識行はれざる所有らしむ。蜜菓を將つて苦胡蘆に換へ、汝の業識を陶して都て實義無からしむ。亦國家の兵器の已むを得ずして之れを用ふるが如し。今時の學者却つて話頭に於いて強ひて穿鑿を生じ、或は透箇に解説して、事業に當つるに至る。遠うして遠し矣。校道者二十年に七蒲團を坐破す。只管看る。驢事未だ去らざるに馬事到來するを。因に簾を捲いて大悟す。所謂八萬四千の關振子、只だ一箇の鎖起と開とに消す。豈に多言に在らんや。來教に謂ふ、『佛の言を誦し、佛の心を存し、佛の行を行はゞ、久々にして得處あるべし』と。此の如きの行履、固に一世の賢者たるを失はず。然れども禪門の一着は、又須らく自己本地の風光を見徹して、方に究竟と爲すべし。此の事人々の本有と雖も、但だ客塵妄想の爲めに覆はる。若し痛く鍛煉を加へずんば、終に明淨ならず。圓覺經に云く、『譬へば金鑛を銷するが如し。金は、銷して固に有なるにあらず。復た本來の金と雖も、終に銷を以つて成就す』とは、蓋し此れを謂ふなり。

- ① 古人贊詠の話頭を吟味するの必要ありや否の問なり。
- ② 長慶惠稜は雪峯に嗣ぐ。
- ③ 一事去らざるに又一事來る。
- ④ 緊要の處なり。



來教に又謂ふ、「道若し言語文字の上に在らずんば、諸佛諸祖何が故に許多の經論を留めて世に在くや」と。謂ふ經は是れ佛言、禪は是れ佛心、初より違背なし。但だ世人言を尋ね句を逐ふて、教網に没溺し、自己一段光明の大事あるを知らず。故に達磨西來して、不立文字直指人心見性成佛、之を教外別傳と謂ふ。是れ教の外別には一箇の道理あるにあらず。只だ此心を明了して、教相に着せざらんことを要するのみ。今若し只だ佛語を誦して、自己に歸することを會せずんば、人の他の珍寶を數ふるが如く、自らは半錢の分なし。又破布に眞珠を裹むが如く、門を出づれば、還らず漏却すべし。縦使中に於いて小滋味を得るも、猶ほ是れ法愛の見のみ。本分の事上には、所謂金屑貴しと雖も眼に落ちて翳となるなり。直きに須らく打併し、一切淨盡して、方に小分の相應有るべきなり。某甲向來大藏經を閲せずと雖も、然かも華嚴、圓覺、維摩等の經は、之れを誦し、亦稍や熟せり矣。其他傳燈の諸語錄、壽禪師の宗鏡錄の如きは、皆翫味すること數十年間、方に屋裡に在つて着到す。却つて經典を看るに暇なきなり。楞伽は是れ達磨の心宗なりと雖も、亦句讀通じ難きを以つて、會つて深く究めざるなり。吾人皆是れ誠心にして、彼の世俗のみづから瞞して、以つて談柄に資するに非ざるを知らんことを要するのみ。姑く日用を以つて之れを驗するに、濁惡の庵過なしと雖も、然れども、一切の善惡逆順の境界上に於いて、果して能く照破して、<sup>①</sup>他の爲めに移換せられざる

①自家屋裡の物丈にて事濟みし故、他を省みざるなり。  
②外物の爲めに自己を移換せられざるや。

や否や、夜の睡中に夢覺一如なりや否や、恐怖轉倒するや否や、疾病して能く主たるを得るを作すや否や。若し目前猶ほ境の在るあらば、則ち夢寐未だ轉倒を免れず。夢寐既に轉倒せば、疾病に必ず主宰と作り得る能はず。疾病既に主宰となり得ずんば、則ち生死の岸頭に必ず自在ならず。所謂人の水を飲んで、冷暖自知するが如し。待制舍人、功名鼎盛の時に於いて、清修寡欲にして、神を此の道に留む。謂つべし火中の蓮華なりと。古人言へるあり、「此れは大丈夫の事、將相の能く爲す所にあらざるなり」と。又云く、「直きに高々たる峯頂に立ち、深々たる海底に行かんと欲す。更に深く窮め遠く到つて、直きに不疑の地に到らんことを欲す」と。來教に謂ふ、「手を下すに處なし」と。只だ此の手を下すなき處、正に是れ得力の處なり。前書に言ふ所の如く、靜處閑處皆一隻眼を着けて、是れ什麼の道理ぞと見よ。久々に純熟せば、おのづから靜閑の異なし。其れ或は雜亂紛飛し、起滅停らずんば、却つて一則の公案を擧して、之れと照し崖せよ。則ち起滅の心自然に頓に息まん。照すと照さると、同時に寂滅せん。即ち是れ家に到るなり。某しも亦學ぶ焉にして、未だ至らざるなり。姑く吐露を盡すこと此くの如し。必ず他に示さざれ。恐らくは儒釋謀らすとするもの、必ず大いに之れを怪まん。待制舍人、他日心眼開明せば、亦必ず大いに笑ひ、而して之れを罵らん」と。國史公は、多く宗匠に見ゆ。

①崖は拒なり、相手を推しのけて進む心持あり。  
②自分の家に到着す。  
③道同じからざれば相爲めに謀らず、論語。  
④大川は逝翁珠に嗣ぐ、珠は佛照徳光に嗣ぐ、光は大惠に嗣ぐ。



● 大川濟禪師、法を荷するを事となし、狷介意に當るものなし。四明の寶陀に在つて、三句の語あり、曰く、「寶陀の一路、來々去々、<sup>①</sup> 磬頭に撞着し、風波無數。」曰く、「寶陀の一玄、臂を掣し、拳を搯す。鼻孔を打失す。蒼天蒼天。」曰く、「寶陀の一妙、人の能く到るなし。喫飯着衣、阿屎放尿。」冷泉に住して示寂す。<sup>②</sup> 遺囑に骨を撒して、窆塔を造らざれ。偈を説いて曰く、「地水火風は先佛の記、冷灰堆裡に舍利なし。長江の白浪中に掃向して、千古萬古第一義。」と。眞に一代宗匠の模楷、<sup>③</sup> 澗東の道を起すものなり。

山陰の<sup>④</sup> 清首座は、心法を無用に得、<sup>⑤</sup> 椒の頰あり、云ふ、「烟を含み露を帯びて已に秋を經、顆々通紅して氣味周し、眼睛を突出し口を開いて笑ふ。這回は戀はず舊枝頭。」と。諸方猶ほ能く誦して、清の述ぶる所たるを知らず、或は載せて無用の作と爲すは非なり。

夢堂升禪師擧す、雪竇の示衆に云ふ、「竇を立て主を立つるは好肉に瘡を剜る。古を擧し今を擧するは、沙を抛ち土を撒す。直下に無事なれば正に是れ無孔の鐵鎚、別に機關あらば、定めて無間地獄に入らん。」拈じて云く、「這般の漢、須らく是れ縑素の眼を具して始めて得べし。活句下に明得せば、佛祖の爲めに師となるに堪へたり。死句下に明得せば、自救不了。且く道へ、雪竇恁麼の説話、是れ活句か、是れ死句か。

① 磬頭又遊頭に作る、逆風ならん、撞は樂なり突く心なり、蒼天はやれ哀しなり、阿屎放尿は「ぶつぶつじゆじゆ」なり。  
② 廬山の惠遠以來此説を爲すもの多し。  
③ 澗東は其師瑛新翁の塔所なり。  
④ 清首座は全無用に嗣ぐ、無用は大恵に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。  
⑤ 山椒の偶頰なり。

雪竇の地獄を出づるを待つて即ち汝に向つて道はん。」又云く、「達磨衆に示して、各々所見を言ふ。小兒百草を鬪すとき、到る處に去つて尋討す。黄昏鬪罷んで却た歸り來る。知らず狼藉は誰れにか掃はしめん、」と。平生の提唱、人倫の周孔あり、鱗羽の龍鳳あるが如し。晚年には、戸を閉ちて交接を喜ばず、衲子之を見れば、龍門に登るが如し。昔し雲蓋の智、禪林の<sup>①</sup> 軟暖を便とし、道心の淡薄なるを疾み、來り參するもの、頭を掉つて納れず、其の入室を容すを聞けば、則ち堂室爲めに滿つ。夢堂之れ有り矣。

石田薰禪師曰く、破庵和尚言ふ、「禪和子室中の下語は、摠に是れ知見解會、如何ぞ了得せん。須らく是れ言句の外に向つて、時に臨み別に意智あつて、<sup>②</sup> 泥水を去離して方に得べし。」我れ舊時行脚歸去のとき、一同行と合州の釣魚に在つて掛搭す。彼の中も亦是れ一員前輩の尊宿あり。<sup>③</sup> 我れ去つて入室するときは、再三我れを免して肯へて擧話せず。同行の去るに至るに及んでは、却つて他を免さず。但だ膝を拊つこと一下して云く、「爾這裡に向つて轉語を下せ看ん」と。同行語無うして、番々入室すれども、只だ是れ此の如く問ふ。他の同行云ふ、<sup>④</sup> 「耐へ難し這の漢、番々只だ此の如く問ふ。我れ他に應すべきなし。爾我が爲めに一轉語を下せ」と。老和尚の云ふ、「爾他の今番又是くの如く爾に問ふ

① 輕軟飽暖なり。  
② 石田は破庵に嗣ぐ、前出。  
③ 拖泥帶水。  
④ 自分には何とも言はぬが同行の友が往くと申中よいと云はない。  
⑤ 辛抱しきれない此處のおやち何とも言はずに幾度往つても同じこと計り言ふと。



を待つて、但だ兩指をもつて鼻を夾んで、他を鑿すること一鑿して便ち出でよ」と。同行果して去つて入室し、教ふる處による。尊宿云く、「人あり爾を教壞し了んぬ」と。信に知る、此事得る底の人は、兩鏡の如くに相似て、自然に彼此相瞞せず、工夫を倣すには、須らく省要の處に倣すべし。這般の田地に到らしめて、方に種草と爲すに堪へたり。

笑翁堪禪師、行丐して泉南に到り、洛陽に休す。一僕夫と山行し、偶ま下生院に到る。古屋數十間あり、廊には風葉を卷き、寂として人聲なし、惟だ一老僧の、雪頂龐眉にして、殿陛に負暄するを見る。徐ろに立ちて客を止め、僧堂前の破木床に坐せしめて曰く、「何れの處よりして來る。」翁曰く、「來に所來なし。」僧曰く、「什麼によつて遮裡に在る。」翁曰く、「早晨に白粥を喫し、如今肚裡飢ゑたり。」僧曰く、「是れ遮箇の道理にあらず、速かに道へ。」翁、屋角の樹を指して曰く、「好いかな一株の木、慇懃に蒼翠を得たり。」二人大いに笑ふ。相就いて話つて刻を移し、始めて老僧は嘗つて、無用に見え來るを知る。雪峰の玠侍者、此を言ふこと甚だ詳かなり、惜しいかな、老僧偶々其の名を忘れたり。

鐵牛印禪師曰く、「正堂辯和尚の、日書記に與ふる書に云く、「黃龍の

- ① 兩指にて鼻を夾み、ぐつと息を込めて指を弾き、「ブツン」と音をさせよと教ふるなり。
- ② 教壞、難の出ない中に徒らものが外から啄くから、とうとう折角の雞子を殺して仕舞ふた。
- ③ 笑翁は全無用に嗣ぐ、前出。
- ④ 負暄は「ひなたぼっこ」なり。
- ⑤ 自己と師を同じうす。
- ⑥ 鐵牛は佛照に嗣ぐ、照は大惠に嗣ぐ、惠は圓悟に嗣ぐ。
- ⑦ 道行は雙肩に荷ふなり、絳章繪句は文章句讀を立派にするなり。

一宗を道行して、振擧せんと要せば、切に絳章繪句人に見耀すべからず。禪道決して行ふ能はず。古には規草堂あり。近ごろ珪竹庵あり。更に洪覺範あり。今に至るまで士大夫只だ喚んで文章僧となす。其れ之を如何せん。公の三日耳聾と女子出定とを頌するが如き、淵源を徹見するに非らずんば、何んすれぞ此に至らん。小々を以つて大法を礙ふる勿れ。道は獨り一己の私を明辨するのみにあらず、諸方の老宿皆此の如く議す。我れを知り我れを罪するは此の書にあり。萬々之を察せよ。此の語切に今時の病に中る。學者忽にすべからざるなり」と。鐵牛の紀載、誠に後學に補あり。所謂草堂の諸老者は、見處穩當ならざるにあらず、當時も亦此の議り有るを免れず。嘉定の間、薰石田博學能文なるも、痛く自ら掩抑するは、此れを以つての故なり。璨隱山初めて元城語録を見て、喜ぶこと甚だし。携へ歸つて之れを閲し、未だ竟らざるに、即ち卷を掩ふ。侍僧の曰く、「何ぞ初めに之を喜んで、遽かに之れを捨つるや。」曰く、「衲僧家は、念々常に乾屎橛上に在つてすら、尙ほ雜用心を爲す。況んや世間議論の文章をや」と。是れ亦堤防の法、當に是くの如くなるべきなり。先徳云ふ、「學者文字語言を漁獵するは、正に網を吹いて満たさんことを欲するが如し、愚

- ① 珪竹庵は佛眼遠に嗣ぎ、道場に住す。
- ② 洪覺範は甘露滅にして大慧に嗣ぐ。
- ③ 我れを知るは春秋か、我れを罪するも又春秋か、是れ孔子の語なり。
- ④ 劉元城の語録、元城諱は克莊。
- ⑤ 乾屎橛は尻の穴をぬぐふ「くそべら」なり、無滋味の語頭なり。
- ⑥ 和譯の禪錄に依つて本分を知らんと欲するも亦之に類す、然れども諸人却つて雪を以て井をうづむるの法を知るや、若し未だ知らずんば和譯の重録を見よ。



に非ずんば即ち狂なり。

閩山居士俞景賢、浙に入つて知識に遍參す。後に鄭峯の用首座に見えて問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」用曰く、「我汝に向つて道はんと欲す、汝還信するや否や。」士曰く、「請ふ師道へ、安んぞ敢へて信せざらん。」用曰く、「汝緊參禪を要せば、西來意を問ふべからず。」士曰く、「何ぞや。」用曰く、「西來に甚の意かある。」士豁然として了解し、衣を拂つて便ち出づ。用復た召して曰く、「什麼を見て便ち出で去る。」士回顧す、而して用喝一喝す。士曰く、「住ね住ね」と、便ち行く。此れより里に歸り、親眷を割棄し、顛々として獨り嶼上の別墅に居る。偈を述べて曰く、「錯脚洪に遊び潮を歴て歸る。更に一法の思惟すべきなし。柴門高く掩ふ長江の上。誰れか管せん風濤の是非を鼓するを」と。用は誰菴に見ゆ。

長樂の珪藏主曰く、「向きに南北の山に在つて、元雙杉と同じく住す。其の清約介靜、四威儀の中、己躬を究竟するの大事を忘れざるを見る。日間は偏へに要らず僻寂の去處を尋ねて、孤坐すること、兀として枯株の如し。夜間睡夢にも、また古徳の語頭を提起して、噫語喑々として、畧ば辨すべきが如し。其の工夫を做すの、精專純一を見るべきなり。那の時、便ち其の必ず法門の大器爲るべきを知れり。其の人を思ふごとに、未だ嘗つて面熱し、汗下らすんばあらず」と。斷橋の雪谷に答ふる手帖に見ゆ。

①顛は愚なる貌なり。  
②錯脚は足を踏み錯るの意ならん。  
③大惠の法嗣なり。  
④噫は嘆と同じく寢言なり、喑々は泣く様な音のするなり。

帖に見ゆ。

嘉興府光孝の石室輝禪師、僧問ふ、「明招の勝光に見ゆるとき、纔かに門に跨れば、光一足を垂る、意旨如何ん。」室曰く、「乞兒飯碗を弄す。」問ふ、「只だ招の伎倆已に盡くと云つて、拂袖して便ち去る如きは、又且つ如何ん。」室曰く、「鈍鳥逆風に飛ぶ。」室久しく明極に侍し、後無準に嗣ぐ、性介烈なり、貴勢敢へて干すに私を以てせず。慶元の彰聖に住せしとき、官府の科擾節なきをもて棄て去る。府公之を聞いて、勉留すと雖も、回らず、嘗つて牌を掛けて、衆に徑山に首たり。其の語穩實なり。

國史陳公貴謙、嘗つて烏回に在つて、月林觀禪師と夜坐す。林曰く、「如何なるか是れ賓中の主。」公曰く、「頭腦相似たり。」林曰く、「如何なるか是れ主中の賓。」公曰く、「横さまに鏡鄒を案じて正令を行し、太平の寰宇癡頑を斬る。」復た聲に従つて曰く、「如何なるか是れ賓中の賓。」月林手を搖して笑ふ。噫公の機辯、猶ほ想見すべきなり。

①石室輝は無準に嗣ぐ、準は破庵に嗣ぐ、庵は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。  
②役所からうるさき事を持ちかけて仕様がなない。  
③徑山首座の掛牌して垂示普説す。  
④鏡鄒は名劍の名、髻切、膝丸なり。  
⑤無景壽は秀岩瑞に嗣ぐ、瑞は佛照に嗣ぐ。

無量壽禪師は撫州の人なり、大師史衛王に答へて云ふ、「佛法は一切の處、奏事書判の處、着衣喫飯の處、君を致し民を澤する處、士を納れ賢を用ふる處に在り。第一に心を擬して尋覓すべからず。纔かに是れ斯くの如くなれば、又得ざるなり。」嘗つて衆に鄱陽の刁峰に首たり、太師京口の金山を以



つて之を招けども出でず、即ち隆興の咸山に遁る。晩年始めて台の瑞岩の請に赴く。是れ亦比丘たるの 大體を失はざる者なり。

石田薰禪師曰く、「既に佛門に入つて佛飯を喫す。 潑天の門戸、人の扶持を要む。亦須らく是れ箇の漢にして始めて得べし。況んや長老と稱するをや。名既に此くの如くなれば、實當に如何んすべき。向上の眼目を具し、大機用を得て、以つて人天を開鑿し、後學を饒益して、方に出世の二字に孤負せざるべし。中下の機に就いて之を言はゞ、亦因果を識り、香華を勤め、早晚禪誦懈らざらん事を要す。新を翫め、舊を補ひ、一切處に眞實の心を運らして、方に少分の相應あらん。方丈に坐し、見成を領して、勞は人を責め、逸は己に歸すべからず。瞬息の間、頭は白く齒黃にして、 前頭大いに事の在るあらん。前輩の長老時節因縁既に至つて、奈何んともせず。 面皮を劈破す。多くは是れ住院の後却つて一步を進得ず。蓋し院の大小衆の多寡を問はず、千人萬人叢中も、亦此くの如く、 單丁にし去る處も亦此くの如し。二六時中専ら此の道を以つて懷と爲し、長久に工夫間斷せず、故に能く打發す」と。石田の此の語、毒藥口に苦く、病に利ありと謂ふべきなり。

- ① 佛法を尋ね究むるは外に取る故不可なり。
- ② 衲僧の脚跟は樹下石上にある。
- ③ 潑天の門戸は向上の些干なり。
- ④ 生死岸頭に臨んで何の技術がある。
- ⑤ 面皮を劈破すとは「つらよこしをする」の義にて、寺院に住持するを云ふ。
- ⑥ 單丁は只一人の處をいふ、上の千人萬人に對す、單は隻也、丁は壯丁の丁なり。

潭州石霜の竹嵩印禪師 隆興府の人、道味苦嚴、見る者肅然として心服せざるなし。抑齋陳公韓、潭に帥たるの日、龍牙福嚴を以つて、招致すれども皆赴かず。後に石霜を以つて請す、已むを得ずして命に應ず。僧問ふ、「如何なるか是れ和尚の家風。」嵩曰く、「家風を問うて作麼する。」問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」嵩曰く、「湘潭雲盡きて暮山出で、巴蜀雪消して春水來る。」同門の秀孤峯、開無門、皆之を推遜す。平生 機鍵縝密にして、語言粹夷あり。豈に親しく月林を見るの力に非ざるか。

大川普濟禪師、嘗つて弁山と老佛心に侍す。弁山偶々外幹し、請暇に及ばず、歸るに泊び、佛心曰く、「阡兄兩日何くにか往きし。」答へて曰く、「未だ嘗つて出入せず。」大川適々旁に在り、叱して曰く、「參禪の人、何ぞ妄語するを得ん。」弁山面赤く汗下る、此より尤も語言を謹む。昔し 昭默死心の責を受く、亦此に類す。湛堂其の良器を歎せしなり。

平江府虎丘の 坳堂濟禪師曰く、「毛髮、爪齒、皮肉、筋骨、髓腦、之を地と謂ひ、唾涕、膿血、津液、涎沫、痰淚、精氣、大小便利、之を水と謂ひ、暖氣之を火と謂ひ、動轉之を風と謂ふ。此四緣假合して幼身を成す。須らく主宰あつて始めて得べし。何を主宰と云ふ。試

- ① 竹嵩印は月林に嗣ぐ、月林は證老稱に嗣ぐ、證は月庵に嗣ぐ、月庵は開福の寧に嗣ぐ、寧は五祖法演に嗣ぐ。
- ② 機鍵は機軸關鍵なり、蓋し宗旨のしらべ緻密なりしなり。
- ③ 大川は浙翁に嗣ぐ、前出。佛心は浙翁なり。
- ④ 昭默は靈源禪師なり、死心は黃龍の清なり、湛堂は眞淨文の嗣法なり、湛堂嘗て昭默死心の法器たるを賞す。
- ⑤ 坳堂は息庵に嗣ぐ、息庵は水庵に嗣ぐ、水庵は佛智に嗣ぐ、佛智は圓悟に嗣ぐ。
- ⑥ 頤頌は相上下するなり。



に道へ看ん。「劫堂は蜀の人、息庵に嗣ぐ、別浦癡絶と一時に頡頏す。惜しいかな壽俱に癡絶に及ばざるなり。」

國譯枯崖和尚漫錄卷の中 終

國譯枯崖和尚漫錄卷の下

蒙庵聰禪師、嘗つて福州に歸り、木庵に乾元に謁す。木庵問うて曰く、「是れ聰侍者なるなきや。」蒙庵名を稱すること、未だ竟らざるに、木庵曰く、「此の事は聰明知慧の、能く辯する處にあらず、如何ん。」蒙庵曰く、「通身是れ口、吐不出。」曰く、「毒に中り了れり。」蒙庵曰く、「他を掩彩する莫れ。」曰く、「且坐喫茶。」茶罷んで、木庵又曰く、「須らく知るべし、此の事は方冊の上にあらず、口皮邊に在らず。」蒙庵曰く、「畢竟什麼の處に在る。」曰く、「鐵蒺藜當面に擲つ。」蒙庵曰く、「大いに好し、口皮邊にあらず。」庵便ち打つ、蒙庵喝一喝して出づ。蒙庵既に法を其の落髮の師、光晦庵に得、大父を以つて雪堂に事へ、復た木庵に乾元に謁し、密庵に烏巨に、水庵に淨慈に、誰庵に高亭に見えて、深く淵奥に徹す。是れ未だ嘗つて、一日も師友無かるべからざるなり。其の法道の昌ならざるを欲するも、<sup>①</sup>（得）べけんや。

① 上卷に出づ、佛眼派。  
 ② 掩彩する莫れとは盲にするなと云ふ意なり。  
 ③ 鐵で作つた「ひし」、戰陣に用ふるものなり。  
 ④ 大父は祖父なり。  
 ⑤ 得の字原本無し、今補ふ。  
 ⑥ 佛鑑は東福寺聖一國師、佛光國師兀庵禪師の師なり。

無準佛鑑範禪師曰く、「木平落浦に參じ、便ち一問を致して云ふ、「一漚未發の時如何ん。」浦云ふ、



「舟を移して水脈を誦じ、棹を擧げて波瀾を別つ。」平契はず、却つて往いて盤龍に問ふ。「一漚未發の時如何ん。」龍云く、「舟を移して水を別たす、棹を擧げて即ち源に迷ふ。」木平便ち悟り去る。後來雲峰悦和尚拈じて云く、「木平若し落浦の言下に向つて悟り去らば、猶ほ些子に較れり。後來盤龍の死水裡に向つて浸殺すべからず」と。住して後問ふものあり、「如何なるか是れ木平。」平云く、「斤斧を勞せず、果然として只だ這裡に坐在す。」と。備道へ、他恁麼の説話、意何くにかある。多く兄弟の、往々に商量するを見るに、舟を移して水を別たす、棹を擧げて源に迷ふは、便ち是れ死水。如何なるか是れ木平、斤斧を勞せず、所以に ① 遮裡に坐在すと。若し恁麼に會し去らば、 ② 驢年にも、也た未だ夢にだも見ざる在り、遮裡須らく他の古人の一些子、人の憎みを得る處を覷見して、始めて得べし。佛鑑の此の語、學者を發樂すること淺からず、晩年 ③ 中峰の道を雙徑に唱へ、機用の迅駛なること、擊石火閃電光の如きは、即ち此の語なり。惟り英雋の鱗集するのみにあらず、今上皇帝も亦問道を思ひ、 ④ 紹定六年七月十五日、修政殿に御して、引見説法せしめ、徽號金欄を賜ふも、亦此の語なり。豈に他の術あらんや。

伊巖玉 禪師は嚴州の人なり、初め名儒にして篤行ありと稱す。中年學業を習ふを厭ひ、専ら ⑤ 洛

① 遮裡這裡同聲互用。  
 ② 豚やら驢馬の干支(えと)が出ても合點出來ぬ。  
 ③ 密庵の塔前出。中峰明本にあり。  
 ④ 日本四條天皇の天福元年なり。  
 ⑤ 伊巖懷玉禪師は癡鈍類に嗣ぐ類(は或庵に嗣ぐ、或庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ)。  
 ⑥ 明道伊川の唱へたる學を洛學と云ふ。

學を究む。忽ち曰く、「是れ以つて吾が事を了すべからず」と。遂に ⑦ 縫掖を裂き、鬚髮を薙つて、出世の法を學ぶ。徑山に登り、老佛心に謁して之に師事す。久しうして契ふ所なし。復た往いて癡鈍に雪竇に見え、依止すること三年、一日忽ち即心即佛の話を明得す。故に「無毛の鶴子天に貼して飛び、千山萬山高く突兀」の句あり、嘗つて ⑧ 劉元城の語録を見て云ふ、「所謂禪の一字は、六經の中に此の理あり、但だ之を禪と謂はざるのみ、達磨西來に及び、此の話大に行はる。此の事の言ふべからざるに據れば、則ち夫子の答へざる是れなり。且つ西來意は必ず問はざれ、而して話も亦必ず答へざれ、向上の老和尚、好んで人を玩弄す。故に不答を以つて之に答ふ。所謂柏樹子は乃ち繫驢概なり、後人知らずして只だ樹を了するを守つて、祖師の西來意を尋ぬ。一笑すべきなり」と。讀んで此の處に至つて曰く、「若し是れ當時此の話を聽くを得ば、這裡正に好し、 ⑨ 一錐を與ふるに。」

⑦ 縫掖は儒服なり。  
 ⑧ 劉安世字器之、大名の人、元城と號す。  
 ⑨ 一錐、元城録は驢馬が井戸をのぞいて居るのじや、うしろからヒツシヤリはつたら、ピツクリして飛び上る。  
 ⑩ 眞源日は雪巢法一に嗣ぐ、上卷出。  
 ⑪ 馮濟川名は機、不動居士と號す。張子韶字は九成、無垢居士と號す、皆名儒なり。  
 ⑫ 不較多は左程違ひないの意なり、蓋し道と物とは同じことじやと云ふ病氣を持つてゐる。

眞源日禪師 曰く、 ⑬ 馮侍郎濟川、張侍郎子韶、道を徑山の妙喜禪師に問ふ。師問ふ、「物を隔て、道を見ざる時如何ん。」子韶對へて曰く、「今日親しく慈眼を觀る。」妙喜曰く、「隔。」子韶云ふ、「然も是の如しと雖も、他を瞞すること一點だも得ず。」妙喜却つて濟川に問ふ。對へて、曰く、「不較多。」妙



喜曰く、「二公の對答、親切ならざるにあらず、但だ未だ道を見ず、一物あつて臥房裡に頓在し、更に一重の壁を隔つるが如し」と。『什麼として見ざるや、禪和子道理を説いて便ち道ふ、「十方壁落なく、四面亦門なし、箇の什麼をか隔てん」と。』饒ひ、爾の眼銅鈴に似るも、也須らく是れ悟つて始めて得べし。』又曰く、「禪和子檐版にして、纔かに轉語を下し得て、依稀彷彿する能はず、便ち言ふ、我れ百了千當す」と。余頃ごろ、佛智老人に見ゆ。亦曰く、「妙喜の横説堅説、切に今時の病に中る。近來世を欺き、名を盗み、未だ得ざるを得と謂ひて、遞に相狐媚し、更に相印受す。東山を見るに、直下に佛法の罪人爲らざる者、幾んど希なり。」斯言、學者並に宜しく之を識るべし。

東山源禪師曰く、「往年嶺を出で、初めて徑山に上る、其時枯禪首座

立僧となり、破庵西堂掛牌し、一時の龍象畢く集まる、石田無準の如き、皆同じく衆寮にあり。破庵尋常の室中、偏に愛して、經行及び坐臥、常

に其の中に在り、如何なるか其の中の事と云ふを擧す、亦曾つて去つて請益するも他一詞を措かず、起單するに臨み、却つて一頰を作つて相送つて云ふ、「骨を換へ筋を抽くの一句、只だ點頭みづから許すを缺く。若し能くみづから解して非を知らば、便ち見ん海宇を平吞するを。」箇れ便ち是れ、人の爲めに、釘と抽了し、楔と抜却するなり。此れより、平江靈巖を過ぎ、癡鈍に見ゆ。時に茂業海前堂

①立僧とは衆僧を成立するなり、僧堂にて首座の外に有道博達の人を請じて之に充つるなり。陸座普説の掛牌なり。  
②起單は暫暇なり、七尺單前なたつの意、大事了畢して出づるを云ふの語なれども、古來暫暇と同様に用ふ。

立僧と做り、今の大慈の笑翁、育王の大夢、みな彼の中において、同じく住す、叢席甚だ盛なり。癡鈍嘗つて云ふ、「詢佛燈四十九日の夜、露柱を抱いて悟り去る」と。次に蔣山に上つて、浙翁に見ゆ。因に室中即心是佛を擧す、下語して云ふ。「橋柱を抱いて深洗す」と。翁云ふ、「什麼の快活かある。」下語して云ふ、「請ふ和尚放下着」と。他に打出せらる。後復た巖雲巢、皎中庵に見え、衢州の祥符に上つて、殺六巖に見え、二十餘員の知識を歴扣す。看れば、應庵下の兒孫の、直截緊峭なるに出づるはなし。宗枝の繁衍する所なり。烏厚、東山悟門に於いて、大いに廓徹すと雖も、猶ほ先聖の一善を得るが如く、則ち拳々服膺して、之を失はざるなり。

③詢佛燈は佛鑑派。  
④大惠下一時燦天の勢ありしも三世振はず、後來の禪道は皆應庵下なり、應庵名は曇華、虎丘紹隆に嗣ぐ。  
⑤黃龍派。  
⑥昔し或人鼻の先に胡粉を塗ること蟬翼の如し、巧匠に之を削らしむ、匠人大斧を採つて兩腋風を生ずる、一拂一撃の下に胡粉を削り去り、鼻少しも傷つかず、莊子に出づ。

眞源曰く、「禪師曰く、『雪巢和尚入室のとき、僧に問ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。那箇か是れ爾が心。」又云ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。爾甚れの處に向つて、六祖を見ん。又云ふ、「是れ風動にあらず、是れ幡動にあらず、仁者心動く。是れ什麼の動く、と。臨濟の宗旨を發明し、衲子の眼目を證驗す。運斤成風の手の如く、其の妙は一斲にあらず、其の亂に當つて、曾つて大慧と同じく江を渡るもの、大慧笠中に一の金釵を藏して路費となし、時々之を視る、雪巢其の不意を伺ひ、取つて諸を江に投ず。大慧慚謝して、與に交を結ぶ。



眞源は雪巢に嗣ぎ、草堂を以つて大父と爲す、故に平生の語言、挺拔して父祖の風烈あり。

隆首座 南山叟と號す、清源南安の人なり。壯歲遊方して、多く尊宿に見ゆ。罷參の後、業海の塔を禮す。偈に曰く、「業火煎熬して業海乾く。尙ほ劫石を餘して影團々たり。我れ來つて、笑ひ罷んで聲を呑んで哭す。昔日の船は此の處より翻へす。」癡鈍の塔を掃ふ偈に曰く、「生苕帚柄時貨に背く。樹倒れ藤枯る舊障圖。一代年來つて一代低し。灼然たり邪法實に扶け難し。」南山は、無隱、雙杉、荆叟と同じく、癡鈍に侍する、最も久しとなす。

西蜀保福の晦崑暉 禪師は、通泉の白氏の子なり。嘗つて肇諾庵、道谷源、開掩室と同じく松源に參じ、密に眞要に契ふ。里に歸つて、三たび道場に主たり、遠近歸響し、道化益々盛なり。散夏の小參に云く、「大智洞明、十方融會、聲に騎し、色を蓋ふ、古に邁ぎ、今に越ゆ、寂默を以つて通すべからず、語言を以つて造るべからず、是を以つて大覺世尊、摩竭提國に於いて、三七日中、口を啓く處なし。」四稜踏地に至るに及び、盡力

隆南山は癡鈍頭に嗣ぐ、類は或庵に嗣ぐ、庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ。

生苕帚、禿なり此字普通の字書に見えず、而し禪錄には往往見る處也、華南紀談の後集に考證あり、生苕帚は「ちびり帚」なり、古岳宗巨生苕と號し、其語録を生苕帚と云ふ、日本永録頃の人なり。

晦、肇、道、開、四人皆松源の法嗣、松源は虛堂の祖父にして人呼んで曠翁と云ふ。

四稜踏地、死心踏地、同意なり、落付く心なり、又皆虛都地の語あり、「くちばし」とが「す」なり、前と義別なり、今は前説に従ふ、四角の木材を地にれさせるを四稜踏地と云ふ、心が落ちついてから種種の法門を演説せらる。

提持す。只だ箇の ① 是法非思量分別之所能解と道ひ得たり。又 ② 是法不可示言辭相寂滅と道ふ。恣廢に掲示すること、譬ふるに斷崖の落石の若くに相似たり、看るもの眨眼を容さず。是の一念非を知るを除して、前後際斷し、全體荷擔し得去る。是れを眞精進、是れを眞法供養如來と名づく。一會の靈山儼然として未散なり。是の如く時々禁足し、念々に護生せば、又何ぞ必ずしも九十日中に、無繩自縛せん。然も是くの如しと雖も、衲被頭を蒙ふて萬事休す」と。此の時山僧都べて會せず。語悉く此れに類す。癡絶蔣山に在つて、其の錄に題して云く、「大隨和尚道ふ、『我れ七十餘員の善知識に參ず、大眼目を具するものは、只だ一二を得、其の他は皆正眼を具す』と。予三十年前叢林の中に在つて、晦崑と遊ぶ、當時大眼目を具するものは、松源一人のみ。歲次庚寅の仲秋、其徒寶日、東林に主たりし提唱の語を携へて、予に編次を乞ふ。是れに由つて帙を開いて縱觀するに、一字一句、造次顛沛も、皆從上大眼目の體裁あり、徒だに語言の末に従事するにあらず、是に知る、松源の道、盡く是に在るを。鳥摩古を去る既に遠く、師法益々壞す、正知見のものすら其人に艱む、大眼目の者は知るべし。晦崑の話は、吾が蜀に行はると雖も、此の録江湖に流播せば、是れ斯道の ③ 敵盟と爲すべし。若し善觀するものは、始めて吾が言の妄ならざるを信せん」と。癡絶も亦激す。わつて言ふ。

① 非思量云は、あわがうと合點分別してわかるることでない。  
② 是法云は、見せようにも見せ様がない、言語道斷なりと。  
③ 昔し春秋戰國時代には、盟約の書が洩來ると、牛の左の耳を切つて血を出し各之をすすつて約束を勵行したり、敵はすするなり。



福州聖泉の岳翁淳<sup>①</sup>禪師は、天姿軒持なり、夏に雪峯に坐して、重ねて菴山閣を架するに値ふ。偈を作つて曰く、「夜半天崩れ地陥休す、一莖草上に瓊樓を現す、儂れ先後歩を同じうせずと雖も、月幌風機一様の愁」と。時に競ふて傳誦す。雲葉無準向きに嘗つて同行なり、皆誠敬心服す。叢林の間、議論鋒發すれば、輿に可否を決す。戯れに禪判官<sup>②</sup>以て之を呼ぶ。

潭州大瀉の泉山<sup>③</sup>初禪師、字は子愚、陳氏の子なり。始め儒を業とし、郷先生と稱す。後に趙州の語を見るによつて省あり、剃髮受具して、知識に遍參し、永木庵の高弟と爲る。嘗つて里の承天寺の僧堂に記して云く、<sup>④</sup>「承天の大僧堂、再造より百餘歳、外嚴にして中蠹す、人知る者なし、住持了空、其の壞れんことを揣つて、之れを新にす、旆者は樂み、役者は悦び、半年ならずして成る。擁するに<sup>⑤</sup>照堂を以つてし、明樓は前にあり、其の勞に任ずるものは道本從賁なり、秋より經始して事を冬に迄ふ。了空是に於て、徒を率ひ入つて居す、寔に<sup>⑥</sup>嘉定六年十二月十九日なり。比丘大初記す」と。僅かに九十二字のみ。西山眞公是の郡を典り、見て喜び、後に湖南に在つて、專書して招く。瀉山に住すること二十年にして寂す。

① 岳翁淳は枯禪に嗣ぐ、枯禪は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。  
② 此處原本の句法を改む。  
③ 泉山は木庵に嗣ぐ、木庵は懶庵に嗣ぐ、懶庵は大惠に嗣ぐ。  
④ 此文原と九十二字、今譯して字數合はず、文の簡淨を識れば則ち可なり。  
⑤ 照堂は僧堂の「眞後ろに」ありて光線の具合悪ければ成るべく高くして蔽明を旨とす、是れは住持差支の時首座や立僧の代講する處なり。  
⑥ 明樓は僧堂の前に在る樓架なり。  
⑦ 日本の建保元年なり。

嘯巖蔚禪師衆に示して云く、「一年三百六十日、今朝は恰も是れ結交の時なり、且く道へ、天衣は甚をもつてか人と分歳せん、拄杖を拈じて云く、<sup>①</sup>一做さすんば二休せず、石虎を爛烹して泥牛を活剝す。已に是れ盤に満ちて<sup>②</sup>釘出したれり。拄杖を卓して云く、<sup>③</sup>三徳六味、施佛及僧、法界有情、普同供養。若し是れ牙に粘し齒に滯るの漢ならば、應に家風の冷淡なるを笑ふべし。一咬に骨を見る底ならば、自然に樂んで以つて憂を忘れん。然も是くの如しと雖も、明年更に新條の在るあり、春風を惱亂して卒に未だ休せず。」嘯巖の語言は嵇康長七尺八寸、美音氣、好容色、形骸を土木にして、自ら藻飾せざるも、人は以つて龍章鳳姿、天質自然なりと爲すが如し。烏虜、敬せざるべけんや。

癡絶冲禪師曰く、「予紹興壬子、峽を出でて公安の二聖に夏す、時に松源密庵の道を饒の薦福に倡ふ。早曠にして衆を着くるに難む。適々西湖の妙果席を虚しうす、松源雲居の首座曹源を擧げて選に應ず、亦密庵の嗣なり。其の入門の提倡を聽いて省あり、遂に誠を投じて住まる。未だ幾くならずして、侍司に歸す。甲寅の夏、曹源信上龜峰の命あり、復た其の行に従ふ。留ること三年にして瀾を出づ。松源は虎丘よりして靈隱に遷り、遷庵は華藏に住し、肯堂は淨慈に住す、皆往いて之に従ふ。松源の靈隱に在るや、門庭孤峻にして、八たび月を

① せずば其れ迄、するなら穴きり也。  
② 釘は釘の誤、肴核を煮するなり、山盛にして出すなり。  
③ 三徳とは輕軟と淨潔と如法なり、六味とは苦酢甘辛鹹淡なり。  
④ 癡絶は曹源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぐ。



閱して後歸堂を得。凡そ掛搭を求むるもの、必ず呵斥せられて、親くを得ず。一日忽ち曰ふ、「我れより八字に打開して、他を掛搭せしむるは、みづからは是れ蹉過し了るなり。當下始めて知る、昔し龜峰に在ること三年、曹源の怒罵喜笑、皆爲人の方便なるを、此れより天下の老宿の、到ると到らざると、我れを瞞じ得ざるを疑はず」と。已にして縁に随つて放曠す。曹源順寂の後二十年、人の爲めに推し出され、辨香敢へて忘れず、凡そ六處に聚まる所の兄弟、無しと謂ふべからざるも、只だ是れ醫晴の方を用ふるもの少し。苦なるかな、吾が宗喪びん矣。今年八十二、時節將に至らんとす、病を扶けて筆を執つて、直に得法の由を叙し、諸れを龕陰に刻して、以つて至信を昭かにす。淳祐十年庚戌の歳なり。「烏摩、癡絶は世に其機用、盤珠の如しと謂ふもの、且つ能く益々光彩を鐘り、其の師の歿後二十年に於て、方に瑞世す。眞に所謂、色のまゝに斯に擧り、翔ふて後集るなり。九萬に搏つこと立つて埃つべきなり。名字他人の夾袋中に入るを肯はず、其の識又人に過ぎたり。所以に聲一世に轟き、中峯の道を起せり。吾が宗の喪ふるを以つて憂となす。此れを聞いて痛心せざるを得る者あらんや。

- ① 參學の希望により應すべきもにて、我れより門を八字に開きて他を掛搭せしむべきにあらずとの意ならん。
- ② 到る到らざるは、既に行きしと未だ行かざるとの意ならん。
- ③ 醫晴は船晦の意、此嘆古今一徹なり。
- ④ 淳祐十年は建長二年なり。
- ⑤ 白樂天の琵琶の音を形容するに、大珠小珠玉盤に跳るの句あり。
- ⑥ 論語郷黨の篇にあり、下の句を採りしならん。
- ⑦ 夾袋は袋入れなり、呂蒙正夾袋中に冊子あり、四方の才人の名を分類して之を疏し、朝廷賢を求むれば之を夾袋に求む。

絶照鑑 禪師淵より歸る者に因つて上堂して云ふ、「相別るゝ一に何ぞ久しき、相逢へば只だ舊時、眉毛は八字に分れ、鼻孔は大頭に垂る。諸方鍋兒の大小、杓柄の長短、直に是れ他を瞞すること一點も得ず。且く道へ、鎮州の蘿蔔頭、無底の籃に幾箇を盛り得たる。」喝一喝。冷を待つて來り看ることを放す。上堂に云ふ、「古佛と露柱と相交ること第幾機ぞ。南山雲を起し北山雨を降す。金剛土地神のために背を措ること、一擦して骨出づ。謂つべし、家の貧なるは、猶ほ自ら可なり、路の貧なるは、人を愁殺す。汝諸人面を仰いで天を看、口を開いて氣を取る。這箇の消息に非ざるはなし。甚によつて不覺不知なる。若し也知り去らば、三世の諸佛身を容るゝの地なからん。苟も或は未だ然らずんば、乾元口を留取して飯を喫せん。」拄杖を卓して下座。大抵の宗師家と吐露自ら廻別なり。然りと雖も、須らく是れ言説の相を離れて、方に老絶照の用處を見ん。

石田薰禪師、初めて潭州に到り、石霜の雷遷塔を禮す。偈に曰く、「一念の慈容元隔てず。何ぞ須ひん、特地に肆に乖張するを。高きを平げ下に就いて、婆心切なり。雷公を惱し得て、一夜忙はし。」名此れによつ

- ① 絶照國鑑は觀物初に嗣ぐ、初は北磻に嗣ぐ、磻は佛照に嗣ぐ、大惠下絶照宗鑑とは別なり。
- ② 大根なり、鎮州の大根は尾張大根の如く名物なり。
- ③ 途に死蛇に逢はば打殺することなれば、無底の籃子に盛りもち來れの古句あり。
- ④ 二王さんが土地神の背を擦すると、骨がによつきりとした何あんのこつたい。
- ⑤ また廻然別なり、作る處もあり大に相違するなり。
- ⑥ 道吾の諸禪師期望必ず石霜の塔を拜す、相去ること百二十里、老に至るも輟めず、偶々一夕大雷雨あり、塔自ら遷就す、故に雷遷塔と云ふ。



て彰る。破庵に蘇の穹隆に見ゆ。室中に世尊拈花を擧するを聞いて、答へて曰く、<sup>①</sup>「焦博打着す連底の凍、<sup>②</sup>赤眼撞着す火柴頭」と。菴之れを奇とす。石田嘗つて僧馬祖に問ふ、如何なるか見、西來的々の意を拈じて、雲巢癡絶爲めに擊節す。傳へて徑山の老佛心に至る。亦云ふ、老僧只だ路を避くるを得んのみ。

眞淨大師德英は、建溪の楊文公億五世の女孫なり。性聰にして、善く傳く會す。達庵により、四威儀の中に於いて悟入あり、徑ちに徑山に上り、佛照に投ず。應對飛蓬の風に隨ふが如し、照許すに、<sup>③</sup>再來の毒種を以てす。後に蘇の朱明に說法し、常の淨慧に、<sup>④</sup>委蛻す。自讚に云ふ、「みづから贊して贊し出さず。みづから畫いて畫けども成らず。箇の本來の相あり。如何んか人に呈似せん。活潑々、本無生。鼻孔は依然として上唇に搭す」と。叢林之を傳ふ。癡絶其の録に跋して世に行ふ。

月窟の清禪師は、福州福清の人なり。<sup>⑤</sup>少長の時、因に郷閭の者の焚火を見て、乃ち曰く、「我れ願はくは作佛して、猛火の爲めに焼かれず」と。火母之れを訝る。十四歳、許して以て出家せしむ。湖州の何山に往く、復庵法器たるを知つて、落髮受具せしむ。久しうして

① 垂張は「はだはだ」になるを云ふ。  
② 焦博は焼けた瓦、連底は底の底迄、撞着は「つきあはす」な  
③ 龜の目は赤き故龜を赤眼と云ふ、赤眼が「いま」と撞着した、成程面白い下語ぢや。  
④ 路を避るは遠慮して一頭地を抜かしむるなり  
⑤ 生れかはりの命とり。  
⑥ 委蛻、委順、順寂、順世は皆死なり。  
⑦ 月窟は華藏の宗演に嗣ぐ、演は大惠の法子。  
⑧ 少長は「幼き」なり、治亂大小長短も時に偏用す、焚火は火葬なり。

所證なく、寧息に違あらず。一夜僧堂中に、琉璃燈を放つを見て省徹す。偈を述べて曰く、「琉璃放下し、また放起す。一點の光明常に已ます。若し人這の光明を識得せば、<sup>①</sup>姐々は元來是れ阿姉。」<sup>②</sup> 遂庵に華藏に謁す、開室に値ひ、欣躍して進む。復た踵を旋して曰く、「我れは是れ無罪の人、這の地獄に入らず」と。後遂庵と酬酢し、水乳相合す。嘉定の間、江右の憲使、陳公貴謙、臨汝の天寧を以つて之を延く、何山の請に赴くに及び、道聲益々著はる。平生氣剛介を尙ひ、<sup>③</sup> 媮合苟容を厭ひ、多く人を面折す。叢林之が爲めに肅整す。此れ大法を衛護するもの、然るべき所なり。

清烈庵主は天台の人なり、臨安の餘杭縣、湖西山の煥氏庵に居る。年已に九十、<sup>④</sup> 昏睡眊瞖、晝夜惟だ枯坐す。將に示寂せんとするとき、蔬飯を具し、村落百餘人を會して、相訣の語を述べ、同じく山頭に詣り、<sup>⑤</sup> 引手長揖して、龕に入つて趺坐し、偈を説いて曰く、「這の漢無知、是と説き非と説く。拳頭堅起、佛も也窺ひ難し」と。化火してみづから焚く。頂と、兩肘と、兩膝の、五處より熾然として三昧の火光を起し、五色璀璨たり。堅固舍利計ふるに勝ふべからず。寶所山主、能く詳かに之を言ふ。烏摩淨性の心宗は、常光熾然たり。無壞無雜にして法界に周遍す。故に烈公死生の際に遊戯すること此くの如く奇特なり。豈平生履踐の明驗に非ずや、<sup>⑥</sup>

① 姐姐は姉なり、阿姉は姉なり、矢張り泣く時には「ぎや」と云ふ。  
② 「めらり」「くらり」となまこの様に世を渡るなり。  
③ 「ひとみ」が「ウルミ」、「目」がぼんやりするなり。  
④ 引手は長揖の形容語なり。  
⑤ 提多迦は天竺傳法の第五祖なり、示寂の時遺偈を説き了つて、身を虚空に踊して十六變をなし、三昧火を發して自ら其身を焚く。婆須密は遺偈を



抑抑提多迦、婆須密の發現か。

諸庵元肇、禪師、師範規とすべきあり、道に精一なり。雪に因つて上堂に云く、<sup>①</sup>「普賢昨夜醜を呈し、一片の寒光晝の如し。憐むべし妙用の些子。石人を引き得て失笑せしむ。且く道へ箇の什麼をか笑ふ。」<sup>②</sup>金鳥飛んで欄干に上る。看よ欄が一場の漏逗。「仲冬嚴寒年々の事を頌して云く、「野老元來放懷を解す。兒孫更に酒を以つて相陪す。只だ知る好景の長時に在るを。覺えず老は頭上より來るを。」と。師に愧るなし。昔し諸庵開掩室と與に、伴を結んで松源に參ず、源も亦針筈に倦まず、故に盡く其妙を得たり。是れ賢師友無かるべからざるなり、後學の法と爲すに足れり。漢陽軍鳳棲の古月祖照、禪師、生縁は東川廣安の趙氏なり。祥甫山主を禮して落髮の師となす。敏にして、疾見、遍く講肆に遊び、至る所、<sup>③</sup>席を奪ふ。忽ち所習を棄て、<sup>④</sup>閩を歷て浙し、<sup>⑤</sup>肯堂に依り、狗子無佛性の話を明得す。のち破庵の室に入り、其の直視の勢を作すを見て、乃ち咄して云く、「野狐精。」破庵劈耳に一掌して云ふ、「畢歷是れ者箇の道理にあらず。」また應聲して曰く、「野狐精。」破庵また一掌を與へ、示すに偈を以つて

説き了つて三昧に入り涅槃の相を示す、天然傳法の第七祖なり。

① 諸庵は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵は應庵に嗣ぎ、應庵は虎丘に嗣ぐ、虎丘の師は圓悟なり。

② 普賢は白象に騎る。

③ 金鳥は日光なり、日中に三脚の鳥あり。

④ 此人世系肯堂下にも破庵下にも無し、未詳。

⑤ 疾見は蓋し五行並べくだると云ふ如く、書を讀むの速かなるを云ふ。

⑥ 席は他人の席なり、義通すれば通ぜざるものの席を奪ふ、昔し斯くして五十餘席を奪ひし者あり。

⑦ 肯堂充禪師、上巻に出づ。

⑧ 目をさか立てて見するを直視と云ふ、仍つてこの「ばけものめ」と咄せしなり、劈耳

して云く、「一掌幾たびか會つて痛痒を知るや。頭を回らし、腦を轉じて口喃喃たり。直饒舌は風雷の疾きに似たるも、<sup>①</sup>也落つ機前の第二三」と。照嘉定の間、唐興の聖果に出世す。後に鳳栖にあり、室中に三句を垂れて學者を驗す。一には和煙釣月の句、頌に云く、「煙水茫茫として釣艇横ふ。日盈月昃未だ分つべからず。」<sup>②</sup>謝郎は是れ絲綸の客ならず。争でか免れん時人の見聞を錯るを。」<sup>③</sup>二には、截水停輪の句、頌に云く、「正眼豁開すれば天地窄し、機輪停まる處海濤乾く。等閑に拶出すれば驪珠現す。無限の邪魔心膽寒し。」<sup>④</sup>三には、不入驢耳の句、頌に云く、「儂が家の一句三句を分つ。馬を見、牛に逢ふて、伊れに舉似す。只だ此れ更に親切の處なし。眼中に聞き得て始めて應に知るべし」と。順世の時、後事を以て侍郎楊公恢に囑す。曰く、「子微つせば、孰れか子の心を知るものあらん」と。楊公之が爲めに嗟惜して食を輟め、特に其語に叙して謂く、「脊骨の硬きこと破庵に減せず」と。<sup>⑤</sup>寒齋林公公遇、晩年世俗を遺外し、宗門に造入す。齋傍に隙地あり、草庵を架し、以つて少林の誠公を延き、而して風日佳時必ず之を過ぐ。二子同と合とは侍立して其の談論を聽く、余間々果藏主と庵に到り、亦竊かに預る。<sup>⑥</sup>淳祐丙午九月、公疾を以て家に卒す。且つ偈を書して云ふ、「五十八年の

は耳へ掛けてはり飛ばすなり、畢歷の二字古來不明とす、蓋し畢竟歷歷を早口に言ひしならん。

① 誠に結構な御垂示なり、破庵も意氣込は買ひしなり。

② 謝郎は玄沙和尚なり。

③ 日本寛元四年なり。

④ 警地は「ちらり」とした、摩捺は目を「こする」なり、阿底は「おやち」なり、底と多と同聲、警は過目なり。

⑤ 張載字は子厚、横渠と號す、虎皮を徹して二程に學びしは儒林の佳話なり、東銘四銘等の著書あり。



熟睡、且喜すらくは今朝、警地なるを。試みに老眼を將つて摩挲すれば、只だ這の阿底便ち是。張横渠亦云ふ、「學者但だ心識を養ふて明淨なれば、自然に生死存亡を見るべし、智中瑩然たること疑なし、寒翁之を得たり」と。

龍溪聞禪師、初め遊方して南康に至り、雲居に詣で、半嶺に至つて、笠頭風の爲めに掀げられ、嶺に沿ふて下り、笠所に尋ね到つて省あり。常の保安に住し、孤硬清約なり。僧問ふ、「如何なるか是れ和尚爲人底の句。」溪曰く、「鶉鳩枝上に啼く。」僧曰く、「某甲不會。」溪曰く、「鼓已に堂前に響く、喫飯し去れ」と。無準謂ふ、「徑にして直、簡にして峭なるものなり」と。頃ろ龍溪の道一方に重く、衲子嚮ひ臻つて、堂中の被位隣次す。夏旱に丁つて未だ解制せざるに多く起單す。溪曰く、「道ふなかれ、諸人の拄杖子躡跳す」と。後の五日に、山僧が拄杖子も亦躡跳せん、越えて五日、沐浴陞堂し、方丈に歸つて坐亡す。茶毘して設利を造らす、五色のもの計るなし。保安の耆宿しか云ふ。

岳翁淳禪師は福の石岳の人、賦性、好獎、人の善を稱す。晩進は力を悉して薦藉す、未だ法せざる時、妙語已に叢林に遍し、慶成に住する踞室に云ふ、「這裡に打開し、那邊に塞路す。甚に因つて此の如くなる。膏肓を活し必死を起す。」道舊に謝するに云ふ、「劍池の邊り松峰の下、幾度か同じく歩いて、懸崖に至り、驢兒を牽き得て、喚んで馬と作す。」喝して云ふ、「是れ何の語覇ぞ。」又云ふ、「二月初一、好箇の消息。桃花煞だ紅に、李花煞だ

好獎とは人を推獎するを好むなり。

白し。劍池邊の楊大伯、笑中に攔腰白を打失し、直きに如今に至つて尋ね得ず。喝して云く、「甚の交渉かある。」又云く、「冷坐して、枯椿を守り、身を轉ずる底なし。多くは是れ時に違ひ候を失ふ。

楊大伯は役者の名、攔腰白は役者の「こし」に巻くものならん。

椿は槪也、枯木のかぶを枯椿と云ふ。

紙錢を焼くなり。

玉粒は餡なり、漿苳は菜の汁なり。

絲をふたこによりてすぎはひとす。

當時僧牒を得るには錢を要す、之を檀施に仰ぎしなり。

龜山は陳沈二和尚に成る、陳は初代、沈は二代なり。

楷撫は楷模に同じ、手本の意。

一回寒骨に徹し、親しく暢快する底ならば、十分に和氣春風。衲僧家兩眼鈴の如く、斗を嗔り地を哂り、神機を翫弄し、風雲自ら異なる。儘數酒を酔り、錢を焼き、低頭して歳を賀せんには。風は蕭々たり。葉は飄飄たり。塙頭に桑條動き、柳條最も苦む。北禪は村田樂を唱へ、露地の牛を烹、波々紮々。伊れを奈何せん。人を惹き得て皮角を収め、笑裡に刀を藏す。咄、清平世界に干戈を用ひず。之を誦すれば、玉粒を飲むが如く、自然に漿苳を薄んせしむ。於戲、枯禪は其傳を得たりと謂ふべし。了に知る、法乳の源、異味なきことを。

辟支巖主立堅は、三山漁溪の人なり。初め雙線を以つて活となす、倏ちに省覺して、應林山中に入り、糧を休めて大樹の下に居る、妻子之を追捕すること急なり。遂に髪を剪り、蒲の囊山を過ぎ、辟支巖に通る。後に亦檀施に従つて僧と爲る。淳祐の間、郡主林公希逸延くに龜山陳沈二禪の道場を以てす。迫つて後に就く、未だ幾くならず、舊巖を思ひ、同道に書を與へて云く、「夫れ住持と稱するものは、衆の楷撫



となり、佛に代つて化を揚ぐるなり。我れに道徳言行の譽れなく、未だ仁義禮法の由を知らず、草座麻衣木食礪飲すら、且つ以て愧と爲す。人前に推向せば、實に何を以てか堪へん」と。衣を拂つて徑ちに歸る。壁の出處、緇林に於いて亦助けありと、しか云ふ。

東谷光 禪師は、風神清拔にして、精識あり、祚明極に見え、實齋蔣公と法喜の遊を爲す、蔣、西庵の三偈を録して以つて寄す。和酬に云ふ、「道ふこと莫れ西庵小なりと。了に邊と表となし、還す他の親しく至り來るに。一方に分曉なり。」道ふことなかれ西庵静かなりと。鐵牛吼聲震ふ。露柱と燈籠と、點頭相共に應ず。「道ふことなかれ西庵窮まると。空を呑んで復た空を吐く。金粟老に相逢ふて、臘月に春風を鼓す。靈隱に住す。已にして罷勸して溘然たり。東澗の湯公祭るに文を以てして曰く、「維れ東谷師、昂然たる鶴質、冷泉の主となつて、曾つて多日ならず、病を示すこと已だ早く、滅を示すこと何ぞ疾きや。我れ乍識なりと雖も、口を開きて實を吐き、問訊殷勤、迹は疎なるも情は密なり。忽ち手書を遣り、古畫名筆、聿に來つて行を告ぐ。之れを覽て自失す、諦かに點畫を見るに、宛然として道逸なり。是れ過量の人は、生死齊一なり、而も我れ凡情にして、悲涕爲めに出づ。雪は湖山に満ちて、羸馬叱し難

① 由は義と同意ならん。

② 東谷妙光は明極に嗣ぐ、極は暉自得に嗣ぐ、得は宏智に嗣ぐ、智は丹霞淳に嗣ぐ、曹洞下。

③ 邊幅なく表裡なし。

④ 金粟老はお釋迦さま。

⑤ 寺務に疲れて示寂す。

⑥ 風神清拔と云ひ、昂然鶴質と云ふ、皆身體瘦せたるを云ふ。

⑦ 蓋し遺物ならん、遺物を送り來つて圓寂を告げしなり、生前に死後の事を處理せしなるべし。

し。聊か辨香を持して、往いて其室を弔ふ」と。一時の講道相往來するもの、皆名公卿なり、是れを同人門に于てすと曰ふ。

蒺藜曇 禪師、初め湖州の普濟に居る。荒寂にして傳舎の如し、夙夜にみづから 聖僧に對して、坐禪すること凡そ九年、後に蘇の穹隆に住す。門風愈々高峻にして入者有るなし。室中常に云ふ、「穹隆に句子あり。衲子下語と不下語と。一例に打罵せん。」無準時に會中にあつて藏主となり、少しく忤ふて趣ひ出さる。且曰く、「他をして徑山に住し、却り來つて老僧に見えしめん」と。後無準徑山に住し、遺漏によつて吳門に行丐す。蒺藜猶ほ虎丘にあり、二老相見て撫掌大笑す。

鎮江府金山の掩室開 禪師は、成都の人なり。講肆に遍歴し、忽然として樂まず。嶺を出で、大事を了せんと欲す。樞使安公亦勉むるに、偈を以つてして曰く、「吾れに大患あるは身あるが爲めなり。是の身假合にして亦眞にあらず。維摩の病を示すは元病にあらず。好し南方に向つて、更に問津せよ。」室番陽の東湖に抵つて、松源の開室に値ふ、「明眼の衲僧、什麼によつて、鼻孔を失却す。」と擧するを聞いて、言下に領解す。一日連案の僧、其の看經するを見て、問うて曰く、「向後得座披衣せば、如何んか爲人せん。」室經を將つて僧に度與す、僧經を將つて案に擲

① 易の同人の卦初九の語なり、剛陽の徳あり、門外に交はるに其徳をかへざるなり。

② 蒺藜曇は松源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ、密庵の師は應庵なり。

③ 聖僧堂内に祭れる文殊大士なり。

④ 寺院敗壞して雨漏るなり。

⑤ 掩室は松源に嗣ぐ、源は密庵の法嗣、密庵は應庵に嗣ぐ。

⑥ 得座披衣とは一方の宗匠となるを云ふ。



うつ。室復た取つて朗聲に誦す、僧休し去る。嘉泰辛酉、始めて廬山雲居の請に赴き、未だ幾くならざるに金山に補す。藍田の法語の如き、皆參禪の捷徑なり。平生接する所の人、獨り佛海を得て、大いに松源の道を昌にす。

雙杉元 禪師踞室に云ふ、「報恩の方丈、百無一有。爲人を羸ち得て、

推門入臼。「示衆に云ふ、「衲僧家は月の大小と歳の閑餘を知らず、三角の粽子を喫着して、便ち道ふ是れ端午と、忽ち報恩に一日を移上せられて、他に背いて只管半信半疑す。今朝舊に依つて蓋茶を點じ、伊れに與へて口を濕さしむ。驀然として菖蒲を咬破して、一身の冷汗を出し、失聲して道ふ、啞、福建子、人を激惱殺す。大衆、這箇は豈に是れ通靈の藥にあらずや、三十年後切に忌む拈却するを。」嘗て三門に入つて云ふ、「鬧市門頭に箇の入處あり。只だ諸人の爲めに 見頑了也。新長老は行に因つて掉臂を妨げず。大衆を顧視して云ふ、「我に隨ひ來れ。」雙杉只だ目前に據つて、手に信せて拈し來つて、耆黃の妙濟に非ざるなし。換骨の法、起死の方、何ぞ必ず他に覓めんや。

荆叟珏 禪師、夏を靈巖になす、時に癡鈍其れに狗子無佛性の話を看せしむ、言下に旨を領す。因

- ① 日本の建仁元年なり。
- ② 石溪心月禪師佛海と諡す。
- ③ 雙杉萬庵柔に嗣ぐ、中巻出。
- ④ 日は門樞の下の「うけ」なり、門を推して白に入れたりとの縁語。
- ⑤ 雙杉は福建の人。激惱殺は人を上げたり下げたりやくたいにするなり。
- ⑥ 貝頑了は「大層六づひしくなる」なり。行に因る云云は歩むたびに手を掉ふなり。
- ⑦ 耆婆、黃帝調合の妙藥。換骨脱體起死回生の手術。
- ⑧ 荆叟は癡鈍に嗣ぐ、癡鈍は或庵に嗣ぐ、或庵は此庵に嗣ぐ、此庵は圓悟に嗣ぐ。

つて潛無隱と 通吐す。無隱曰く、「是なることは則ち是なり、只だ是れ命根未だ斷せず、更に須らく出で去つて、人を見て、始めて得べし。」且つ其れに囁して 淳庵に謁せしむ。叟、華藏に至つて半年、所得なし。一日忽ち火板の響を聞いて、凝滯釋然たり。淳庵に告ぐ、庵即ち鼓を鳴して開室す、叟趨り入る。庵問ふ、「如何なるか是れ佛。」叟曰く、「野花開いて路に滿つ。」問ふ、「如何なるか是れ法。」叟曰く、「私酒醉人多し。」問ふ、「如何なるか是れ僧。」叟曰く、「鉢孟口天に向ふ。」庵曰く、「未在出去。」後に叟癡鈍の室中に在つて、如何なるか是れ佛と擧するを聞いて、震聲して答へて曰く、「爛冬瓜。」且つ偈を述べて曰く、「如何なるか是れ佛、爛冬瓜。氷霜を咬着して齒牙に透る。根蒂然く窞子なしと雖も、一年一度一たび花を開く。」荆叟衆に處る時、無隱雙杉の力を得ること尤も多し。

- ① 通吐は白狀するなり、潛無隱に本領を話せしなり。
- ② 淳庵は上巻に出づ。
- ③ 未在出去はらちあかね出て往け。
- ④ 北山信、月窟に嗣ぐ、月窟は遊庵演に嗣ぐ、演は大惠に嗣ぐ。
- ⑤ 話墮は話しに取られたと云ふ文字なり。
- ⑥ 不合は思ひ掛けなくの意、觸忤は御無禮しましたなり。
- ⑦ ほがらかに笑ふを軒渠と云ふ。

福州雪峰の 北山信禪師は、本州の人、性方嚴にして、機は迅敏なり、初學之に見ゆれば、應對多く失す。次いで鼓山に在る時、僧あり相看す。山問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧曰く、「西禪。」山曰く、「西禪に何の言句かある。」僧曰く、「話墮せり。」山曰く、「爾甚れの處より這の些子を學得し來る。」僧曰く、「今日 不合に和尚に觸忤す。」山拄杖を拈じて便ち打つ。僧拄杖を奪つて、軒渠大笑して出づ。遂に請じて茶を喫せしむ、是れ老宣首座なりと傳



へて去る。初め北山、月窟と同じく浙を過ぎて遼庵に華藏に見ゆ。月窟先づ契證あり、故に山咨決を得るの後、里に歸り、明晦堂を訪ひ、鼓山に分座す。漳の守趙公以夫、其道を聞いて、南寺を以て之を招く。山遜謝して曰く、「公之を聞くこと過てり」と。使者三反して乃ち行いて開堂す。同行月窟の爲めに拈香す、時論之を高しとす。

枯禪鏡禪師、天資淡薄にして、一も嗜好なし。惟だ衲子と提撕敲磕して倦まず、「如何なるか是れ祖師西來意」と問ふものあり、枯禪禪床を打つこと一下す。「今の人、語言千百を吐露するも、皆前輩の地位に到るを得る能はず、且く利害什麼の處にある、會す麼。」

癡絶の沖 禪師、嘗つて福州雪峰の請に赴く。尙書陳公韓と 宿素の雅あり、招いて私第に飯し、項王之像を以つて讚を求む。即ち筆を拈じて書して云く、「拔山は力にあらず。蓋世は氣にあらず。八千の子弟、同じく謀り共に濟ふ。人皆謂ふ天下は大器。力を以て争ふべからず。必ず仁義を先にせよと。殊に知らず天其手を假つ、以て暴秦を誅し、然る後寬仁にして人を愛するものに帝たらしむ。吁 其れ亦斯の世に補あり」と。公大いに之を奇とす。癡絶慧辯恢廓なり、此れ特に 緒餘のみ。

介石の明 禪師は秦溪の人、性高簡なり。僧曰く「寶劍未だ匣を出でざ

- ①癡絶、曹源に嗣ぐ、密庵下。
- ②宿素の雅は古きなじみなり。
- ③緒餘は一端と云ふが如し。
- ④介石禪師は浙翁瑛に嗣ぐ、瑛は佛照光に嗣ぐ、光は大惠の法嗣。
- ⑤李廣、刀折れ矢盡きて胡に降る。
- ⑥舟を刻して劍を求むるを拈す。
- ⑦泊浮、水を撈ぐなり、木の株を

る時如何。「答へて曰く、「杜鵑鳴く處花狼藉たり。」僧曰く、「匣を出で、後如何ん。」答へて曰く、「人をして長へに。」李將軍を憶はしむ。僧曰く、「出と未出との時如何ん。」答へて曰く、「劍去つて久し。汝方に舟を刻す。」解夏の夜參に曰く、「九旬の禁足、禽を網して巢に宿せしむ。三月の安居、狐を驅つて塚を守らしむ。生殺不到の處に向つて、三頭六臂を見ん。圓覺伽藍を掀翻するも、猶是れ椿を抱いて。泊浮を打す。雲黄山前の 雙檣樹下、九十日の内、風は時を以てし雨は時を以つてす。二六時中少も添へず多も減せず。一年三百六十日、日々に安居し、時々自恣す。圓なるものは自ら圓、方なるものは自ら方、長なるは自ら長、短なるは自ら短なり、未だ淨地に塵を揚ぐるを免れず。畢竟如何ん、大鵬翅を展べて天路遙かに、巨龍身を轉じて海水窄し。」示衆此に類す。晩年杭の冷泉に寓し、其室に扁して青山外人と曰ふ。景定の間、丞相秋壑賈公、尤も佛法を崇敬し、爲に奏す、旨を得て 淨慈に住す。後其席を繼ぐもの、皆潤東より起る。

- ①以て遊ぶは何ほ厄介物が添ふて居る、自由の場に至らざるなり。
- ②二本の枯木、蓋し實景ならん。
- ③南宋理宗の末年なり。
- ④淨慈は代代浙翁の法系住持す、浙翁の塔は潤東にあり。
- ⑤石田は破庵に嗣ぐ、應庵下。
- ⑥面皮を劈破するは恥を忍ぶの意、上巻に出づ。
- ⑦丹沙なきを以て赤土を用ふ、赤土も無了して泥となり土となる、一代は一代よりも低下するなり。

石田薰 禪師曰く「薰上座の靈隱に住する、亦是れ奈何ともせざるなり、人に東に撈し西に撈せられ、禪床角頭に撈到して、回避し及ばず。只得祖師の爲めに、箇の門戸有らしめんとし、面皮を劈破して出で来る、喚んで此の地に朱砂なし、赤土以て上と爲すとなす。然りと雖も、今時を看却せ



ば、漸々に赤土も亦無了し、漸々に泥を食ひ土を食はんとす。説着すれば、眞箇に人をして寒心せしむ、と。噫、道に志すもの、此を聞いて當に如何すべき。

雙杉元 禪師は、嘉熙の間、乃ち石田堂中の第一座なり、丞相に上る書に言ふ、朝廷の新指揮、師號金環象環を買ふは不便なり。書に云ふ、「正月十三日、景德靈隱禪寺、前堂首座、前住持嘉興府天寧寺の僧中元、謹んで薫沐して、書を樞使、大丞相國公に獻す。竊かに以爲らく、佛老の教は救世の計なり、其の儒道と天地の間に相參る所以は、能く性眞を開悟し、邪見に墮ちざるを以つて、其の功量り易からざればなり。我朝の太宗皇帝嘗て曰く、「釋氏の道は教化に補ひあり」と。孝宗皇帝も亦曰く、「佛を以つて心を修め、老を以つて身を治め、儒を以つて世を治めば、斯に可なり」と。

張文定謂ふ、「儒道淡薄にして、一時の賢聖盡く釋氏に歸す。而して關洛の諸公も、また必ず釋氏の書を玩味して、後能く、洙泗不傳の秘を接續す」と。然して、教は必ず主あり、必ず師あり、國家度牒を以て人の承買を許す。凡そあらゆる僧は、各、師を尋ねて以つて歸依となす。師苟くも道行あらば、則ち迷者は悟り、塞者は通せしむ。其の世教を裨助する要らず小補にあらず。近世は貨賂公行し、住持たるを求むるものは、吾が教の罪人なり。若し以つて例して傳へば、天下の賢者は深藏遠遁せんのみ、其れ出で、師たるを肯はんや。夫れ師廢すれば則ち正法微なり、正法微なれば則ち邪法熾なり、

①元雙杉萬庵に嗣ぐ、應庵下前出  
②洙泗は二水の名、孔子此間に教授す。

清淨の門を以てして、利慾交々征るの地となすは、國家の福にあらざるなり。譬ふるに家熟黨庠の師なき能はざるが如し。其の能く道を傳へ感を觸く者の、之を爲すを求めずして、惟だ賄を是れ視ば、則ち弟子何を以てか仰がん。孔門の教亦熄むに幾し、佛老の道も何を以て是れに異ならん。若し佛老の徒、身大厦に居り、日に膏腴を享け、簞せずして衣、耕さずして食ひ、世の嫉む所と爲ると謂はゞ、然く天下の人、世に無用にして、坐して膏腴の奉を享くる者ある尤も多し、何ぞ獨り僧道のみならんや。寺觀の創立常住の供養は、官の之を與ふるにあらざるなり、以ふに衆人の樂施して之を與ふるなり。寺觀に田あれば税賦尤倍し、又、非泛不時の需あり、正に、大家と相似たり。今既に度牒を買ふに錢を以つてし、丁を免するにも又増すに錢を以つてす。官府は絲毫の給無くして、徒に其の利を無窮に責む、則ち僧道は謂つべし不幸なりと。國家名器を愛惜すること泛濫ならば、何を以つて天下を勸勵せん。僧道若し賄を以て金環象環を得て、諸處の住持たるを得ば、則ち、鬻頑無賴の徒、皆賄を以て進まん。何を以て風俗を整齊せんや。況んや寺觀多しと雖も、其常住闕乏のもの甚だ多し。縱令此の令一たび行はるゝも、第能く率ね寺觀の大なるものに斂して、其の小なるものは亦豈能く其需に應せんや。此くの如くなれば、則ち得る處幾何ぞ。況んや僧道能く自ら己の財を出すにあらず、住持た

③孟子に上下交征して國危しとあり。  
④非泛不時の需は臨時の誅求なり。  
⑤大家は豪富なり、寺院の取立富豪に准す。  
⑥兵役免除の爲めに錢を收めざるべからず。  
⑦「れちげもの」ならすもの」を鬻頑無賴と云ふ。



るを求むる、必ず將に之を寺觀に取らんとす。師徒相殘ひ、常住必ず壞れん。所謂膏腴<sup>⑤</sup>は將に蕪穢を見んとす、所謂大厦は將に丘墟を見んとす、所謂温飽は將に凍餒を見んとす。部には牒ありと雖も、誰れか將に之れを請けん、歳に丁ありと雖も、誰れか將に之れを輸せん。今日の軍需は本を糶して諸券を秤提す、爵を鬻ぐにあらざるなし。爵を鬻ぐものは或は國に累あり、牒の多きは官に病なし、乃ち一時不卹の事に従つて、千載の和源を劉喪せば、殆んど理財の長策にあらざるなり。伏して視れば、近ろ指揮を降し、錢を増して爵を鬻ぐこと、識者之を病み、事果して行はれず。總所今來の陳請は、正に亦此に類す。伏して望むらくは、鈞慈利害を詳酌して、敷奏盡行あらんことを。服號の命を寢罷し、僧道に幸甚に勝へざらしめよ、伏して惟みるに鈞慈、俯して鑒念を賜へ、不備。時に江西の蔡無文も亦書あり、是れより先、朝省總領岳柯の奏に因つて、紫衣師號の二等を降し、金環象環并に四字禪師の法號を賜ふて、以つて大寺觀に住し、服師號の綾紙を賜ふ毎に、三百緡を賣出して、仍つて品官條制に附し、官あるにあらすんば差注するを得ず、賜服あるにあらすんば、住持を得ざるべきを乞へり。此の書上つて、事果して寝む、豈大法を祕護する者の用情にあらすや。雙杉の住山能く枯淡を極め、行道に專一なること、機簡堂の如く、私居暗室に居ると雖も、大賓に臨むが如きは、證老衲

⑤膏腴は肥えたる地、蕪穢は荒れ地、丘墟は家跡なり、凍餒は、ひもじがるなり。  
 ⑥輸は金錢を輸入するなり。本は現金。糶は取入るるなり、其れに對する手形を渡すなり。  
 ⑦總所は總領。  
 ⑧官吏の任用例に準するなり、差注は差向くるなり。

に似たり。此れ亦哲人の身を律する、また微細に見ゆるものなり、賢なる哉。枯椿曇<sup>⑨</sup>禪師、清介寡言、瘦坐竟日す。越の大禹寺に開法す。亦澗東より出づ。僧問ふ、「和尚未だ佛心に見えざる時如何ん。」答へて曰く、「人貧なれば道に歸す。」問ふ、「見て後如何ん。」答へて曰く、「色窮つて、皂に歸す。」嘗て擧す、「現成の公案道ひ得るも三十棒、道ひ得ざるも也三十棒」と。侍僧曰く、「望むらくは師慈悲、箇の方便を聞け。」答へて曰く、「將に謂へり、爾は是れ箇の出廐の良駒」と。僧省あり。枯椿は閩の人、後に姑蘇の虎丘に住す、緇素翕然として之を宗とす。

⑨枯椿曇浙翁に嗣ぐ、翁佛照に嗣ぐ、大惠下。  
 ⑩瘦坐は兀坐の意ならん。  
 ⑪自は黒なり。  
 ⑫此坊さん自分が厩を出て居るに氣付かじと見ゆ。  
 ⑬雲巢巖松源に嗣ぐ、松源下別に運庵あり、同名異人なり。  
 ⑭運庵巖は虛堂愚に傳へ、愚は我が大應國師に傳へ、大應は大燈に傳へ、此一流日本に瀰漫す。

雲巢巖<sup>⑬</sup>禪師、訓學倦むことなし、且つ能く節を折つて士に下り、慰藉良に厚し。雋彦之れに歸す。開爐の日、示衆に云く、「是句も亦刻り、非句も亦刻る、雪峯は鞦韆、睦州は擔板、惟だ趙州老漢のみあつて、火爐頭に向つて、香匙火筋を拈起して、東撥西撥す。忽ち一塊を撥ひ得たり、恰も是れ饒州の景德、人家の壁角頭、多年の破磁碗、三世の如來、只管に見る」と。運庵曰く、「此の語酷だ父翁の松源に似たり。」南翁明<sup>⑭</sup>禪師、初め入衆の時、便ち能く決志參禪す。嘗つて天台の石橋に宿し、異僧に遇ふ、指して老佛心に見えしむ。翁太白に至り、誠を投じて其の法席に預る、然れども室中纔に口を開けば、



便ち叱せらる。私かに自念して曰く、「今生に了せずんば、則ち來生あり。」已にして泪下つて願に交はる。後に癡鈍の會中に在つて侍者となる、晚參侍立して、鐘聲を聞く。鈍曰く、「什麼の聲ぞ。」翁曰く、「鐘聲。」鈍曰く、「聲耳畔に来るか、耳聲邊に往くか。」翁薄邊にして未だ答へず、大に叱せらる、汗流れて體を浹す。始めて自語して曰く、「元來浙翁平日我れを叱罵するは、皆是れ徹骨徹髓なり。」鈍尋常只だ其れに百丈野狐の話を看せしむ。一日鈍曰く、「不落不昧の時如何ん。」翁應聲して曰く、「不落不昧、鴛鴦一對、水上に浮沈す。如意自在。」鈍撫して之を印す。翁は泉州黃氏の子、隆南山と同じ嶺を出づる者、里に歸つて溪上の教忠に住す。莆中の囊山に住するに至つて、方に入寂す。

西山亮 禪師は福州の人、枯硬儉約なり。嘗つて紙被一張を蓄ふ、補粘殆んど遍し、寒暑易へず。鼓山の首座寮より雲門の請に赴き、黃檗に遷るに、未だ曾つて別に換へず。侍僧一夜酒かに絹衾を以て之に易ふ。亮驚叫、責めて曰く、「我れ福鮮し、平生未だ曾つて練素を服せず、況んや此の被、相隨ふこと三十年なり、其れ棄つべけんや。」聞く者謂ふ、「其の住山古人の風あり」と。後に退席して永陽の雁湖山中に入り、道者と刀耕火種して、終る所を知るなし。

平江府萬壽の訥堂辯 禪師、同參に寄する偈に曰く、「猿と龜と交る、割けども開かず。兄呼弟應、

① 南翁癡鈍に嗣ぐ、圓悟下四世。  
② 西山亮は華藏の宗演に嗣ぐ、大惠下なり。  
③ 刀耕は刈り取り耕すなり、火種は草を焼いて植ふ付けるなり。  
④ 訥堂淨辯は雲巢道巖に嗣ぐ、巖は松源に嗣ぐ。

忘懷に似たり。話して 諸訛の處に到るに及び、却つて道ふ、心肝帶來せず、と。時に亦之を稱す。後八たび道場に坐し、提唱阪に丸を走らすが如し、真に 巖黙の子、岳髻の孫たるを辱しのざるなり。

介石朋禪師曰く、「別峯珍和尚、鼓山を退いて育王に詣り、大慧に見えんと候ふ。一蒲團佛殿の後に於て、坐すること七十九日、因みに、秦國太夫人大慧を請じて陸座せしむ。私かにみづから喜んで曰く、「今日見るを得ること必せり」と。果して一見を得、語室中に合ふ。復た三轉語を投じて去る。大慧大に之を奇とし、遂に宏智と同じく之を擧げ、岳林に住す。今寺中に塔あつて存す。別峯偏身に長毫あり、時に珍獅子と號す。「介石其の墨跡に題して、略々言ふこと此の如し。別峯既に法を佛心才に得、雄席に高踞して道顯著す。復た妙喜に見ゆるを求むるに勇なり、其意謂何ん、璞と懿の其行を遅々すると、同日にして語るべからず、是れ一代宗師の標準たる所以なり。噫今は只だ一後學、七十九日まで、尊宿を見るを俟つを欲するも亦難し。」

守愆庵主 ① 蒲の人、② 滿年具戒し、囊山の下巖に居る。巖に就いて屋を縛し、聊か風雨を蔽ふの

① 諸訛は入り組みなり。  
② 巖黙は岩雲集なり、當時蘇州の人を呼びて黙と爲す、巖は蘇州の人、岳髻は松源なり、松源諱崇岳老いて耳聾す、故に云爾。  
③ 秦國夫人計氏、法名法眞、大惠に嗣法す、紫岩居士張浚の母なり、浚は張南軒の父。  
④ 道璞疊懿皆大惠に嗣法、疊懿初め圓悟に參じ自らは是として興化の祥雲に出世す、時に道璞懿を佐輔す、大惠其所見の未了を知つて書を致して召せども往かず、是れ其行を遅々するなり。  
⑤ 嗣法を知らず。  
⑥ 滿年具戒は年二十を過ぎ初めて具足戒を受くるなり。